

ノ證據ナキニ於テハ支出ヲ約セサル爲メ代理ノ履行ヲ遲延スルコトヲ得ス  
第二百四十七條 謝金ハ代理ノ全部履行アリタル後ニ非サレハ委任者之ヲ負擔セス  
但一分ツツ辨濟ス可キコトヲ諾約シタルトキハ此限ニ在ラス  
代理人ノ責ニ歸セサル原因ニ由リテ全部ノ履行ニ妨礙アリタルトキハ謝金ハ其履  
行ノ割合ニ應シテ委任者之ヲ負擔ス

第二百四十八條 委任者カ義務ヲ辨濟スルニ至ルマテ代理人ハ代理ニ依リテ所持シ  
且債權者ト爲レル原因タル物ノ上ニ留置權ヲ有ス

第二百四十九條 數人カ唯一ノ證書又ハ各別ノ證書ヲ以テ共同事件ノ爲メ代理ヲ委  
任シタルトキハ委任者ノ各自ハ連帶シテ上ノ義務ヲ負擔ス但反對ノ要約アルトキ  
ハ此限ニ在ラス

第二百五十條 委任者ハ代理人カ委任ニ從ヒ委任者ノ名ニテ約束セシ第三者ニ對  
シテ負擔シタル義務ノ責ニ任ス

委任者ハ左ノ場合ニ於テハ代理人ノ權限外ニ爲シタル事柄ニ付テモ亦其責ニ任ス  
第一 委任者カ明示又ハ默示ニテ代理人ノ行爲ヲ認諾シタルトキ

第二 委任者カ代理人ノ行爲ニ因リテ利益ヲ得タルトキ但其利益ノ限度ニ從フ

第三 第三者カ善意ニシテ且代理人ニ權限アリト信スル正當ノ理由ヲ有シタル  
トキ

第四百節 代理ノ終了  
第二百五十一條 代理ノ履行又ハ其履行ノ不能及ヒ代理ニ付シタル期限ノ到來又ハ  
條件ノ成就ノ外尙ホ代理ハ左ノ諸件ニ因リテ終了ス

第一 委任者ノ爲シタル廢罷

第二 代理人ノ爲シタル拋棄

第三 委任者又ハ代理人ノ死亡、破産、無資力若クハ禁治産

第四 委任者カ代理ヲ委任シ又ハ代理人カ之ヲ受諾セシ原因タル資格ノ絶止

第二百五十二條 委任者ノミノ利益ノ爲メニ委任セシ代理ノ廢罷ハ謝金ヲ諾約シタ  
ルトキト雖モ委任者ハ何時ニテモ隨意ニ之ヲ爲スコトヲ得

第二百五十三條 廢罷ハ將來ニ向ヒテノミ有効ナリ且其廢罷前ニ有効ニ爲シタル事  
柄ヲ害セス

第二百五十四條 數人ノ委任者アルトキハ其中ノ一人ノ爲シタル廢罷ハ他ノ人ノ代  
理ヲ終了セシメス

第二百五十五條 代理ノ廢罷ハ默示タルコトヲ得默示ノ廢罷ハ同一ノ事件ニ付キ新  
代理人ノ選任又ハ委任者ノ管理ノ回復其他ノ事情ヨリ生スルモノナリ

第二百五十六條 代理ノ拋棄カ委任者ニ損害ヲ生セシメタルトキハ代理人ハ其賠償  
ノ責ニ任ス但正當又ハ己ムヲ得サル原因ニ基キタルトキハ此限ニ在ラス

代理ノ拋棄モ亦默示ニテ之ヲ爲スコトヲ得

第二百五十七條 代理終了ノ原因ハ委任者ヨリ出テタルト代理人ヨリ出テタルトチ  
問ハス當事者カ其告知ヲ受ケタルカ又ハ確實ニ之ヲ知リタルトキニ非サレハ當事  
者互ニ之ヲ以テ對抗スルコトヲ得ス

當事者ノ一方ノ死亡シタル場合ニ於テハ其相續人ヨリ告知スルコトヲ要ス

第二百五十八條 委任者カ代理人ヨリ委任狀ヲ取戻シタルトキト雖モ懈怠ナシニ代  
理ノ終了ヲ知ラスシテ代理人ト約束シタル第三者ニハ代理終了ノ原因ヲ以テ對抗  
スルコトヲ得ス

民法△財産取得編

第二百五十九條 代理カ上ニ掲ケタル原因ノ一ニ由リテ終了セシトキハ代理人又ハ其相續人ハ委任者又ハ其相續人カ既ニ生シタル利益ヲ自ラ處理シ又ハ新代理人ヲシテ之ヲ處理セシムルコトヲ得ルニ至ルマテ其利益ヲ處理スルコトヲ要ス  
此規定ハ代理ノ終了カ代理人ノ拋棄ニ因レルトキハ委任者ノ廢罷ニ因レルトキヨリモ一層嚴ニ之ヲ適用ス

第十二章 雇傭及ヒ仕事請負ノ契約

第一節 雇傭契約

第二百六十條 使用人、番頭、手代、職工其他ノ雇傭人ハ年、月又ハ日ヲ以テ定メタル給料又ハ賃銀ヲ受ケテ勞務ニ服スルコトヲ得

雇傭ハ地方ノ慣習ニ因リ定マリタル時期ニ於テ又ハ確定ノ慣習ナキトキハ何時ニテモ一方ヨリ豫メ解約申入ヲ爲スニ因リテ終了ス但其解約申入ハ不利ノ時期ニ於テ之ヲ爲サス又惡意ニ出テサルコトヲ要ス

第二百六十一條 雇傭ノ期間ハ使用人、番頭、手代ニ付テハ五個年職工其他ノ雇傭人ニ付テハ一個年ヲ超ユルコトヲ得ス但習業契約ニ關スル下ノ規定ヲ妨ケス

此ヨリ長キ時期ヲ約シタルニ於テハ當事者ノ一方ノ隨意ニテ右ノ時期ニ之ヲ短縮ス但更新ヲ爲ス權能ヲ妨ケス

第二百六十二條 雇傭ハ時期ヲ定メタルトキト雖モ當事者ノ一方ノ義務不履行ニ因ル解除ノ爲メ又ハ一方ヨリ出テタル正當ニシテ且己ムヲ得サル原因ノ爲メ其定期前ニ於テ終了ス

如何ナル場合ニ於テモ主人ノ一身ニ關スル雇傭ハ其死亡ノ爲メ當然終了ス  
第二百六十三條 雇傭ヲ終了セシムル正當ノ原因カ主人ヨリ出テ且地方ノ慣習ニ從

ヒ雇傭ノ新契約ヲ爲スニ困難ナル季節ニ生シタルトキハ裁判所ハ事情ニ從ヒテ定ムル賃金ヲ雇傭人ニ付與セシムルコトヲ得

第二百六十四條 如何ナル場合ニ於テモ雇傭人ノ死亡ハ契約ヲ終了セシム但其相續人ハ給料又ハ賃銀ノ取越過額ヲ返還ス

第二百六十五條 上ノ規定ハ角力、俳優、音曲師其他ノ藝人ト座元興行者トノ間ニ取結ヒタル雇傭契約ニ之ヲ適用ス

第二百六十六條 醫師、辯護士及ヒ學藝教師ハ雇傭人ト爲ラス此等ノ者ハ其患者、訴訟人又ハ生徒ニ諾約シタル世話ヲ與ヘ又ハ與ヘ始メタル世話ヲ繼續スルコトニ付キ法定ノ義務ナシ又患者、訴訟人又ハ生徒ハ此等ノ者ノ世話ヲ求メテ諾約ヲ得タル後其世話ヲ受クル責ニ任セス

然レトモ實際世話ヲ與ヘタルトキハ相互ノ分限ト慣習及ヒ合意トヲ酌量シテ其謝金又ハ報酬ヲ裁判上ニテ要求スルコトヲ得

此等ノ者ノ世話ヲ受クルコトヲ諾約シタル後正當ノ原因ナクシテ之ヲ受クルコトヲ拒絕シタル者ハ其拒絕ヨリ此等ノ者ニ金錢上ノ損害ヲ生セシメタルトキハ其賠償ノ責ニ任ス

之ニ反シテ世話ヲ與フルコトヲ諾約シタル後正當ノ原因ナクシテ之ヲ拒絕シタル者ニ因リテ加ヘタル損害ヲ賠償スル責ニ任ス

第二節 習業契約

第二百六十七條 工業人、工匠又ハ商人ハ習業契約ヲ以テ習業者ニ自己ノ職業上ノ知識ト實驗トヲ傳授シ習業者ハ其人ノ勞務ニ助力スルヲ約スルコトヲ得  
未成年者ハ其父、後見人其他自己ニ對シテ權力ヲ有スル人ノ保佐又ハ名代ニ依ル

ニ非サレハ習業契約ヲ取結フコトヲ得ス

第二百六十八條 合式ニ保佐ヲ受クル未成年者又ハ其代人ノ取結ヒタル習業契約ハ其未成年ノ時期ヲ超ユルコトヲ得ス但習業者カ成年ニ達シタル後其契約ヲ更新シ又ハ之ヲ伸長スルコトヲ妨ケス

第二百六十九條 習業契約ハ當事者相互ノ義務ノ性質及ヒ廣狹ヲ定ム

習業契約ノ不備ハ師匠又ハ親方ノ其職業ヲ行フ地方ノ慣習ニ從ヒテ之ヲ補充スルコトヲ得

第二百七十條 師匠又ハ親方ハ習業者ニ衣食及ヒ職業ノ器具ヲ與ヘ且日常ノ使用ヲ足ラシムルコトヲ要ス但反對ノ合意ナク且地方ノ慣習ノ此ニ異ナラサルトキニ限ル

師匠又ハ親方ハ習業者ニ其習業契約ノ目的タル職業ヲ學ブコトヲ得セシムル爲メ必要ナル時間ヲ與ヘ世話ヲ爲シ及ヒ諸般ノ便利ヲ圖ルコトヲ要ス

未成年ノ習業者カ未タ算筆ヲ知ラサルトキハ師匠又ハ親方ハ何等ノ反對ノ合意アルモ習業者ニ算筆修習ノ爲メ休憩時間外ニ於テ毎日少ナクトモ一時間ヲ與フルコトヲ要ス

第二百七十一條 習業者ハ其習ハント欲スル職業ニ關シ日日ノ時間及ヒ勞務ヲ師匠又ハ親方ニ供スルコトヲ要ス

第二百七十二條 習業者カ自己又ハ其親屬ノ疾病其他ノ不可抗ノ原因ニ由リテ一个月以上引續キ勞務ヲ供スルコト能ハサルトキハ習業者ハ其成年ニ達シタル後ト雖モ習業契約ノ期限滿了後ニ於テ前契約ニ同シキ相互ノ條件ヲ以テ休業シタル時間ヲ補足スルコトヲ要ス

第二百七十三條 習業契約ハ左ノ諸件ニ因リテ當然終了ス

第一 師匠、親方又ハ習業者ノ死亡

第二 師匠、親方又ハ習業者ノ陸海軍ノ現役

第三 師匠、親方又ハ習業者ノ重罪又ハ三ヶ月ヲ超ユル禁錮ノ處刑

第四 合意又ハ法律ヲ以テ定メタル期間ノ滿了

第二百七十四條 左ノ原因アルトキハ解除ノ利益ヲ得ル一方ノ當事者ノ請求ニ因リ裁判所ハ契約ノ解除ヲ宣告スルコトヲ得

第一 相互ノ義務ノ不履行但不可抗ノ原因ニ由ルトキモ亦同シ

第二 習業者ニ對スル師匠又ハ親方ノ苛酷ナル取扱

第三 習業者ノ平常ノ不品行

第四 前條ニ掲ケタル場合ノ外師匠、親方又ハ習業者ノ犯罪

第五 契約ヲ履行ス可キ土地外ニ師匠又ハ親方ノ轉居

本條ニ依リテ解除ノ宣告ヲ受ケタル當事者ノ一方ハ自己ニ過失アルトキハ他ノ一方ニ對シテ尙ホ其損害ヲ賠償ス可キノ言渡ヲ受ク前條ニ掲ケタル處刑言渡ノ場合ニ於テモ亦同シ

第三節 仕事請負契約

第二百七十五條 工技又ハ勞力ヲ以テスル或ル仕事ヲ其全部又ハ一分ニ付キ豫定代價ニテ爲スノ合意ハ注文者ヨリ主タル材料ヲ供スルトキハ仕事ノ請負ナリ若シ請負人ヨリ主タル材料ト仕事トヲ供スルトキハ仕事ヲ爲ス可キ條件附ノ賣買ナリ

第二百七十六條 前條ニ掲ケタル二箇ノ場合ニ於テ物ノ全部又ハ一分ニ付キ既ニ仕事ヲ爲シタル後ニ意外ノ事又ハ不可抗力ニ因リテ其物ノ滅失セシトキハ材料ノ滅

失ハ其材料ノ屬スル者之ヲ負擔シ請負人ハ仕事賃ヲ損失ス  
當事者ノ一方カ其所爲ニ因リテ滅失ヲ來タシタルカ又ハ引渡若クハ受取ニ付キ遲  
滯ニ在ルトキハ其一方ノミ材料及ヒ仕事賃ニ付キ其滅失ヲ負擔ス但損害アルトキ  
ハ其賠償ノ責ニ任ス

請負人ヨリ材料ヲ供シタル場合ニ於テ一分ノ滅失又ハ單一ナル毀損カ物ニ其價額  
ノ半以上ヲ失ハシムルトキハ之ヲ全部ノ滅失ト同視ス又其減價カ半以下ニ在ルト  
キハ財産編第四百四十六條第四百十九條第三項及ヒ第四百二十條ノ規定ヲ適用ス  
注文者ヨリ材料ヲ供シタルトキハ注文者ハ滅失又ハ毀損ノ後存在スル材料ノ部分  
ノ増價シタル限度ニ從ヒテ仕事賃ヲ辨濟スル責ニ任ス

第二百七十七條 注文者ヨリ材料ヲ供シタル場合ニ於テハ仕事完成ノ後ニ非サレハ  
引渡ヲ實行セサル可キト雖モ一分宛仕事ヲ調査シ且之ヲ受取ルヲ合意スルコ  
トヲ得

此場合ニ於テ注文者カ既成ノ仕事ヲ調査シテ受取リタルトキ又ハ之ヲ調査スルコ  
トノ遲滯ニ在ルトキハ請負人ハ既成ノ仕事ニ付キ其危險ノ責ヲ免カル  
仕事中ニ注文者ヨリ前金又ハ内金ヲ供シタルモ此ヲ以テ既成ノ仕事ヲ受取リタリ  
ト看做サス然レトモ物カ注文者ノ明白ナル受取又ハ其付遲滯ノ以前ニ滅失シタル  
トキハ注文者ハ既成ノ仕事ヲ起ユル部分ニ非サレハ前金又ハ内金ヲ取戻スコトヲ  
得ス

第二百七十八條 注文者カ異議ヲ留メスシテ工作物ヲ受取リタルモ後日其物ノ使用  
ニ不適當ナル隠レタル瑕疵ヲ發見スルトキハ注文者ハ其受取ヲ取消シテ代價ノ減  
殺又ハ其一分ノ返還ヲ請求スル權利ヲ失ハス

此權利ニ基キタル訴權ハ注文者ニ屬スル動産又ハ不動産ノ上ニ施シタル仕事ニ付  
テハ全部ノ工作物ヲ受取リタル後ノ三ヶ月ニテ消滅ス

職工ヨリ材料ヲ供シタル製作物ニ付テハ第九十九條ノ規定ヲ適用ス  
第二百七十九條 建物、牆壁其他地上ニ於ケル大ナル工作物ヲ請負ニテ築造シタル  
トキハ請負人ハ築造ノ瑕疵又ハ地盤ノ瑕疵ヨリ生シタル其工作物ノ全部若クハ一  
分ノ滅失又ハ重大ナル損壞ノ責ニ任ス但請負人カ他人ノ土地ニ築造シタルト自己  
ノ土地ニ築造シタルト材料ヲ供シタルト否トヲ區別セス  
右責任ハ左ノ時期ノ間繼續ス

第一 牆壁其他土工ニ付テハ其受取後二個年

第二 木造ノ建物ニ付テハ三個年

第三 石又ハ煉瓦ノ建物及ヒ土藏ニ付テハ十個年

第二百八十條 右ノ責任ニ基キタル賠償訴權ハ左ノ時期ヲ以テ時効ニ罹ル

第一 物ノ全部ノ滅失ノ場合ニ於テハ其滅失ノ時ヨリ一個年

第二 物ノ一分ノ滅失又ハ重大ノ毀損ノ場合ニ於テハ請負人ノ責ニ任ス可キ期  
間ノ滿了ノ時ヨリ六個月

第二百八十一條 經畫ノ變更ヨリ代價ノ増減ヲ生ス可キモ書面ヲ以テ之ヲ定メサル  
トキハ其變更ヲ口實トシテ請負人ハ原代價ノ増加ヲ請求シ注文者ハ其減少ヲ請求  
スルコトヲ得ス

請負中ニ包含シタル建築ト全ク別ナル建築ヲ爲シ又ハ請負中ノ區分アル建築ヲ廢  
セシトキハ此規定ヲ適用セス此場合ニ於テ當事者ノ間ニ一致ヲ得サルトキハ裁判  
所原代價ノ増減ヲ定ム

請負人ハ經畫又ハ其變更カ注文者ノ指圖ニ出テタルコトヲ口實トシテ第二百七十九條ニ定メタル責任ヲ免カルルコトヲ得ス但請負人カ書面ヲ以テ此責任ヲ免カルルコトヲ得タルトキハ此限ニ在ラス

第二百八十二條 請負人カ仕事ノミヲ供スルト材料ヲ併セ供スルトヲ問ハス注文者ハ常ニ自己ノ意思ノミヲ以テ契約ヲ解除スルコトヲ得然レトモ注文者ハ請負人ノ既成ノ仕事ノ質銀及ヒ準備ノ材料ニ受ケタル損失其他ノ損害ヲ賠償シ且其契約ニ因リテ得ヘキ正當ナル利益ノ全部ヲ辨濟スル義務ヲ負擔ス

第二百八十三條 他人ノ材料ヲ以テ仕事ノ全部ニ供シタルト一分ニ供シタルト又其仕事ヲ實行シタルト契約ヲ解除シタルトヲ問ハス請負人ハ仕事ノ爲メ又ハ解除ノ賠償ノ爲メ自己ノ受ク可キ金額ノ皆濟ニ至ルマテ其材料ヲ留置スルコトヲ得但此留置權ハ動産物ノミニ之ヲ適用ス

第二百八十四條 注文者カ請負人其者ノ仕事ヲ主眼トシテ契約ヲ取結ヒタルトキハ其契約ハ請負人ノ死亡又ハ其仕事ノ不能ニ因リテ之ヲ解除スルコトヲ得右二箇ノ場合ニ於テ注文者ハ自己ノ期望セシ用途ニ付キ利シタル仕事又ハ材料ノ價額ノミヲ請負人又ハ其相續人ニ辨濟スル責ニ任ス

第二百八十五條 仕事ノ一分ニ任シタル下請負人ト請負人トノ關係ニ付テハ上ノ規定ニ從フ  
請負人カ下請負人ニ對シ負擔スル金額ヲ辨濟セサルトキハ下請負人ハ自己ノ名ヲ以テ直接ニ注文者ニ對シ其注文者ノ猶ホ請負人ニ辨濟ス可キ債務ノ限度ニ於テ訴ヲ起スコトヲ得  
職工モ亦己レテ雇ヒタル者カ質銀ヲ辨濟セサルトキハ注文者ニ對シテ右ト同一ノ

權利ヲ有ス

除民法中財産取得編人事編ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

御名 御璽

明治廿三年十月六日

法律第九十八號

民法財産取得編目錄

第十三章 相續

總則

第一節 家督相續

第一款 家督相續ノ通則

第二款 家督相續人ノ順位

第三款 隱居家督相續ノ特別規則

第二節 遺産相續

第三節 國ニ屬スル相續

第四節 相續ノ受諾及ヒ拋棄

第一款 單純ノ受諾

第二款 限定ノ受諾

第三款 拋棄

第四款 相續人ノ曠缺セル相續財産ノ處分

第十四章 贈與及ヒ遺贈

總則

第一節 贈與又ハ遺贈ヲ爲シ又ハ收受スル能力

第二節 贈與

第一款 贈與ノ方式

第二款 贈與ノ廢罷

第三節 夫婦間ノ贈與ノ特例

第四節 遺贈

第一款 遺言ノ方式

第二款 遺言ノ特別方式

第三款 遺贈ヲ爲スコトヲ得ル財産ノ部分

第四款 遺言ノ効力及ヒ執行

第五款 遺言ノ廢罷及ヒ失効

第五節 包括ノ贈與又ハ遺贈ニ基ク不分財産ノ分割

第一款 分割

第二款 分割ノ効力及ヒ擔保

第三款 分割ノ銷除

第十五章 夫婦財産契約

第一節 總則

第二節 法定ノ制

民法

財產取得編

第十三章 相續

總則

第二百八十六條 相續ニ二種アリ家督相續及ヒ遺產相續是ナリ

第一節 家督相續

第二百八十七條 家督相續トハ戶主ノ死亡又ハ隱居ニ因ル相續ヲ謂フ

第一款 家督相續ノ通則

第二百八十八條 家督相續ヲ爲スハ一家一人ニ限ル

何人ト雖モ二家以上ノ家督相續ヲ爲スコトヲ得ス

第二百八十九條 婚姻又ハ養子縁組ニ因リ他家ニ入りテ其家ニ在ル者ハ實家其他ノ

家ノ家督相續ヲ爲スコトヲ得ス

第二百九十條 一人ニシテ數家ノ家督相續人ニ指定セラレ又ハ選定セラレタル者

ハ其中ノ一ヲ選定スルコトヲ得

第二百九十一條 推定家督相續人ハ他家ノ家督相續人ニ指定セラレ又ハ選定セラレ

タルモ其指定又ハ選定ハ無効トス

第二百九十二條 被相續人ヲ死ニ致シ又ハ死ニ致サントシタル爲メ刑ニ處セラレタ

ル者ハ相續ヨリ除斥セラル但過失ニ因ルモノハ此限ニ在ラス

第二百九十三條 相續除斥ノ訴權ハ被相續人ノ明示ノ宥免ニ因リテ消滅ス

第二百九十四條 家督相續人ハ姓氏、系統、貴號及ヒ一切ノ財産ニ相續シテ戶主ト爲

系譜、世襲財産、祭具、墓地、商號及ヒ商標ハ家督相續ノ特權ヲ組成ス

第二款 家督相續人ノ順位

第二百九十五條 法律ニ於テ家督相續人ト爲ル可キ者ノ順位ヲ定ムルコト左ノ如シ

第一 被相續人ノ家族タル卑屬親中親等ノ最モ近キ者

第二 卑屬親中同親等ノ男子ト女子ト有ルトキハ男子

第三 男子數人アルトキハ其先ニ生マレタル者但嫡出子ト庶子又ハ私生子ト有ルトキハ嫡出子

第四 女子ノミ數人アルトキハ其先ニ生マレタル者但嫡出子ト庶子又ハ私生子ト有ルトキハ嫡出子

然レトモ右ノ規定ニ從ヒテ家督相續人タル可キ者カ被相續人ニ先ダチテ死亡シ又ハ第二百九十七條ニ掲ケタル原因ニ由リテ廢除セラレタル場合ニ於テ其者ニ卑屬親アルトキハ其卑屬親ハ法定ノ順位ニ依リテ家督相續人ト爲ル

第二百九十六條 被相續人ハ正當ノ原因アルニ非サレ法定ノ推定家督相續人ヲ廢除スルコトヲ得ス

第二百九十七條 法定ノ推定家督相續人ヲ廢除スルコトヲ得ヘキ正當ノ原因ハ左ノ如シ

第一 失踪ノ宣言

第二 民事上禁治産及ヒ准禁治産

第三 重禁錮一年以上ノ處刑

第四 家政ヲ執ルニ堪ヘサル不治ノ疾病

第五 祖父母、父母ニ對スル罪ノ處刑

第六 重罪ニ因レル處刑

第二百九十八條 推定家督相續人ノ廢除ハ遺言書ヲ以テ之ヲ爲シ又ハ身分取扱吏ニ

申述シテ之ヲ爲スコトヲ得

申述ニ基ク家督相續人ノ廢除ハ被相續人之ヲ取消スコトヲ得

廢除ノ取消ハ身分取扱吏ニ申述シテ之ヲ爲ス

第二百九十九條 法定ノ家督相續人アルトキハ被相續人ハ家督相續人ヲ指定スルコ

トヲ得ス但此規定ニ違ヒタル指定ト雖モ被相續人ノ死亡ノ日ニ法定ノ家督相續人

アラサルトキハ有効トス

第三百條 家督相續人ノ指定ハ遺言書ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第三百一條 法定又ハ指定ノ家督相續人アラサル場合ニ於テ其家ニ死亡者ノ父アル

トキハ父、父アラサルトキハ母ハ左ノ順序ニ從ヒ家族中ヨリ家督相續人ヲ選定ス

第一 兄弟

第二 姉妹

第三 兄弟姉妹ノ卑屬親中親等ノ最モ近キ男子若シ男子アラス又ハ拋棄シタル

トキハ女子

第三百二條 前條ノ場合ニ於テ父母アラサルトキハ家督相續人選定ノ權利ハ親族會

ニ屬ス但親族會ハ前條ニ定メタル選定ノ順序ヲ變更スルコトヲ得ス

第三百三條 第三百一條ノ規定ニ從ヒ選定スコキ家督相續人アラサルトキ又ハ皆拋

棄シタルトキハ其家ニ在ル尊屬親中親等ノ最モ近キ者任意ニ家督相續ヲ爲スコト

ヲ得

第三百四條 前條ノ家督相續人アラサルトキハ配偶者家督相續ヲ爲スコトヲ得

第三百五條 親族會ハ前數條ニ記載シタル相續人アラサルトキ又ハ皆拋棄シタルトキニ非サレハ他人ヲ選定スルコトヲ得ス

第三款 隱居家督相續ノ特別規則

第三百六條 隱居ヲ爲スニハ左ノ條件ノ具備スルコトヲ要ス

第一 滿六十年以上ナルコト

第二 任意ニ出タルコト

第三 成年ニシテ且實際家政ヲ執ルノ能力アル家督相續人カ單純ノ受諾ヲ爲シタルコト

第四 配偶者ノ承諾シタルコト

第三百七條 隱居者カ重病其他ノ原因ノ爲メニ實際家政ヲ執ル能ハサルトキ又ハ分家ノ戸主カ本家ヲ承繼スルノ必要アルトキハ本人ノ申立ニ因リ區裁判所ハ年齢ノ條件ヲ宥恕スルコトヲ得

第三百八條 隱居者ノ配偶者、親族及ヒ檢事ハ左ノ原因ノ一ニ基キ隱居届出ノ日ヨリ六十日内ニ故障ヲ申立ツルコトヲ得

第一 第三百六條第一號乃至第三號ノ條件ニ違ヒタル事實

第二 家督相續ヲ爲ス者カ推定家督相續人ニ非サル事實

又隱居カ任意ニ出テサリシ場合ニ於テハ隱居者モ亦故障ヲ申立ツルコトヲ得

第三百九條 隱居カ第三百六條第四號ノ條件ニ違ヒタル事實アルトキハ隱居者ノ配偶者ニ限り故障ヲ申立ツルコトヲ得

又隱居者カ債權者ヲ詐害スルノ意思ヲ以テ隱居ヲ爲サントスルトキハ債權者ハ故障ヲ申立ツルコトヲ得

前條ノ期間ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第三百十條 隱居ヲ爲ストキハ當事者ヨリ其旨ヲ身分取扱吏ニ届出ツ可シ

第三百十一條 隱居家督相續ハ届出前ノ利害關係人ニ對シテハ第三百八條ニ定メタル期間滿限ノ日ヨリ又故障アリタルトキハ其故障ノ棄却確定シタル日ヨリ死亡ニ因ル相續ト同一ノ効力ヲ生ス但隱居者ノ終身ヲ限度トスル權利及ヒ義務ヲ消滅セシメス

第二節 遺産相續

第三百十二條 遺産相續トハ家族ノ死亡ニ因ル相續ヲ謂フ

第三百十三條 家族ノ遺産ハ其家族ト家ヲ同フスル卑屬親之ヲ相續シ卑屬親ナキトキハ配偶者之ヲ相續シ配偶者ナキトキハ戸主之ヲ相續ス

第三百十四條 卑屬親カ遺産ヲ相續スル場合ニ於テハ第二百九十五條ノ規定ヲ適用ス

第三節 國ニ屬スル相續

第三百十五條 相續人アラサル財産ハ當然國ニ屬ス

國ハ限定ノ受諾ヲ以テ相續ス

第三百十六條 國ニ屬ス可キ相續財産ハ其領收ヲ爲スニ至ルマテ相續人曠缺ノ財産ヲ管理ス如ク之ヲ管理ス

第四節 相續ノ受諾及ヒ拋棄

第三百十七條 相續人ハ相續ニ付キ單純若クハ限定ノ受諾ヲ爲シ又ハ拋棄ヲ爲スコトヲ得但法定家督相續人ハ拋棄ヲ爲スコトヲ得ス又隱居家督相續人ハ限定ノ受諾ヲ爲スコトヲ得ス



第三百十八條 隱居家督相續ヲ除ケ外相續人ハ相續財産ヲ調査スル爲メ相續ノ日ヨリ三個月ノ期間ヲ有ス但裁判所ハ情況ニ因リ更ニ三個月内ノ延期ヲ許スコトヲ得受諾又ハ拋棄ヲ決定スル爲メ一個月ノ期間ヲ有ス此期間ハ調査期間滿限ノ日又ハ其前ニ實際ノ調査ヲ終了シタル日ヨリ之ヲ算ス

第三百十九條 相續人ハ調査又ハ決定ノ期間内相續財産ニ關スル一切ノ訴訟手續ヲ停止セシムルコト得

第三百二十條 相續財産ニ關スル訴訟ニ要セシ費用ハ法律上ノ期間内ニ係ルモノト裁判所ノ許シタル延期内ニ係ルモノトヲ問ハス總テ相續財産ノ負擔トス但相續人ノ所爲又ハ過失ニ因リテ要セシ費用ハ此限ニ在ラス

第三百二十一條 相續財産中ニ損敗シ易ク又ハ保存スルニ著シキ費用ノ要スル物品アルトキハ調査又ハ決定ノ期間内ト雖モ裁判所ノ許可ヲ得テ其物品ヲ競賣ニ付スルコトヲ得但日用品ハ裁判所ノ許可ヲ經スシテ之ヲ處分スルコトヲ得

第一款 單純ノ受諾

第三百二十二條 相續人カ被相續人ノ財産ニ關シ明示又ハ默示ニテ其代表者ト爲ルノ意思ヲ顯ハストキハ單純ノ受諾トス

第三百二十三條 左ノ如キ場合ニ於テハ默示ノ受諾アリトス

第一 相續財産ノ一箇又ハ數箇ニ付キ他人ノ爲メニ所有權ヲ讓渡シ又ハ其他ノ物權ヲ設定シタルトキ但財産編第百十九條以下ノ制限ニ從ヒタル賃借權ノ設定ハ此限ニ在ラス

第二 相續人カ第三百十八條ノ期間内ニ限定受諾又ハ拋棄ヲ爲ササルトキ右ノ外尙ホ第三百二十七條第二號ノ場合ハ單純ノ受諾ヲ成ス

第三百二十四條 受諾ハ在ノ原因ノ一アルニ非サレハ之ヲ銷除スルコトヲ得ス

第一 身體又ハ財産ニ強暴ヲ加ヘラレタルニ因リテ受諾シタルトキ

第二 詐欺ノ爲メニ受諾シタルトキ

第三 無能力者又ハ後見人カ方式ニ違ヒテ受諾シタルトキ

第四 受諾ノ時成立セルコトヲ知ラサル債務ノ爲メ破産又ハ無資力ト爲ルニ至ル可キトキ

此銷除訴權ハ財産編第五百四十四條以下ニ規定シタル銷除訴權ノ期間及ヒ條件ニ從フ

第二款 限定ノ受諾

第三百二十五條 相續人カ相續財産ノ限度マテニ非サレハ債務ノ辨償ノ責ニ任セサルトキハ限定ノ受諾トス

第三百二十六條 相續人ニシテ限定ノ受諾ヲ爲スノ意思ヲ有スル者ハ第三百十八條期間内ニ調査シタル財産ノ目錄ヲ相續地ノ區裁判所ニ差出タシ其申述ヲ爲シ裁判所ハ別段ニ備ヘタル帳簿ニ之ヲ記載ス可シ

第三百二十七條 左ノ場合ニ於テハ相續人ハ限定受諾ヲ爲スノ權利ヲ失フ

第一 單純ノ受諾ヲ爲シタルトキ  
第二 相續財産ヲ私取シ若クハ隱匿シ又ハ惡意ヲ以テ財産目錄中ニ相續財産ノ幾分ヲ記載セサリシトキ

第三百二十八條 限定受諾者ハ其特有財産ニ於ケルト同一ノ注意ヲ以テ相續財産ヲ管理シ債權者及ヒ受遺者ニ其計算ヲ爲スコシ但此計算ハ債務及ヒ遺贈ノ辨濟ノ爲メ相續財産ヲ拂盡シタル後一個月内ニ之ヲ完了スルコトヲ要ス

第三百二十九條 限定受諾者ハ動産ト不動産トヲ問ハス總テ相續財産ノ賣却ヲ要スルトキハ區裁判所ノ許可ヲ得テ之ヲ競賣ニ付ス可シ

第三百三十條 限定受諾者ハ適法ニ賣却シタル財産ノ各箇ニ付テ得タル代價ヲ混同セス其各箇ニ付テ優先權ヲ有スル債權者ニ順次ニ辨濟ス可シ

第三百三十一條 相續ノ負擔スル債務又ハ遺贈ノ辨濟ヲ差押ヘ又ハ其辨濟ニ付キ異議ヲ述フル債權者又ハ受遺者アルトキハ限定受諾ハ裁判ヲ以テ定メタル順次及ヒ方法ニ從フニ非サレハ其辨濟ヲ爲スコトヲ得ス

第三百三十二條 前條ノ差押又ハ異議アラサルトキハ債權者又ハ受遺者ノ要求ニ從ヒテ辨濟ヲ爲ス

辨濟ノ爲メニ相續財産ヲ拂盡シタル後ト雖モ第三百二十八條ニ規定シタル計算ヲ完了セサル前ニ要求ヲ爲ス債權者又ハ受遺者ハ左ノ區別ニ從ヒ既ニ辨濟ヲ得タル債權者及ヒ受遺者ニ對シテ求償權ヲ行フコトヲ得

第一 債權者ハ先ツ受遺者ニ對シ次ニ債權者ニ對スルコト

第二 受遺者ハ單ニ受遺者ニ對スルコト

第三百三十三條 相續人カ計算ノ完了ヲ遲延シタル場合ニ於テハ債權者中未タ辨濟ヲ得サル者ヨリ既ニ辨濟ヲ得タル受遺者及ヒ債權者ニ求償スルコトヲ得ヘキ額ヲ直チニ相續人ノ特有財産ニ付キ求償スルコトヲ得

第三百三十四條 相續財産ヲ拂盡シ計算ヲ完了シタル後ニ要求ヲ爲ス債權者ハ單ニ辨濟ヲ得タル受遺者ニ對スルニ非サレハ求償權ヲ行フコトヲ得ス

第三百三十五條 前三條ノ求償權ハ三ヶ年之間之ヲ行フコトヲ得但此期間ハ計算ノ完了前ニ係ルトキハ初メ相續人ニ要求シタル日又完了後ニ係ルトキハ其完了ノ日ヨ

リ之ヲ算ス

第三款 拋棄

第三百三十六條 相續ヲ拋棄セントスル相續人ハ相續地ノ區裁判所ニ其旨ヲ申述シ裁判所ハ別段ニ備ヘタル帳簿ニ之ヲ記載ス可シ

第三百三十七條 拋棄シタル相續ハ他ニ受諾シタル相續人アラサル間ハ拋棄者更ニ之ヲ受諾スルコトヲ得然レトモ此受諾ハ第三百十八條ノ期間内ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス但相續財産ニ付キ第三者ノ有効ニ得タル權利ヲ害スルコト無シ

第三百三十八條 相續ヲ拋棄シタル者ハ他ニ受諾シタル相續人アリト雖モ左ノ場合ニ於テハ其拋棄ヲ銷除スルコトヲ得

第一 身體又ハ財産ニ強暴ヲ加ヘラレタルニ因リテ拋棄シタルトキ

第二 詐欺ノ爲メニ拋棄シタルトキ

第三 無能力者又ハ後見人カ方式ニ違ヒテ拋棄シタルトキ

此銷除訴權ハ財産編第五百四十四條以下ニ規定シタル期間及ヒ條件ニ從フ

第三百三十九條 債權者ヲ詐害スル意思ニ出テタル拋棄ハ財産編第三百四十一條以下ニ定メタル區別及ヒ期間ニ從ヒ債權者自己ノ利益ノ爲メ之ヲ廢罷スルコトヲ得

第三百四十條 適法ニ受諾シ又ハ受諾者ト推定セラレタル者ハ拋棄ヲ爲スコトヲ得ス

第三百四十一條 相續ニ包含スル物ヲ私取シ又ハ隱匿シタル相續人ハ其相續ヲ拋棄スル權利ヲ失フ

第四款 相續人ノ曠缺セル相續財産ノ處分

第三百四十二條 相續人現出セス相續人ノ有無分明ナラス又ハ相續人相續ヲ拋棄シ

タルトキハ相續人ノ贖缺セルモノト看做ス

第三百四十三條 相續地ノ區裁判所ハ利害關係人又ハ檢事ノ請求ニ因リテ相續財産ノ管理人ヲ命ス可シ

第三百四十四條 管理人ハ利害關係人ヲ召喚シテ相續財産ヲ調査シ其目錄ヲ作り財産ノ形狀ヲ檢證セシム可シ

管理人ハ此手續ヲ終了シタル後相續ニ屬スル權利ヲ行使シ之ヲ訟求シ又其相續ニ對スル訟求ニ答辯ス可シ

金錢ハ相續財産中ニ存スルモノト其賣却ヨリ得タルモノトヲ問ハス供託所ニ之ヲ供託ス可シ

相續ノ負擔スル債務ハ區裁判所ノ許可ヲ得ルニ非サレハ之ヲ辨濟スルコトヲ得ス

第三百四十五條 限定受諾者ノ義務及ヒ責任ニ關シ第三百二十八條以下ニ定メタル規則ハ管理人ニ之ヲ適用ス

第三百四十六條 管理人ハ計算ヲ完了シテ尙ホ相續財産ノ存スルニ於テハ區裁判所ノ許可ヲ得テ之ヲ競賣ニ付シ其得タル金額ヲ供託所ニ供託ス可シ

管理人ハ其領收證ヲ區裁判所ニ差出ダシ區裁判所ハ之ヲ保存ス可シ

第三百四十七條 相續人現出スルトキハ其相續人ハ區裁判所ヨリ供託所ノ領收證及ヒ相續人タル身分ノ證明書ヲ得テ之ヲ供託所ニ提出シ供託金額ヲ領收ス可シ

第三百四十八條 相續人アラサルコト確實ニ至リタルトキハ國ハ特別法ニ從ヒ供託金額ヲ領收ス可シ

第十四章 贈與及ヒ遺贈 總則

第三百四十九條 贈與トハ當事者ノ一方カ無償ニテ他ノ一方ニ自己ノ財産ヲ移轉スル要式ノ合意ヲ謂フ

第三百五十條 贈與ハ單純、有期又ハ條件附ナルコト有リ

贈與ハ法律ノ認メタル原因アルニ非サレハ之ヲ廢罷スルコトヲ得ス

第三百五十一條 贈與者ハ贈與物ノ妨礙及ヒ追奪ヲ擔保セス但其贈與以後ニ係ル贈與者ノ所爲ヨリ生シタル妨礙及ヒ追奪ハ此限ニ在ラス

第三百五十二條 遺贈トハ當事者ノ一方カ他ノ一方ニ無償ニテ自己ノ財産ヲ遺言ニ因リテ死亡ノ時ニ移轉スル行爲ヲ謂フ

遺贈遺言者隨意ニ之ヲ廢罷スルコトヲ得

第三百五十三條 遺言書中ニ存スル不能又ハ不法ノ條件ハ之ヲ記セサルモノト看做ス

贈與書中ニ不能又ハ不法ノ條件アルトキハ其贈與ヲ無効ト爲ス

第三百五十四條 法律上特ニ無能力者ト定メタル者ヲ除ク外何人ニ限ラス贈與及ヒ遺贈ヲ爲シ又ハ收受スル能力ヲ有ス

第三百五十五條 左ニ掲クル者ハ贈與ヲ爲ス能力ヲ有セス

- 第一 贈與ヲ爲ス時ニ於テ喪心シタル者
- 第二 禁治產者
- 第三 瘋癲ノ爲メ病院又ハ監置ニ在ル者
- 第四 未成年者但夫婦財産契約ノ爲メ法律ノ特ニ許ス場合ハ例外トス
- 第三百五十六條 准禁治產者ハ財産讓渡ノ爲メ法律ノ要スル方式ニ從フニ非サレハ

贈與ヲ爲スコトヲ得ス

第三百五十七條 左ニ掲ル者ハ遺贈ヲ爲ス能力ヲ有セス

第一 遺贈ヲ爲ス時ニ於テ喪心シタル者

第二 民事上ノ禁治産者

第三 瘋癲ノ爲メ病院又ハ監置ニ在ル者

第四 未成年者但自治産者ハ此限ニ在ラス

第二節 贈與

第一款 贈與ノ方式

第三百五十八條 贈與ハ分家ノ爲メニスルモノト其他ノ原因ノ爲メニスルモノトヲ問ハス普通ノ合意ノ成立ニ必要ナル條件ヲ具備スル外尙ホ公正證書ヲ以テスルニ非サレハ成立セス

然レトモ慣習ノ贈物及ヒ單一ノ手渡ニ成ル贈與ニ付テハ此方式ヲ要セス

第三百五十九條 贈與ハ贈與者ノ現有ノ財産ノミヲ包含ス若シ將來ノ財産ヲ包含シタルトキハ其財産ニ付テハ贈與ハ無効トス

然レトモ數額ノ定マリタル金錢又ハ定量物ノ贈與ハ贈與者ノ現有スルト否トヲ問ハス有効トス

第三百六十條 贈與ノ性質又ハ諾約ニ因リテ受贈者カ贈與者ノ債務ヲ辨濟スル義務ヲ負ヒタルトキハ其義務ハ贈與ノ時既ニ存在シタル債務ニ非サレハ包含セス  
受贈者カ贈與者ノ將來ノ債務ヲ辨濟ス可キノ諾約ヲシ爲タルトキハ其諾約ハ無効トス

第三百六十一條 贈與者ハ自己ノ利益ニ於テスルニ非サレハ自己ニ先ダテテ受贈者

ノ死亡スルトキ其贈與ヲ解除ス可キ條件ヲ要約スルコトヲ得ス  
若シ贈與者カ其相續人又ハ第三者ノ利益ニ於テ此解除條件ヲ要約シタルトキハ其條件ハ無効トス

第三百六十二條 前條第一項ノ規定ニ從ヒテ有効ニ要約シタル解除條件ノ成就ハ受贈者ノ相續人ニ對スルト第三者ニ對スルトヲ問ハス普通ノ合意ニ於テ要約シタル解除條件ト同一ノ効力ヲ生ス

然レトモ受贈者ノ婦ハ解除ニ拘ハラズ左ノ二箇ノ條件具備スルトキハ贈與財産ニ付キ法律上ノ抵當權ヲ保有ス

第一 贈與カ夫婦財産契約ヲ以テ夫ノ爲メ爲サレタルモノナルトキ  
第二 贈與財産ノ外ナル夫ノ財産ヲ以テ婦ノ特有財産ノ返還ヲ擔保スルニ足ラサルトキ

第二款 贈與ノ廢罷

第三百六十三條 贈與ハ合意ヲ無効ト爲ス普通ノ原因外尙ホ贈與者ノ要約シタル條件ノ不履行ノ爲メ之ヲ廢罷スルコトヲ得

第三百六十四條 條件ノ不履行ニ基ク贈與ノ廢罷ハ贈與者又ハ其承繼人ヨリ之ヲ請求スルコトヲ得

第三百六十五條 條件ノ不履行ニ基キ贈與ヲ廢罷シタル場合ニ於テハ受贈者ニ對スルト第三者ニ對スルトヲ問ハス未必條件ノ成就ニ因リテ合意ヲ解除シタルトキト同一ノ効力ヲ生ス

第三節 夫婦間ノ贈與ノ特例

第三百六十六條 未成年ノ夫又ハ婦ハ婚姻ノ許諾ヲ與フ可キ人ノ許諾及ヒ立會ヲ得

且夫婦財産契約ヲ以テスルニ非サレハ贈與ヲ爲スコトヲ得ス

第三百六十七條 夫婦間ノ贈與ハ何等ノ約款アルニ拘ハラズ婚姻中贈與者隨意ニ之ヲ廢罷スルコトヲ得

贈與ノ廢罷ハ第三者ニ對シテ効力ヲ有セス但贈與ノ登記ニ廢罷ノ訴狀ヲ記シタル後ニ受贈者ノ遺産所持者ヨリ附與財産ニ付キ物權ヲ取得シタル第三者ニ對シテハ此限ニ在ラス

第四節 遺贈

第一款 對言ノ方式

第三百六十八條 遺言ハ遺言遺者ノ自筆ノ證書、公正證書又ハ祕密ノ方式ニ依リテ之ヲ爲スコトヲ得

然レトモ二人以上ノ人ハ一箇ノ證書ヲ以テ遺言ヲ爲スコトヲ得ス

第三百六十九條 自筆ノ遺言書ハ遺言者カ其全文、日附及ヒ氏名ヲ自書シテ捺印シタルニ非サレハ其効ヲ有セス

第三百七十條 公正證書ニ依ル遺言ハ公證人一人及ヒ證人二人ノ前ニ於テ遺言者カ遺言ノ旨趣ヲ口授シ公證人之ヲ筆記シ朗讀シタル後遺言者及ヒ證人各其氏名ヲ自書シテ捺印シタルニ非サレハ其効ヲ有セス

然レトモ氏名ヲ自書スル能ハサル者アルトキハ其事由ヲ證書ニ記載スルヲ以テ足ル

第三百七十一條 祕密ノ方式ニ依ル遺言書ハ遺言者ノ自書シタルト他人ノ之ヲ書シタルトヲ問ハス左ノ諸件ヲ具備スルニ非サレハ其効ヲ有セス

第一 遺言者カ氏名ヲ自書シテ捺印シタルコト

第二 遺言書ヲ封シテ遺言者カ之ニ封印シタルコト

第三 遺言者カ公證人一人及ヒ證人二人ノ前ニ封書ヲ提出シテ自己ノ遺言書タル旨ヲ陳述シタルコト

第四 公證人カ遺言者ノ陳述ト之ヲ聽キタル日附トヲ封紙ニ記シテ遺言者及ヒ證人ト共ニ各其氏名ヲ自書シテ捺印シタルコト但此場合ニ於テ氏名ヲ自書スル能ハサル證人アルトキハ公證人其事由ヲ封紙ニ記スルヲ以テ足ル公證人ハ遺言者ノ死亡ノ後其相續人ノ立會ノ上ニ非サレハ開封セサル旨ヲ記シタル領收書ヲ遺言者又ハ其指定シタル證人中ノ一人ニ授付ス可シ

第三百七十二條 祕密ノ方式ニ依ル遺言トシテ有効ナル爲メ前條ニ定メタル條件ニ缺クルモノ有リト雖モ其全文、日附及ヒ氏名共ニ遺言者ノ自書ニ係ルトキハ自筆ノ遺言書トシテ有効トス

第三百七十三條 受遺者、遺言ニ立會フ公證人ノ筆生其他普通ノ無能力者ハ證人ト爲ルコトヲ得ス

第二款 遺言ノ特別方式

第三百七十四條 軍人及ヒ軍屬ニシテ遠征中ニ在ル者又ハ内地ト雖モ交戰中若クハ合圍中ニ在ル者ハ將校一人證人二人ノ補助ヲ以テ遺言書ヲ作ルコトヲ得

第三百七十五條 遠征中、交戰中又ハ合圍中ニ在ル軍人及ヒ軍屬ニシテ疾病又ハ傷疾ノ爲メ病院ニ在ル者ハ其院ノ醫官及ヒ事務官ノ補助ヲ以テ遺言書ヲ作ルコトヲ得

第三百七十六條 傳染病ノ爲メ行政處分ヲ以テ交通ヲ遮斷シタル地方ニ在ル者ハ其疾病中ナルト否トヲ問ハス警察官一人及ヒ證人一人ノ補助ヲ以テ遺言書ヲ作ルコト

トヲ得

第三百七十七條 航海中ニ在ル者ハ軍艦ニ在テハ將校一人其他ノ船舶ニ在テハ事務員一人及ヒ證人二人ノ補助ヲ以テ遺言書ヲ作ルコトヲ得

第三百七十八條 海上ニテ遺言書ヲ作りタルトキハ其旨ヲ航海日誌ニ記載ス可シ

第三百七十九條 本款ノ規定ニ從ヒテ作りタル遺言書ニハ遺言書、代書者及ヒ立會人各其氏名ヲ自書シテ捺印ス可シ

氏名ヲ自書シ又ハ捺印スル能ハサル者アルトキハ其事由ヲ遺言書ニ記載スルヲ以テ足ル

第三百八十條 外國ニ在ル日本人ハ第三百六十九條ニ定メタル自筆ノ方式ニ依リ又ハ其地ニ用ユル公正ノ方式ニ從ヒテ遺言ヲ爲スコトヲ得

第三百八十一條 外國ニ於テ作りタル遺言書ハ遺言者ノ日本國內ニ有スル住所ノ區裁判所ノ帳簿ニ之ヲ登録シ若シ住所ノ知レサルトキハ最終居所ノ區裁判所ノ帳簿ニ之ヲ登録シタル後ニ非サレハ日本國內ニ在ル財産ニ付キ其遺言ヲ執行スルコトヲ得ス

又其遺言書ニ日本國內ニ在ル不動産ノ處分ヲ包含スルトキハ其不動産所在地ノ區裁判所ニ登記ヲ求メタル後ニ非サレハ第三者ニ對抗スルコトヲ得ス

第三百八十二條 日本ニ在ル外國人ハ日本ノ法律ニ從ヒ又ハ其本國ノ法律ニ從ヒテ遺贈ヲ爲スコトヲ得

第三款 遺贈ヲ爲スコトヲ得ル財産ノ部分

第三百八十三條 遺贈ヲ爲スコトヲ得ル財産ト相續人ニ貯存ス可キ財産トノ部分ヲ定ムルニハ家督相續ノ特權ヲ組成スルモノヲ控除ス

第三百八十四條 法定家督相續人アルトキハ被相續人ハ相督續産ノ半額マテニ非サレハ他人ノ爲メ遺贈ヲ爲スコトヲ得ス

家族ノ遺産ヲ相續スル卑屬親アルトキモ亦同シ

第三百八十五條 用益權ノ如キ其存立時間ノ不確實ナル權利ハ相續ノ時ニ於ケル價額ヲ査定シテ遺贈ヲ爲スコトヲ得ル部分ヲ定ム

其權利ノ價額カ遺贈ヲ爲スコトヲ得ル部分ヲ超過スルトキハ相續人ハ或ハ被相續人ノ遺贈ヲ履行シ或ハ遺贈ヲ爲スコトヲ得ル部分ノ完全ナル所有權ヲ與ヘテ其權利ヲ受戻スコトヲ得

第三百八十六條 遺贈ヲ爲スコトヲ得ル部分ヲ超過スル遺贈ハ之ヲ其部分マテニ減殺ス

第三百八十七條 減殺ス可キ分量ハ相續ノ時ニ現存スル總テノ財産ノ評價額ヨリ被相續人ノ債務額ヲ控除シタル剩餘額ニ付キ之ヲ算定ス

第三百八十八條 遺贈ノ幾分ヲ減殺シテ貯存ス可キ財産ノ分量ヲ組成ス可キトキハ包括ノ遺贈ト特定ノ遺贈トヲ問ハス其價額ノ割合ヲ以テ總テノ遺贈ヲ減殺ス可シ

第三百八十九條

第四款 遺言ノ効力及ヒ執行

第三百九十條 單純又ハ有期ノ遺贈ハ遺言者ノ死亡ノ時ヨリ受遺者ノ知ルト否ト

ヲ問ハス包括ノ遺贈ニ付テハ其包含スル財産及ヒ債務ヲ受遺者ニ特定ノ遺贈ニ付テハ其遺贈物ノ權利ヲ受遺者ニ移轉ス然レトモ有期ノ遺贈ハ滿期ニ至ルマテ其執行ヲ止ム

停止又ハ解除ノ條件附ニ於ケル遺贈ノ効力ハ合意ノ事項ニ關シテ規定シタル如ク其條件ノ成就如何ニ從フ

遺贈ノ目的物カ代替物ナルトキハ其所有權ハ財產編第三百三十二條ノ規定ニ從ヒテ移轉ス

如何ナル場合ニ於テモ受遺者ハ遺贈ヲ拋棄スルコトヲ得

第三百九十一條 遺言者カ不分ノ權利ヲ有スル物ヲ遺贈シタルトキハ受遺者ハ遺言者ト同一トナル權利ヲ取得ス

第三百九十二條 受遺者ハ遺贈物ノ引渡ヲ要求シタル時ヨリ後ニ非サレハ遺贈物ノ果實ヲ收受スル權利ヲ有セス但期限ノ到來シ又ハ未必條件ノ成就シタルコトヲ要ス

然レトモ左ノ三箇ノ場合ニ於テハ受遺者ハ遺言者ノ死亡、滿期又ハ條件成就ノ時ヨリ要求ヲ待タスシテ直チニ果實ヲ收受スル權利ヲ有ス

第一 遺言者カ果實ヲ收受スル權利ヲ明示シタルトキ

第二 遺贈カ養料ノ性質ヲ有スルトキ

第三 相續人カ惡意ヲ以テ遺言ヲ隱祕シタルトキ

第三百九十三條 遺贈物ハ其遺贈ノ單純ナルトキハ當然ノ附從物ト共ニ遺言者ノ死亡ノ時ニ於ケル現狀ニテ之ヲ引渡ス可シ其遺贈ノ有期又ハ未必條件附ナルトキハ引渡ヲ請求スルコトヲ得ヘキ時ニ於ケル現狀ニテ之ヲ引渡ス可シ

相續人カ遺贈物ニ加ヘタル改良又ハ毀損ハ相續人ト受遺者トノ間相互ニ賠償ヲ請求スル權利ヲ生ス  
解除ノ未必條件ヲ以テ遺贈ヲ爲シタル場合ニ於テ其條件ノ成就シタルトキハ受遺

者又ハ其相續人ヨリ遺贈者ヲ現狀ニテ返還ス可シ但人爲ニ因ル改良又ハ毀損ニ付キ雙方ノ間ニ於ケル相互ノ賠償ヲ妨ケス

第三百九十四條 遺言者カ遺言ノ後ニ取得シタル土地又ハ建物ハ遺贈ノ不動産ニ接著シ又ハ其不動産ノ利用ヲ改良スル爲メニ供ヘタルモノト雖モ其不動産ノ受遺者ヲ利セス

第三百九十五條 遺言書ハ公正證書ヲ除ク外相續地ノ區裁判所ノ檢認ヲ得タル後ニ非サレハ之ヲ執行スルコトヲ得ス

封印アル遺言書ハ區裁判所ニ於テスルニ非サレハ開封スルコトヲ得ス  
前二項ノ規定ニ違フ者ハ百圓以下ノ過料ニ處ス

第三百九十六條 遺言ノ執行及ヒ遺贈物ノ引渡ニ關スル費用ハ相續財産ノ負擔トス但貯存財産ニ負擔セシムルコトヲ得ス

第三百九十七條 不動産物權ノ遺贈ハ遺言者ノ死亡ノ後受遺者カ其遺贈ヲ知リタル時ヨリ三十日內ニ之ヲ登記シタルニ非サレハ遺言者ノ死亡ノ日ニ遡リテ第三者ニ對登スルコトヲ得ス

登記ノ費用ハ受遺者ノ負擔トス

第三百九十八條 遺言者ハ合意又ハ遺言ヲ以テ遺贈ノ執行ヲ一人又ハ數人ニ委託スルコトヲ得

遺言執行者ハ代理人ノ普通義務ニ服ス

第五款 遺言ノ廢罷及ヒ失敗

第三百九十九條 遺言ハ遺言者隨意ニ之ヲ廢罷スルコトヲ得廢罷ハ明示又ハ默示ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第四百條 遺言者カ遺言ノ方式ニ從ヒ遺言ノ全部又ハ一分ヲ廢罷スル意思ヲ證書ニ記載シタルトキハ其廢罷ハ明示ノモノトス

第四百一條 後ノ遺言ヲ以テ前ノ遺言ニ包含スル特定物ヲ處分シタルトキハ其物ニ付テハ前ノ遺言ヲ默示ニテ廢罷シタルモノトス

遺言者カ生存中遺言ニ包含スル特定物ヲ有償又ハ無償ニテ處分シタルトキモ亦同シ

第四百二條 廢罷ニ歸シタル遺言ハ前條ノ處分ノ無効ト爲ルトキト雖モ有効ニ復セ

第四百三條 遺言ハ受遺者ノ條件不履行ノ爲メ又ハ遺言者ヲ死ニ致シタル原因ノ爲メ相續人ヨリ廢罷ヲ請求スルコトヲ得

第四百四條 遺言ハ方式上完全ノモノト雖モ左ノ場合ニ於テハ其効ヲ失フ

第一 受遺者カ遺言者ヨリ先ニ死亡シタルトキ

第二 停止條件附ノ遺言ニ付キ其條件ノ成就前ニ受遺者ノ死亡シタルトキ

第四百五條 廢罷又ハ失効ニ歸シタル遺言ノ部分ニ付テハ曾テ遺言アラサリシモノト看做ス但遺言者カ明示ヲ以テ其部分ヲ利得ス可キ者ヲ指定シタルトキハ此限ニ在ラス

第五節 包括ノ贈與又ハ遺贈ニ基ク不分財產ノ分割

第四百六條 包括ノ贈與又ハ遺贈ヲ爲シタルニ因リ贈與者又ハ相續人ト受贈者又ハ受遺者ト間ニ不分財產ヲ生シタルトキハ下ノ規定ニ從ヒ之ヲ分割ス受贈者又ハ受遺者數人アルトキモ亦同シ

第一款 分割

第四百七條 不分財產ノ所有者ノ各自ハ其財產ノ分割ヲ要求スルコトヲ得但財產編

第三十九條ノ規定ニ從ヒテ分割セサルコトヲ約シタルトキハ此限ニ在ラス

第四百八條 分割ハ明示ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ要ス財產ヲ區別シテ收益スル事實ハ分割トセス

第四百九條 不分財產ノ分割ハ所有者各自ノ合意ヲ以テ自由ニ之ヲ爲スコトヲ得然レトモ左ノ場合ニ於テハ裁判ヲ以テスルニ非サレハ其分割ヲ爲スコトヲ得ス

第一 所有者中ニ未成年者、禁治產者又ハ癡癲者アリテ其後見人又ハ假管理人アラサルトキ

第二 所有者中ニ不在者アリテ有効ニ分割ヲ承諾スル權限ヲ有スル合意上ノ代理人アラサルトキ

第三 所有者中ニ合意上ノ分割ヲ承諾セサル者アルトキ

第四百十條 裁判上ノ分割ヲ要スルトキハ相續地ノ區裁判所ハ相續人、債務者又ハ檢事ノ請求ニ因リ封印ヲ爲シ及ヒ目錄ヲ作ラシム可シ

第四百十一條 裁判上ノ分割ヲ要セサルトキト雖モ債權者ハ區裁判所ノ許可ヲ得テ封印及ヒ目錄調製ヲ請求スルコトヲ得但執行力アル證書ヲ有スルトキハ此許可ヲ要セス

封印ノ除去ニ付テハ總テノ債權者異議ヲ述フルコトヲ得

第四百十二條 所有者ノ各自ハ不分財產ノ現物ニテ其部分ノ引渡ヲ要求スルコトヲ得但債權者其引渡ヲ差押ヘタルトキ又ハ所有者ノ多數ヲ以テ其財產ノ負擔スル債務及ヒ費用ヲ豫メ辨濟スル爲メ賣却ヲ必要ト決シタルトキハ此限ニ在ラス

第四百十三條 未成年者、禁治產者、癡癲者又ハ不在者ノ爲メ定メタル規則ニ違ヘル



分割ハ其者ノ利益ニ於テノミ假定ノモノトス

第四百十四條 分割ノ際利益ノ相反スル無能力者又ハ不在者ノ數人アルトキハ其各自ノ爲メ臨時保佐人又ハ管理人ヲ指定ス可シ

第四百十五條 分割ノ結了シタルトキハ各所有者ハ其領收シタル物ノ證書ヲ保有ス所有者ノ總體又ハ數人ニ分割シタル一箇ノ物ノ證書ハ其最大ノ部分ヲ領收シタル者之ヲ保有ス最大ノ部分ヲ領收シタル者ヲキトキハ各所有者ノ協議ヲ以テ其保有者ヲ定ム若シ議協ハサルトキハ裁判所之ヲ指定ス

何レノ場合ニ於テモ證書ノ保有者ハ他ノ所有者ノ求メニ應シテ之ヲ使用セシム可シ

第四百十六條 所有者ハ各自ニ受クル部分ノ分割ヲ以テ債務ヲ分擔ス

第二款 分割ノ効力及ヒ擔保

第四百十七條 分割ノ効力ニ付テハ第五百五十五條ノ規定ヲ適用ス

第四百十八條 各所有者ハ分割前ノ原因ニ基ク分割物ノ妨礙及ヒ追奪ニ付キ互ニ擔保ノ責ニ任ス但別段ノ合意ヲ以テ擔保ヲ免除シタルトキハ此限ニ在ラス

第四百十九條 債權ニ付テハ分割ノ當時ニ於ケル債務者ノ資力ノ限度マテニ非サレハ各所有者擔保ノ責ニ任セス

第三款 分割ノ銷除

第四百二十條 分割ハ財產編第三百四條以下ニ定メタル區別ニ從ヒ不成立又ハ無効タル外尙ホ所有者ノ一人カ其領收シタル部分ニ付キ四分一以上ノ缺損ヲ被ブリタルトキハ其缺損ノ爲メ之ヲ銷除スルコトヲ得

缺損ノ査定ハ分割ノ時ニ於ケル物ノ價格ニ從ヒテ之ヲ爲ス可シ

第四百二十一條 分割銷除ノ訴權ハ財產編第五百四十四條以下ニ定メタル時効及ヒ

認諾ニ因リテ消滅ス

第十五章 夫婦財產契約

第一節 總則

第四百二十二條 夫婦財產契約ハ婚姻ノ儀式前ニ之ヲ爲シ及ヒ公證人ヲシテ其證書ヲ作ラシムルニ非サレハ成立セス

婚姻ノ儀式後ハ契約ヲ變更スルコトヲ得ス

第四百二十三條 婚姻ヲ爲スコトヲ得ル未成年者ハ婚姻ノ許諾ヲ與フ可キ尊屬親又ハ後見人ノ立會ニテ財產契約ヲ爲スコトヲ得

第四百二十四條 財產契約ヲ爲サシテ婚姻ヲ爲シタルトキハ財產ノ關係ハ法定ノ制ニ從フ

第四百二十五條 日本ニ於テ財產契約ヲ爲サシテ婚姻ヲ爲シタル外國人ハ夫タル者ノ本國ニ行ハルル普通ノ制ニ從ヒタルモノト看做ス

第二節 法定ノ制

第四百二十六條 婦又ハ入夫カ婚姻ノ儀式ノ時ニ於テ現ニ所有シ又ハ將來ニ所有ス可キ特有財產ヨリ婚姻中ニ生スル果實及ヒ自己ノ勞力ニ因リテ婚姻中ニ得タル所得ハ婚姻中ノ費用分擔ノ爲メニ之ヲ配偶者ニ供出シタルモノト看做ス

第四百二十七條 夫又ハ戸主タル婦カ配偶者ノ特有財產ニ付テ有スル權利ハ用益者ノ權利ニ同シ又配偶者ノ特有財產ニ關シテ收益ヲ爲ス夫又ハ戸主タル婦ハ用益者ノ負擔スル修繕其他收益ヲ以テ辨濟ス可キ義務ヲ負フ

第四百二十八條 夫ハ婦ノ特有財產入夫ハ戸主タル婦ノ財產ヲ管理ス

第四百二十九條 夫又ハ入夫ハ婦又ハ戸主タル婦ノ承諾ヲ得ルニ非サレハ婦ノ特有財産又ハ戸主タル婦ノ財産ヲ讓渡シ又ハ之ヲ擔保ニ供スルコトヲ得ス但人事編第二百零二十九條及ヒ第二百零七十五條ノ場合ハ此限ニ在ラス

第四百三十條 入夫ハ戸主タル婦ノ承諾ヲ得ルニ非サレハ婚姻中ノ所得ヲ讓渡シ又ハ之ヲ擔保ニ供スルコトヲ得ス但其特有財産ヨリ生スル果實及ヒ自己ノ勞力ニ因リテ得タル所得ハ此限ニ在ラス

第四百三十一條 夫カ婦ノ特有財産ニ付キ入夫カ戸主タル婦ノ財産ニ付キ其承諾ヲ得スシテ爲ス質貸借ニ關シテハ財産編第一百九條以下ノ規定ヲ適用ス

第四百三十二條 管理ノ失當ニ因リ夫又ハ入夫カ婦ノ特有財産又ハ戸主タル婦ノ財産ヲ危險ニ置クトキハ婦又ハ戸主タル婦ハ自ラ其財産ヲ管理セント請求スルコトヲ得

第四百三十三條 婦又ハ入夫カ婚姻ノ儀式ノ時ニ於テ負ヘル債務及ヒ婚姻中ニ生スル債務ニ付テハ債權者ハ婦又ハ入夫ノ特有財産ニ對シテ權利ヲ行フコトヲ得

第四百三十四條 婦ノ名ヲ以テ生セシメタル債務ニ付テハ債權者ハ其債務カ家事管理ノ爲メニ生シタルコトヲ證スルトキニ限リ夫ニ對シテ其辨濟ヲ請求スルコトヲ得

入夫ノ名ヲ以テ生セシメタル債務ニ付テハ債權者ハ其債務ノ財産管理ノ爲メニ生シタルコトヲ證スルトキニ限リ戸主タル婦ニ對シテ其辨濟ヲ請求スルコトヲ得

第四百三十五條 婦又ハ入夫ノ特有財産タルコトヲ證セサル財産ハ總テ夫又ハ戸主タル婦ニ屬スルモノト見做ス

民法債權擔保編目錄

總則

第一部 對人擔保

第一章 保證

第一節 保證ノ目的及ヒ性質

第二節 保證ノ効力

第一款 保證人債權者間ノ保證ノ効力

第二款 保證人債務者間ノ保證ノ効力

第三款 共同保證人間ノ保證ノ効力

第三節 保證ノ消滅

第四節 法律上及ヒ裁判上ノ保證ニ特別ナル規則

第二章 債務者間及ヒ債權者間ノ連帶

總則

第一節 債務者間ノ連帶

第一款 債務者間ノ連帶ノ性質及ヒ原因

第二款 債務者間ノ連帶ノ効力

第三款 債務者間ノ連帶ノ終了

第四款 全部義務

第二款 債權者間ノ連帶

第一款 債權者間ノ連帶ノ性質及ヒ原因

第二款 債權者間ノ連帶ノ効力  
第三款 債權者間ノ連帶ノ終了

第三章 任意不可分  
第二部 物上擔保

第一章 留置權  
第二章 動產質

第一節 動產質契約ノ性質及ヒ成立

第二節 動產質契約ノ効力

第三章 不動產質

第一節 不動產ノ目的、性質及ヒ組成

第二節 不動產質ノ効力

第四章 先取特權

總則

第一節 動產及ヒ不動產ニ係ル一般ノ先取特權

第一款 一般ノ先取特權ノ原因

第一則 訟事費用ノ先取特權

第二則 葬式費用ノ先取特權

第三則 最後疾病費用ノ先取特權

第四則 雇人給料ノ先取特權

第五則 日用品供給ノ先取特權

第二款 一般ノ先取特權ノ効力及ヒ順位

第二節 動產ニ係ル特別ノ先取特權

第一款 動產ニ係ル特別ノ先取特權ノ原因及ヒ目的

第一則 不動產質貸人ノ先取特權

第二則 種子及ヒ肥料ノ供給者ノ先取特權

第三則 農業稼人及ヒ工業職工ノ先取特權

第四則 動產物保存者ノ先取特權

第五則 動產物賣主ノ先取特權

第六則 旅店主人ノ先取特權

第七則 舟車運送營業人ノ先取特權

第八則 職務上ノ所爲ニ對スル債權者ノ先取特權

第九則 保證金貸主ノ先取特權

第二款 動產ニ係ル特別ノ先取特權ノ順位

第三節 不動產ニ係ル特別ノ先取特權ノ原因及ヒ目的

第一款 不動產ニ係ル特別ノ先取特權ノ原因及ヒ目的

第一則 讓渡人ノ先取特權

第二則 共同分割者ノ先取特權

第三則 工匠、技師及ヒ工事請負人ノ先取特權

第四則 金錢貸主ノ先取特權

第二款 債權者間ニ於ケル不動產ノ特別先取特權ノ効力及ヒ順位

第三款 第三所持者ニ對スル不動產先取特權ノ効力

第五章 抵當

- 第一節 抵當ノ性質及ヒ目的
- 第二節 抵當ノ種類
  - 第一款 法律上ノ抵當
  - 第二款 合意上ノ抵當
  - 第三款 遺言上ノ抵當
- 第三節 抵當ノ公示
  - 第一款 登記ノ條件及ヒ期間
  - 第二款 登記ノ抹消、減少及ヒ正誤
- 第四節 債權者間ノ抵當ノ効力及ヒ順位
- 第五節 第三所持者ニ對スル抵當ノ効力

總則

- 第一款 抵當債務ノ辨濟
- 第二款 滌除
- 第三款 財産檢索ノ抗辯
- 第四款 委棄
- 第五款 競賣及ヒ所有權徵收
- 第六節 登記官吏ノ責任
- 第七節 抵當ノ消滅

民法

債權擔保編

總則

第一條 債務者ノ總財産ハ動産ト不動産ト現在ノモノト將來ノモノトヲ問ハス其債權者ノ共同ノ擔保ナリ但法律ノ規定又ハ人ノ處分ニテ差押ヲ禁シタル物ハ此限ニ在ラス

債務者ノ財産カ總テノ義務ヲ辨濟スルニ足ラサル場合ニ於テハ其價額ハ債權ノ目的、原因、體様ノ如何ト日附ノ前後トニ拘ハラス其債權額ノ割合ニ應シテ之ヲ各債權者ニ分與ス但其債權者ノ間ニ優先ノ正當ナル原因アルトキハ此限ニ在ラス

財産ノ差押、賣却及ヒ其代價ノ順序配當又ハ共分配當ノ方式ハ民事訴訟法ヲ以テ之ヲ規定ス

第二條 義務履行ノ特別ノ擔保ハ對人ノモノ有リ物上ノモノ有リ

對人擔保ハ之ヲ左ニ掲ク

- 第一 保證
- 第二 義務者間又ハ債權者間ノ連帶
- 第三 任意ノ不可分物上擔保ハ之ヲ左ニ掲ク
  - 第一 留置權
  - 第二 動産質權
  - 第三 不動産質權
  - 第四 先取特權
  - 第五 抵當權

第一部 對人擔保

第一章 保證

●民法△債權擔保編

第三條 保證ハ任意ノモノ有リ法律上ノモノ有リ又裁判上ノモノ有リ  
下ノ第一節乃至第三節ノ規定ハ右三種ノ保證ニ共通ナリ

第一節 保證ノ目的及ヒ性質

第四條 保證ハ或人カ債務者ノ其義務ヲ履行セサルニ於テハ之ヲ履行スルコトヲ諾  
約スル契約ナリ此約務ハ債務者ノ過失ニ歸ス可キ不履行ノ場合ニ於テハ債權者ニ  
賠償スル約務ヲ暗ニ包含ス

第五條 保證ハ主タル義務ノ目的ト異ナルモノヲ目的ト爲ストキハ保證トシテハ無  
効ナリ

然レトモ保證人ハ主タル債務者ノ諾約シタル物又ハ所爲ノ對價トシテ不履行ヲ豫  
見シタル懈怠金額ヲ有効ニ諾約スルコトヲ得

第六條 保證人ハ義務ハ主タル義務ヨリ一層大ナルコトヲ得ヌ又一層重キ體様ニ服  
スルコトヲ得ヌ若シ保證人ノ義務カ一層大ナルトキ又ハ一層重キトキハ主タル義  
務ノ限度從ヒ體様ニ之ヲ減ス

第七條 前條ノ禁止ノ規定ハ債務者ヨリ其主タル義務ノ爲メ物上擔保ヲ供セサルト  
キ保證人ヨリ其從タル義務ノ物上擔保ヲ供スルコトヲ妨ケヌ又保證人カ主タル債  
務者ヨリ一層嚴ナル執行方法ニ服スルコトヲ妨ケヌ

保證人ハ亦第三者ヲ引受人トシテ已レテ保證セシムルコトヲ得此引受人對ニシテ  
ハ保證人ハ主タル債務者ノ地位ヲ有ス

第八條 金額又ハ定マリタル物ニ制限シタル保證ハ其利息ニモ果實ニモ其他ノ附從  
物ニモ及フコト無シ  
然レトモ主タル義務ノ無限ノ保證ハ填補ノ利息、遲延ノ利息其他此債務ノ天然上、

法律上又ハ合意上ノ附從物ニ及ヒ又主タル債務者ニ對シテ爲シタル最初ノ訴ノ費  
用ト其訴ヲ保證人ニ告知シタル以後ノ費用トニモ及フ

第九條 總テ有効ナル義務ハ之ヲ保證スルコトヲ得  
無能力者ノ取消スコトヲ得ヘキ義務ト雖モ亦有効ニ之ヲ保證スルコトヲ得其義務  
カ裁判上ニテ取消サレタル後ト雖モ保證ハ其効力ヲ存ス但保證人カ其保證ノ際債  
務者ノ無能力ヲ知リタルトキニ限ル

第十條 何人ニテモ將來ノ義務ヲ保證スルコトヲ得又債權者又ハ債務者ノ方ニ於テ  
隨意ノ條件ニ繋ル義務ヲモ保證スルコトヲ得但保證人ニ於テ其義務ノ性質及ヒ廣  
狹ヲ査定スルコトヲ得ルトキニ限ル

第十一條 何人ニテモ義務者ノ委任ヲ受ケ又ハ其不知ニテ又ハ其意ニ反シテモ其保  
證人ト爲ルコトヲ得

辨濟シタル保證人ノ其債務者ニ對スル求償ハ第二節第二款ニ於テ之ヲ規定ス  
第十二條 有効ニ保證人ト爲ルニハ一般ナルト債務者ニ對スルトヲ問ハス無償ニテ  
義務ヲ負擔スル能力ヲ有スルコトヲ要ス

然レトモ主タル契約カ有償ナルトキハ保證人ノ債務者ニ對スル無能力ハ債權者カ  
之ヲ知リタルトキニ非サレハ保證人ヨリ債權者ニ其無能力ヲ以テ對抗スルコトヲ  
得ヌ

第十三條 債務ヲ保證スル意思ハ之ヲ明示セサルトキハ明カニ事情ヨリ生スルコト  
ヲ要ス然レトモ其意思ハ契約ノ者一方ヲ他ノ一方ニ勸メ又ハ其一方ノ現在若クハ  
將來ノ有資力ヲ確言シタル事實ノミヨリ之ヲ推測スルコトヲ得ヌ  
若シ證書ノ署名者中ノ一人カ共同債務者ナルカ又ハ保證人ナルカニ付キ疑アルト

キハ之ヲ保證人ト看做ス

第十四條 保證人ノ義務ハ其相續人ノ負擔ニ歸シ又債權者ノ相續人ノ利益ニ歸ス但反對ノ要約アルトキハ此限ニ在ラス

第十五條 債務者カ保證人ヲ立ツ可キ合意ヲ以テ義務ヲ負ヒタルトキハ其債務者ハ債務ノ性質及ヒ大小ニ應シ有資力ノ人ニ非サレハ保證人トシテ之ヲ立ツルコトヲ得ス

若シ右ノ保證人カ無資力ト爲リタルトキハ債務者ハ前項ト同一ノ條件ヲ具備スル他ノ者ヲ立ツルコトヲ要ス

此他保證人ハ義務ヲ履行ス可キ控訴院ノ管轄地内ニ於テ住所ヲ有シ又ハ假住所ヲ定ムルコトヲ要ス

債權者ヨリ人ヲ指定シテ保證人ヲ要約シタルトキハ本條ノ條件ヲ要セス

第十六條 債務者カ前條ノ條件ヲ具備スル保證人ヲ立ツルコト能ハサルトキハ十分ナル物上擔保ヲ與フルコトヲ得

第十七條 商證券ノ保證及ヒ仲買人カ委託者ニ對シテ諾約シタル擔保ノ特例ハ商法ニ於テ之ヲ規定ス

第二節 保證ノ効力

第一款 保證人債權者間ノ保證ノ効力

第十八條 債權者ハ義務履行ノ催告ヲ爲シタルモ其効果アラサリシコトノ證據ヲ保證人ニ示サスシテ之ヲ訴追スルコトヲ得ス

然レトモ債務者カ行方知レス又ハ破産ノ宣告ヲ受ケ若クハ顯然タル無資力ノ形狀ニ在ルトキハ右ノ催告ヲ必要トセス

第十九條 保證人ハ右ノ外下ノ制限及ヒ條件ニ從ヒ債權者カ豫メ債務者ノ財産ヲ檢索シテ之ヲ賣テシムルコトヲ債權者ニ要求スルコトヲ得

第二十條 保證人ハ明示又ハ默示ニテ財産檢索ノ利益ヲ拋棄シ又ハ主タル債務者ト連帶シテ義務ヲ負擔シタルトキハ檢索ノ利益ヲ享ケス

總テノ場合ニ於テ保證人ハ主タル義務ノ基本ヲ爭フ前ニ檢索ノ利益ヲ以テ債權者ニ對抗セザリシトキハ其利益ヲ失フ

第二十一條 檢索ヲ要求スル保證人ハ債務者ノ不動産ニシテ義務ヲ履行ス可キ控訴院ノ管轄地内ニ在ルモノヲ債權者ニ指示スルコトヲ要ス

保證人ハ爭ニ係ル不動産ヲモ他ノ債權者ニ優先ニテ抵當ト爲リタル不動産ヲモ訴追債權者ニ抵當ト爲リタル不動産ニシテ第三所持者ノ手ニ存スルモノヲモ指示スルコトヲ得ス

債務者ニ屬スル動産ニ付テハ債務者之ヲ物上擔保トシテ既ニ債權者ニ供シタルトキニ非サレハ保證人其檢索ヲ要求スルコトヲ得ス

第二十二條 債權者檢索ノ有効ナル對抗ヲ受ケ其檢索ヲ爲スコトヲ怠リテ債務者其後無資力ト爲リタルトキハ保證人ハ債權者ノ檢索ニ因リ得ヘカリシ金額ニ滿ツルマテ其義務ヲ免ガル

第二十三條 一人ノ債務者ノ爲メ數人ノ保證人アルトキハ債務ハ均一ニテ當然其間ニ分タル不均一ニテ分別スルコトヲ定メ又ハ其保證人カ或ハ債務者ト共ニ或ハ各自ノ間ニ連帶シテ義務ヲ負擔シ若クハ其他ノ方法ニテ分別ヲ拋棄シタルトキハ此限ニ在ラス

保證ノ義務カ各別ノ證書ヨリ生スルトキト雖モ分別ノ利益ハ存在ス

第二十四條 保證人ハ檢索ノ利益ヲ用ヰタルト否ト分別ノ利益ヲ享クルト否トヲ問ハス訴追ヲ受ケタルトキハ第二十九條ニ明示シタル目的ヲ以テ債務者ヲ訴訟ニ參加セシムル爲メ基本ニ付テノ答辯前ニ民事訴訟法ニ定メタル方式及ヒ條件ニ從ヒ延期抗辯ヲ以テ債權者ニ對抗スルコトヲ得

第二十五條 保證人カ基本ニ付テ答辯スルトキハ主タル債務ノ組成又ハ其消滅ヨリ生スル抗辯ヲ以テ債權者ニ對抗スルコトヲ得

保證人ハ債務ヲ保證スルニ當リ債務者ノ無能力又ハ其承諾ノ瑕疵ヲ知ラザリシトキハ此等ノ事項ヨリ生スル無効ノ理由ヲ以テモ對抗スルコトヲ得

第二十六條 右ノ抗辯ニ付キ債權者ト保證人トノ間ニ有リタル判決ハ債務者ヲ害スルトコトヲ得ス

然レトモ之ヲ利スルコトヲ得但其判決ノ牽連シタル簡條ハ債務者ニ利ナルモノト不利ナルモノトヲ分ツコトヲ得ス

第二十七條 債務者ニ對シテ時効ヲ中斷シ又ハ債務者ヲ遲滯ニ付スル行爲ハ保證人ニ對シテ同一ノ効力ヲ生ズ

保證人ニ對シタル右同一ノ行爲ハ保證人カ債務者ノ委任ヲ受ケ又ハ債務者ト連帶シテ義務ヲ負擔シタルトキニ非サレハ債務者ニ對シテ効力ヲ生セス

第二十八條 主タル債務者ノ爲シタル債務ノ自白ハ保證人ヲ害ス  
保證人ノ爲シタル自白ハ委任又ハ連帶アル場合ニ非サレハ債務者ヲ害セス

第二十九條 債權者ヨリ訴追ヲ受ケタル保證人ハ第二十四條及ヒ財產編第三百九十九條ニ掲ケタル如ク主タル請求ニ對シテ債務者ノ答辯ヲ要ス可キ場合ニ於テハ其

答辯ヲ爲サシムル爲メ又債務者ノ敗訴ノ言渡ヲ受ク可キ場合ニ於テハ債務者ニ對シテ次條ニ定メタル賠償ノ言渡ヲ得ル爲メ擔保附帶ノ請求ヲ以テ債務者ヲ訴訟ニ召喚スルコトヲ得

右擔保附帶ノ請求ハ債務者ノ委任ヲ受ケタル保證人ノミニ屬ス

第三十條 主タル債務ヲ辨濟シ其他自己ノ出捐ヲ以テ債務者ニ義務ヲ免カレシメタル保證人ハ債務者ヨリ賠償ヲ受クル爲メ之ニ對シテ擔保訴訟權ヲ有ス但左ノ區別ニ從フ

第一 保證人カ債務者ノ委任ヲ受ケテ義務ヲ負擔シタルトキハ其債務者ニ義務ヲ免カレシメ又ハ債務者ノ名ニテ辨濟シタル元利其擔當シタル費用立替ヲ爲シタル時ヨリ其利息其他損害アルトキハ其賠償ノ金額ヲ債務者ヨリ償還セシムルコトヲ得又此委任ノ場合ニ於テ保證人ハ其分限ヲ以テ言渡ヲ受ケタルトキハ債務者ニ對シ直チニ其賠償ヲ受クル爲メ訴ヲ爲スコトヲモ得

第二 保證人カ債務者ノ不知ニテ義務ヲ負擔シタルトキハ債務者ノ義務ヲ免カレシメタル日ニ於テ之ニ得セシメタル有益ノ限度ニ從ヒ右ノ賠償ヲ受ク若シ保證人カ債務者ノ意ニ反シテ義務ヲ負擔シタルトキハ保證人ノ求償ノ日ニ於テ債務者ノ爲メ存在スル有益ノ限度ニ非サレハ右ノ賠償ヲ受クルコトヲ得ス

第三十一條 連帶又ハ不可分ニテ責ニ任スル數人ノ債務者ヨリ保證人ニ委任ヲ爲シタル場合ニ於テハ其債務者ハ財產取得編第二百四十九條ニ從ヒ保證人ニ對シテ連帶ノ擔保人タリ

第三十二條 債務者ヲ訴訟ニ參加セシムルコトヲ怠リタル保證人ハ其債務者カ債權ニ對抗ス可キ排訴抗辯ヲ有シタルコトヲ證スルトキハ第三十條ニ定メタル求償權ヲ有セス

若シ債務者カ債權者ニ對抗スキ延期抗辯ノミナ有シタルトキハ右ノ懈怠アル保證人ノ求償ニ對シ之ヲ以テ對抗スルコトヲ得

第三十三條 保證人ハ有効ニ辨濟シタルモ債務者ニ其旨ヲ有益ニ通知スルコトヲ怠リ爲メニ債務者カ善意ニテ再ヒ辨濟シ此他有償ニテ自己ノ免責ヲ得タルトキモ亦其求償權ヲ失フ

右ニ反シテ債務者カ自ラ債務ヲ消滅セシメタルコトヲ保證人ニ通知スルコトヲ怠リタルトキハ債務者ハ其場合ニ從ヒ債務ノ消滅後保證人ノ爲シタル辨濟ニ付キ責任アリトノ宣告ヲ受クルコト有リ

孰レノ場合ニ於テモ利害ノ關係アル當事者ハ受取ルコトヲ得サルモノヲ受取りタル債權者ニ對シテ求償權ヲ有ス

第三十四條 委任ヲ受ケテ義務ヲ負擔シタル保證人ハ辨濟ヲ爲ス前又訴追ヲ受ケル前ニテモ債務者ヨリ豫メ賠償ヲ受ケル爲メ又ハ未定ノ損失ヲ擔保セシムル爲メ左ノ三箇ノ場合ニ於テ之ニ對シ訴ヲ爲スコトヲ得

第一 債務者カ破産シ又ハ無資力ト爲リ且債權者カ清算ノ配當ニ加入セサルトキ

第二 債務ノ満期ノ到リタルトキ

第三 満期ノ不定ナル債務カ其日附ヨリ十年ヲ過キタルトキ

第三十五條 債權者カ完全ノ辨濟ヲ受ケサル間ハ前條及ヒ第二十九條ニ依リ債務者

ヨリ豫メ保證人ニ供ス可キ賠償ハ債務者其債權者ニ對スル自己ノ免責ヲ保スル爲メ債權者ノ名ヲ以テ之ヲ供託シ又ハ其他ノ方法ニテ之ヲ留存スルコトヲ得

第三十六條 主タル債務ヲ辨濟シ其他ノ方法ニ因リ義務ヲ消滅セシメタル總テノ保證人ハ己レノ權利ニ基キテ有スル訴權ノ外債務者又ハ第三者ニ對シ債權者ノ有シタル總テノ權利ニ付キ財產編第四百八十二條第一號ニ從ヒテ代位ス但第三十二條及第三十三條ノ制限ニ從フコトヲ要ス債權者カ債務者ノ不動産ニ付キ先取特權又ハ抵當ヲ有シ其登記ヲ爲シタルトキハ保證人ハ代位ヲ目的トシテ自己ノ條件附ノ

債權ヲ此登記ニ附記スルコトヲ得又讓渡ノ場合ニ於テハ其不動産ヲ所持スル第三者ハ濫除ノ爲メ債權者ノ外保證人ニ對シテモ亦提供ヲ爲スコトヲ要ス

債權者カ有益ナル時期ニ於テ右ノ登記ヲ爲ササリシトキハ保證人ハ第四十五條及ヒ財產編第五百十二條ニ從ヒ債權者ニ對シテ自己ノ免責ヲ請求スルコトヲ得

第三十七條 連帶又ハ不可分ナル義務ノ數人ノ債務者アルトキハ保證人ハ其中ノ或ル者ヲ保證シ他ノ者ヲ保證セサルトキト雖モ右ノ代位ニ依リ債務者ノ各自ニ對シテ全部ニ付キ求償スルコトヲ得

第三款 共同保證人間ノ保證ノ効力

第三十八條 一箇ノ債務ニ付キ數人ノ保證人アリテ其中ノ一人カ任意ナルト否トヲ問ハス債務ノ全部ヲ辨濟シタルトキハ其保證人ハ主タル債務者ニ對スル求償ニ關シ上ニ記載シタル條件、制限及ヒ區別ニ從ヒ或ハ事務管理ノ訴權ニ因リ或ハ債權者ノ訴權ニ因リ他ノ保證人ノ各自ニ對シテ均一部分ニ付キ求償スルコトヲ得

右ノ保證人カ債務ノ全部ヲ辨濟セスシテ自己ノ部分ヨリ多ク辨濟シタルトキハ其超過額ノ爲メノ求償ハ他ノ共同保證人間ニ均一ニ之ヲ分ツ



第三十九條 共同保證人中ニ無資力ト爲リタル者アルトキハ辨濟シタル者ハ其無資力者ノ引受人ニ對シテ求償權ヲ有ス若シ引受人アラサルトキハ無資力者ノ部分ハ債務ヲ辨濟シタル者ヲ加ヘ他ノ有資力ナル共同保證人ノ間ニ之ヲ分ツ

第四十條 前條ニ依リ訴ヲ受ケタル共同保證人ハ未タ主タル債務者ノ財産ノ檢索アラサルトキハ第二十條以下ニ定メタル規則及ヒ條件ニ從ヒテ豫メ其檢索ヲ請求スルコトヲ得

右同一ノ權利ハ保證人ノ引受人ニモ屬ス

第四十一條 連帶シテ又ハ不可分ナル債務ノ爲メ義務ヲ負擔シタル數人ノ保證人中全部履行ニ付キ訴ヲ受ケタル者ハ本訴ニ附帶シテ共同保證人ヲ擔保ノ爲メニ召喚シ之ニ對シ同一ノ判決ヲ以テ前數條ニ許サレタル言渡ヲ受ケシムルコトヲ得

第四十二條 保證人ノ一人ニ對スル時効中斷又ハ付遲滯ノ行爲ハ他ノ保證人ニ對シテ其効ナシ但其義務ヲ連帶ナルトキハ此限ニ在ラス

債權者ト保證人ノ一人トノ間ニ主タル債務ニ關シ有リタル判決又ヒ自白ハ他ノ保證人ヲ利スルコトヲ得然レトモ之ヲ害スルコトヲ得ス

第四十三條 相互ニ連帶シ又ハ債務者ト連帶シタル保證人中ニ無資力ト爲リタル者アルトキハ各保證人ノ間ニ第六十七條乃至第六十九條ヲ適用ス但其各條ニ記載シタル區別ニ從フ

第三節 保證ノ消滅

第四十四條 保證ハ義務消滅ノ通常ノ原因ニ由リ直接ニ消滅ス

保證ノ更正、免除、相殺及ヒ混同ハ財産編第五百二條、第五百十一條、第五百二十一條及ヒ第五百二十八條ニ於テ之ヲ規定ス

第四十五條 債權者カ故意又ハ懈怠ニテ保證人ノ其代位ニ因リテ取得スルコトヲ得

ヘキ擔保ヲ減シ又ハ害シタルトキハ總テノ保證人ハ債權者ニ對シテ自己ノ免責ヲ請求スルコトヲ得

保證人ノ引受人ハ保證人ノ權利ニ基キ右ノ權利ヲ援用スルコトヲ得

第四十六條 保證ハ主タル債務消滅ノ總テノ原因ニ由リテ間接ニ消滅ス

債權者ト主タル債務者トノ間ニ爲シタル代物辨濟、更改、免除、相殺及ヒ混同ノ保證人ニ對スル効力ハ財産編第四百六十一條、第五百一條、第五百六條、第五百二十一條及ヒ第五百三十八條ニ於テ之ヲ規定ス

第四節 法律上及ヒ裁判上ノ保證ニ特別ナル規則

第四十七條 法律ノ規定又ハ判決ニ從ヒテ保證人ヲ立ツル責アル者ハ自ラ保證人ヲ立テント約シタルトキト同シク第十五條及ヒ第十六條ニ定メタル如キ條件ヲ具備スル保證人ヲ立ツルコトヲ要ス

法律上及ヒ裁判上ノ保證人ヲ承認スル手續ハ民事訴訟法ニ於テ之ヲ規定ス

第四十八條 裁判所ハ法律カ裁判執行ノ爲メ保證人ヲ立テシムル權能ヲ付與シタル場合ニ非サレハ此カ爲メ保證人ヲ立ツ可キコトヲ命スルヲ得ス

第四十九條 裁判上ノ保證人及ヒ其引受人ハ財産檢索ノ利益ヲ有スルコトヲ得ス

第五十條 法律上及ヒ裁判上ノ保證人ハ其債務者ニ對スル擔保ノ求償ニ關シテハ常ニ之ヲ債務者ノ代理人ト看做ス

第二章 債務者間及ヒ債權者間ノ連帶

總則

第五十一條 債務ノ目的單數ナルモ主タル當事者トシテ之ニ關係スル人複數ナルト

キハ其債務ハ財産編第四百三十八條ニ指示シ且下ノ二節ニ記載スル如ク受方又ハ働方ニテ連帶タルコト有リ

第一節 債務者間ノ連帶

第一款 債務者間ノ連帶ノ性質及ヒ原因

第五十二條 債務者間ノ連帶即チ受方連帶ハ共同債務者ヲシテ其共通ノ利益ニ於テモ債權者ノ利益ニ於テモ相互ニ代人タラシム

此連帶ハ合意、遺言又ハ法律ノ規定ヨリ生ス

連帶ハ之ヲ推定セス如何ナル場合ニ於テモ明示ニテ之ヲ定ムルコトヲ要ス但不可分ニ關シ第八十八條ニ記載シタルモノハ此限ニ在ラス

第五十三條 數人ノ債務者ノ連帶義務ハ同一ノ行為ヲ以テ又同時、同所ニ於テ之ヲ契約スルコトヲ要セス但其ノ債務目的及ヒ原因ハ同一ナルコトヲ要ス

又連帶債務者ハ別異及ヒ不均一ノ體様又ハ負擔ヲ以テ責ニ任スルコトヲ得

第二款 債務者間ノ連帶ノ効力

第五十四條 數人ノ連帶債務者ヲ有スル債權者ハ其訴追セント擇ミタル債務者ニ對シ唯一人ノ債務者ニ於ケル如ク且其債務者ヨリ檢索又ハ分別ノ利益ノ抗辯ヲ受ケルコト無ク義務全部ノ履行ヲ要求スルコトヲ得

又債權者ハ皆濟ヲ受ケルニ至ルマテ同時又ハ順次ニ總債務者ヲ訴追スルコトヲ得

第五十五條 各債務者ハ訴ヲ受ケタルト否トナ問ハス連帶債務全部ノ辨濟ヲ受ケルコトヲ債權者ニ強要スルコトヲ得

第五十六條 連帶債務者ニシテ債務ニ於ケル全部又ハ自己ノ部分ヨリ多額ニ付キ訴ヘラレタル者ハ共同債務者ヲ訴訟ニ召喚シ附帶ノ擔保方法ヲ以テ其債務者ヲシテ

答辯又ハ辨濟ヲ擔任セシムル爲メ必要ナル期間ヲ請求スルコトヲ得但債權者ニ對シテハ訴追ヲ受ケタル債務者ノミ其對手人タル可シ

共同債務者ハ亦其利益保護ノ爲メ任意ニ自費ヲ以テ訴訟ニ參加スルコトヲ得

第五十七條 連帶債務ノ履行ノ爲メ訴ヲ受ケタル各債務者ハ自己ノ權利ニ基クト共同債務者ノ權利ニ基クトナ問ハス義務ノ組成又ハ消滅ヨリ生スル答辯方法ヲ以テ債務ノ全部ニ付キ債權者ニ對抗スルコトヲ得

右ノ外更改、免除、相殺及ヒ混同ニ關シテハ財産編第五百一條、第五百六條、第五百九條、第五百二十一條及ヒ第五百二十五條ノ規定ニ從フ

第五十八條 債權者ノ一人ノ無能力又ハ承諾ノ瑕疵ニ基キタル答辯方法ハ其人自身ニ非サレハ之ヲ援用スルコトヲ得然レトモ此答辯方法カ一旦許サレタル上ハ債務ニ於ケル其人ノ部分ニ付キ他ノ債務者ヲ利ス但他ノ債務者カ契約ノ際義務履行ニ付キ其者ノ分擔ヲ豫期スルコト有リタルトキニ限ル

第五十九條 前二條ニ規定シタル種種ノ事項ニ付キ債權者ト債務者ノ一人トノ間ニ有リタル判決及ヒ自白ハ他ノ債權者ヲ害セス又之ヲ利セス以テ其効力ヲ生ス

第六十條 一人ノ債務者ト他ノ債務者トノ間ニ於ケル連帶ノ存在ノミニ關シテ其一人ト債權者トノ間ニ有リタル判決及ヒ自白ハ他ノ債權者ヲ害セス又之ヲ利セス

第六十一條 連帶債務者ノ一人ニ對シ債權者ノ利益ニ於テ時効ヲ中斷シ又ハ付遲滯ヲ成ス原因ハ他ノ債務者ニ對シテ同一ノ効力ヲ有ス

第六十二條 義務ノ目的物ノ滅失其他總テ義務履行ノ不能カ連帶債務者ノ一人ノ過失ニ因リ又ハ其付遲滯後ニ生スルトキハ他ノ債務者ハ債權者ニ對シ連帶シテ損害賠償又ハ過怠約款ノ責ニ任ス但過失アリ又ハ遲滯ニ在リシ債務者ニ對スル他ノ債務者ノ求償權ヲ妨ケス

第六十三條 連帶債務者中ニテ債務ヲ辨濟シ其他自己ノ出捐ヲ以テ共同ノ免責ヲ得セシメタル者ハ他ノ債務者ニ對シ辨濟又ハ免責ノ限度ニ於テ其各自ノ負擔部分ニ付キ自己ノ權利ニ基キテ求償權ヲ有ス

右ノ求償中ニハ會社及ヒ代理ノ規則ニ從ヒ辨償金及ヒ必要ナル出捐ノ賠償ノ外辨償以後ノ法律上ノ利息及ヒ避クルコトヲ得サリシ費用ヲ包含ス

第六十四條 債務ヲ辨濟シタル債務者ハ債權者ノ實際受取リタルモノノ限度ニ於テノミ財產編第四百八十二條第一號ニ從ヒ法律上ノ代位ニ因リテ其債權者ノ權利及ヒ訴權ヲ行フコトヲ得

然レトモ其債權者ハ前條ニ記載シタル如ク其共同債務者ノ各自ノ間ニ於テ自己ノ訴ヲ分ツコトヲ要ス

第六十五條 不注意ニテ辨濟シタル保證人ニ對シ第三十二條及ヒ第三十三條ニ規定シタル求償ノ失權ハ訴追又ハ辨濟ヲ共同債務者ニ告知スルコトヲ怠リタル連帶債務者ニ對シテ之ヲ適用ス

第六十六條 共同債務者ノ一人カ上ニ指示シタル方法ノ一ニ因リ求償ノ行ハレタル當時ニ於テ無資力ナルトキハ無資力者ノ部分ハ辨濟シタル者ヲモ加ヘテ他ノ資力アル者ノ間ニ割合ニ應シテ之ヲ分ツ但求償者ノ責ニ歸ス可キ懈怠アリシトキハ此限ニ在ラス

第六十七條 何等ノ辨濟モ有ラサル前ニ連帶債權者ノ一人ノ無効力ト爲リタルトキハ債權者ハ其債權ノ全額ニ付キ清算ニ加ハルコトヲ得

此場合ニ於テ辨濟ノ殘額ハ他ノ債務者之ヲ負擔ス但其債務者ノ自己ノ部分外ニ負擔シタルモノニ對スル求償ハ其清算ニ加ハリタル他ノ債權者ヲ害スルコトヲ得ス

第六十八條 債務者ノ一人ノ無資力ト爲リタル前ニ一分ノ辨濟アリタルトキハ債權者ハ辨濟殘額ノ爲メニ非サレハ其清算ニ加ハルコトヲ得又一分ノ辨濟ヲ爲シタル他ノ債務者ハ第六十三條ニ從ヒ自己ノ受取ル可キモノヲ辨償セシムル爲メ清算ニ加ハルコトヲ得

第六十九條 何等ノ辨濟モ有ラサル前ニ總テノ連帶債務者又ハ其中ノ數人ノ無資力ト爲リタル場合ニ於テ債權者ハ其債權ノ全額ニ付キ各清算ニ加ハルコトヲ得

然レトモ債權者ハ清算ノ一ニ於テ配當金ヲ受取リタルトキハ他ノ清算ニ於テ其債權ノ全額ニ從ヒ債權者ニ充テタル新配當金ハ以前ノ配當ニ於テ未タ受取ラサルモノノ割合ニ應スルニ非サレハ債權者之ヲ受取ルコトヲ得ス

受取ノ殘額ハ各清算ニ之ヲ返還ス但各清算ノ辨濟シタルモノノ割合ニ從フ

第三款 債務總間ノ連帶ノ終了

第七十條 債權者カ總債務者ニ對シテ連帶ヲ拋棄スルトキハ財產編第四百三十八條第一項ニ規定シタル如ク其債務者ノ義務ハ單ニ連合ノモノト爲リテ存シ其他ノ性質ヲ變スルコト無シ

第七十一條 財產編第五百十條ニ從ヒ明示又ハ默示ニテ債務者ノ一人又ハ數人ニ對シテノミ連帶ノ拋棄アリタルトキハ他ノ債務者ハ連帶ノ免除ヲ得タル者ノ部分ニ於テノミ其義務ヲ免カル

連帶ノ免除ヲ得サル債務者中ニ無資力者アルトキハ債權者ハ其無資力ニ付キ連帶ノ免除ヲ得タル者ノ部分ヲ負擔ス

第七十二條 債權者カ連帶債務者ノ一人ヨリ供シタル擔保ニシテ他ノ債務者ノ辨濟シテ代位スルコトヲ得ヘキモノノ全部又ハ一分ヲ毀損シ又ハ滅失セシメタルトキハ他ノ債務者ハ其擔保ヲ供シタル者ノ部分ニ付キ連帶ノ義務ヲ免カレント請求スルコトヲ得

右ノ請求ニ因リテ宣告シタル免責ハ連帶ノ任意免除ト同一ノ効力ヲ有ス

第四款 全部義務

第七十三條 財産編第三百七十八條、第四百九十七條第二項及ヒ其他法律カ數人ノ債務者ノ義務ヲ其各自ニ對シ全部ノモノト定メタル場合ニ於テハ相互代理ニ付シタル連帶ノ効力ヲ適用スルコトヲ得ス但其總債務者又ハ其中ノ一人カ債務ノ全部ヲ辨濟スル言渡ヲ受ケタルトキモ亦同シ

然レトモ一人ノ債務者ノ爲シタル辨濟ハ債權者ニ對シ他ノ債務者ヲ免カレシム又辨濟シタル者ハ事務管理ノ訴權ニ依リ又ハ債權者代位ニシテ得タル訴權ニ依リテ他ノ債務者ニ對シ其部分ニ付キ求償權ヲ有ス

第二節 債權者間ノ連帶

第一款 債權者間ノ連帶ノ性質及ヒ原因

第七十四條 債權者間ノ連帶即チ働方連帶ハ權利ノ保存及ヒ行使ニ付キ其債權者ヲシテ互ニ代人タラシム

此連帶ハ合意又ハ遺言ヨリ生ス

第七十五條 數人ノ連帶債權者ニ對スル債務者ノ約務ハ同一ノ行爲ヲ以テ又同時、

同所ニ於テ之ヲ契約スルコトヲ要セス但其義務ノ目的及ヒ原因ハ同一ナルコトヲ要ス

又債務者ハ數人ノ債權者ニ對シ別異及ヒ不均一ノ體様又ハ負擔ヲ以テ責ニ任スルコトヲ得

第二款 債權者間ノ連帶ノ効力

第七十六條 各連帶債權者ハ唯一人ノ債權者ナル如ク義務全部ノ履行ヲ債務者ニ要求スルコトヲ得

債權者ノ一人カ訴ヲ起シタルトキハ他ノ各債權者ハ共通ノ利益及ヒ自己ノ利益ノ保護ノ爲メ訴訟ニ參加スルコトヲ得

第七十七條 債務者ハ債權者ノ一人ヨリ訴追又ハ合式ノ要求ヲ受ケサル間ハ債務ノ全額ノ辨濟ヲ受ケルコトヲ債權者ノ各自ニ強要スルコトヲ得之ニ反スル場合ニ於テハ訴追者又ハ要求者ニ對スルニ非サレハ辨濟ヲ爲スコトヲ得ス

若シ同時ニ數人ノ訴追者又ハ要求者アルトキハ債務者ハ其總テノ者ニ對スルニ非サレハ辨濟ヲ爲スコトヲ得ス

第七十八條 義務組成ノ瑕疵ニ基キタル抗辯ニ付キ有リタル判決ハ債務ノ全部ニ對シ總債權者ノ利害ニ於テ其効力ヲ生ス但訴訟ニ其名ヲ出タササリシ者ニ對シテモ亦同シ

第七十九條 義務消滅ノ原因ニ基キタル抗辯ニ付キ有リタル判決ハ左ノ區別ニ從フニ非サレハ訴訟ニ與カラザリシ債權者ニ對シテ其効ナシ

第一 第七十七條ニ定メタル條件ニ從ヒ債權者ノ一人ニ爲シタル辨濟ハ全部ニ付キ總債權者ニ之ヲ以テ對抗スルコトヲ得又財産編第五百二十一條第三

項ニ記載シタル如ク債權者ノ一人ニ對シ債務者ノ有スル相殺ニ付テモ亦同シ但相殺ノ原因カ第七十七條ニ從ヒ債務者ヨリ其債權者ニ有効ニ辨濟スルコトヲ得ヘキ時期ニ於テ生シタルトキニ限ル

第二 債權者ノ一人ノ行爲ヨリ生シ又ハ其權利ニ基キテ生スル更改、免除及ヒ混同ハ財産編第五百一條第三項、第五百十五條第一項及ヒ第五百三十五條第二項ニ從ヒ其債權者ノ部分ニ非サレハ債務ヲ消滅セシメス但此行爲ハ他ノ債權者ノ訴追又ハ要求ノ前ニ在ルコトヲ要ス

又右同一ノ行爲ニ關シ及ヒ辨濟又ハ相殺ニ關スル和解ニ付テモ亦同シ  
第八十條 債權者中ノ一人ノ一身ニ限ル債務者ノ抗辯ニ付キ有リタル判決ハ他ノ債權者ヲ害セス又之ヲ利セス又債權者ノ一人カ其連帶ニ於ケル權利ニ付キ債務者ト爲シタル和解ニ付テモ亦同シ

第八十一條 債權者ノ一人カ債務者ニ對シテ時効ヲ中斷シ又ハ其債務者ヲ遲滯ニ付スル行爲ハ全部ニ付キ他ノ債權者ヲ利ス  
債權者ノ一人ノ利益ニ於テ法律ノ設定シタル時効ノ停止ハ其部分ニ限り其一人ノミヲ利ス

第八十二條 義務ノ全部又ハ一分ノ履行ヲ得タル連帶債權者ハ他ノ特別ノ關係及ヒ其相互ノ部分ニ從ヒ之ニ其利益ヲ分與スルコトヲ要ス

第三款 債權者間ノ連帶ノ終了

第八十三條 債權者間ノ連帶ハ拋棄ニ因リテ止ム其拋棄ハ明示ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第八十四條 連帶ノ拋棄ハ債權者ノ一人若クハ數人又ハ其總員ヨリ之ヲ爲スコトヲ

得

總債權者ノ働方連帶ノ拋棄ハ第七十條ニ規定シタル如ク受方連帶ノ拋棄カ共同債務者ニ對シテ生セシムルト同一ノ効力ヲ其債權者間ニ生セシム  
若シ債權者ノ一人又ハ數人カ拋棄ヲ爲シタルトキハ他ノ債權者ハ此拋棄ヲ爲シタル者ノ部分ニ付テノミ訴ヲ爲シ又ハ辨濟ヲ受ケル權利ヲ失フ

第八十五條 連帶ノ拋棄ハ債務者ノ承諾ナクシテ有効ナリ

然レトモ其拋棄ハ之ヲ債務者ニ告知セシカ又ハ債務者明確ニ之ヲ知リタルトキニ非サレハ上ノ規定ヲ以テ債務者ニ許シタル辨濟其他ノ行爲ニ對シテ債權者ヨリ之ヲ援用スルコトヲ得ス

債務者ハ拋棄ヲ申立ツル利益アルトキハ之ヲ申立ツルコトヲ得又拋棄カ其權利ノ詐害ニ於テ爲サレタルトキハ之ヲ駁撃スルコトヲ得

第三章 任意ノ不可分

第八十六條 財産編第四百四十一條及ヒ第四百四十二條ニ規定シタル不可分ノ外債務ハ尙ホ數人ノ債務者ノ負擔又ハ數人ノ債權者ノ利益ニ於テ債務履行ノ擔保トシテ任意上不可分タルコトヲ得但財産編第四百四十三條ニ旨示シタル如ク受方又ハ働方ノ連帶ニ併合シ又ハ併合セサルコト有リ

任意ノ不可分ハ合意又ハ遺言ヲ以テ之ヲ設定スルコトヲ得此不可分ハ明示タルコトヲ要ス

第八十七條 債務者ノ負擔ニ於テ設定シタル不可分ハ同時ニ働方タル可キコトノ明示アルニ非ザレハ債權者ノ利益ニ於テ存立セス  
又債權者ノ利益ニ於テ設定シタル不可分ハ同時ニ受方タル可キコトノ明示アルニ

非サレハ債務者ノ負擔ニ於テ存立セス

第八十八條 受方ナルト働方ナルトヲ問ハス任意ノ不可分ヲ設定シタルトキハ受方又ハ働方ノ連帶ヲ明示ニテ阻却セサル場合ニ限り債務者又ハ債權者ノ間ニ此連帶ノ効力ヲ生セシム

第八十九條 債務者ノ一人ニ對シテ時効ヲ中斷又ハ停止スル原因ハ總債務ニ付キ他ノ債務者ニ對シテ中斷又ハ停止テ生ス  
又債權者ノ一人ノ權利ヨリ生スル時効ノ中斷又ハ其停止ノ原因ハ他ノ債權者ヲ利ス

第九十條 債權者カ受方又ハ働方ニテ同時ニ連帶及ヒ不可分ナルトキハ第八十三條及ヒ財産編第五百十條ニ記載シタル區別ニ從ヒ明示ナルトキハ默示ナルトキハ問ハス連帶ノ拋棄ハ亦任意ノ不可分ノ拋棄ヲ惹起ス但不可分ノ拋棄ハ連帶ヲ存立セシム

第九十一條 財産編第四百四十四條乃至第四百四十九條、第五百一條第四項、第五百六條第三項、第五百九條第一項、第五百十三條、第五百十五條第二項、第五百二十一條第四項、第五百三十六條及ヒ第五百三十七條第二項ノ規定ハ任意ノ不可分ニ之ヲ適用ス

債權者カ不可分ニテ義務ヲ負ヒタル債務者ノ代位ニ因リテ得ルコト有ル可キ擔保ヲ滅失セシメ又ハ減少セシメタルトキハ其債務者ハ債權者ニ對シテ第七十二條ノ免責ヲ援用スルコトヲ得

第二章 物上擔保  
第一章 留置權

第九十二條 留置權ハ財産編及ヒ財産取得編ニ於テ特別ニ之ヲ規定シタル場合ノ外債權者カ既ニ正當ノ原因ニ由リテ其債務者ノ動産又ハ不動産ヲ占有シ且其債權カ其物ノ讓渡ニ因リ或ハ其物ノ保存ノ費用ニ因リ或ハ其物ヨリ生シタル損害賠償ニ因リテ其物ニ關シ又ハ其占有ニ牽債シテ生シタルトキハ其占有シタル物ニ付キ債權者ニ屬ス

委任ナクシテ他人ノ事務ヲ管理シタル者ハ必要ノ費用及ヒ保持ノ費用ノ爲メニ非サレハ其管理シタル物ニ付キ留置權ヲ有セス

第九十三條 債權者カ留置スル權利ヲ有シタル物ノ一分ノミヲ留置シタルトキ其部分ハ總債務ヲ擔保スルニ足ルニ於テハ之ヲ擔保ス

之ニ反シテ債權者ハ債務者ヨリ一分ノ辨濟ヲ受ケタリト雖モ全部ノ辨濟ヲ受グルニ至ルマテ留置權ニ服シタル總テノ物ヲ留置スルコトヲ得

第九十四條 留置權ハ留置物ノ價額ニ付キ債權者ニ先取特權ヲ付與セス

然レトモ留置物ヨリ天然又ハ法定ノ果實又ハ產出物ノ生スルトキハ留置權者ハ他ノ債權者ニ先ダチテ之ヲ收取スルコトヲ得但其果實又ハ產出物ハ其債權ノ利息ニ充當シ猶ホ餘分アルトキハ元本ニ充當スルコトヲ要ス

留置權者ハ其收取スルコトヲ怠リタル果實及ヒ產出物ニ付キ其責ニ任ス

第九十五條 留置權ハ債務者カ留置物ヲ讓渡シ又他ノ債權者カ之ヲ差押へ及ヒ賣却セシムル妨ト爲ラス

然レトモ孰レノ場合ニ於テモ取得者ハ留置權者ニ全ク辨濟セスシテ其物ヲ占有スルコト得ス

第九十六條 右ノ外動産又ハ不動産ノ留置權者ハ次ノ二章ニ規定シタル如ク動産又

ハ不動産ノ質取債権者ト同一ノ責任ニ從フ  
此他動産質及ヒ不動産質ニ關スル規定ハ此章ノ規定ニ觸レサル限リハ留置者ニ之  
ヲ適用ス特ニ債権者カ有意ニテ留置權ヲ行フコトヲ怠リ又ハ實際之ヲ行フコトヲ  
止メタルトキハ其留置權ヲ失フ

第二章 動産質

第一節 動産質契約ノ性質及ヒ成立

第九十七條 動産質ハ債務者カ一箇又ハ數箇ノ動産ヲ特ニ其義務ノ擔保ニ充ツル契  
約ナリ

第九十八條 動産質契約ハ債務者ノ委任ヲ受ケ又ハ好意ニテ債務者ノ爲メ擔保ヲ供  
スル第三者ト債権者トノ間ニモ亦之ヲ爲スコトヲ得

孰レノ場合ニ於テモ動産質ヲ供シタル第三者ハ第三十條及ヒ第三十一條ニ從ヒ保  
證人ノ如ク債務者ニ對シテ求償權ヲ有ス

第九十九條 動産質ハ其物ヲ處分スル能力ヲ有スル者ニ非サレハ有効ニ之ヲ供スル  
コトヲ得ス

合意上、法律上及ヒ裁判上ノ管理人ニ付テモ亦同シ此等ノ者ハ其權限ヲ踰エサル  
コトヲ要ス

若シ債務ニ關係ナキ第三者ヨリ動産質ヲ供シタルトキハ其第三者ハ第十二條ニ記  
載シタル如ク無償ニテ物ヲ處分スル能力ヲ有スルコトヲ要ス

第一百條 動産質ハ債権及ヒ質物ヲ明カニ指定セル證書ヲ以テスルニ非サレハ之ヲ  
設定スルコトヲ得ス  
右質物ハ之ヲ他物ニ易フルコトヲ得サル様詳細ニ記載シ且要用アルトキハ之ヲ評

價スルコトヲ要ス

若シ質物カ定量物ナルトキハ其種類、數量、尺度ヲ以テ之ヲ指定スルコトヲ要ス

第一百一條 法律ニ從ヒ證人ニ依リテ債權ヲ證スルコトヲ得ル場合ニ於テハ證書ノ調  
製ヲ要セス此場合ニ於テハ債權ノ額及ヒ質物ノ相違ナキコト其性質、價額ヲ或ハ  
併合シ或ハ各別ニ人證ヲ以テ證スルコトヲ得

第一百二條 動産質ハ質取債権者カ有體ナル質物ヲ現實ニ且繼續シテ占有スルニ非サ  
レハ之ヲ以テ第三者ニモ他ノ債權者ニモ對抗スルコトヲ得ス

然レトモ質物ハ當事者雙方カ選定シ又ハ債權者カ自己ノ責任ヲ以テ選定シタル第  
三者ノ手ニ之ヲ寄託スルコトヲ得

此規定ハ債權ノ無記名證券ニモ之ヲ適用ス

第一百三條 質物カ債權ノ記名證券ナルトキハ質取債權者ハ其證券ヲ占有スルコトヲ  
要ス

此他記名證券ノ質ノ設定ニ付テハ債權ノ讓渡ヲ告知スル通常ノ方式ヲ以テ第三債  
務者ニ其設定ヲ告知シ又ハ其第三債務者カ任意ニテ之ヲ參加スルコトヲ要ス

又財産編第三百四十七條ノ規定ハ右ノ場合ニ之ヲ適用ス

右ハ總テ裏書ヲ以テ取引ス可キ商證券又ハ商品ノ質ニ關シ商法ニ記載シタルモノ  
ヲ妨ケス

第一百四條 會社ノ記名ノ株券又ハ債券ヲ質ト爲ストキハ證券ノ交付ノ外會社定款又  
ハ法律ニ於テ株券又ハ債券ノ讓渡ノ爲メニ定メタル方式ヲ以テ之ヲ會社ニ告知シ

其帳簿ニ之ヲ記入スルコトヲ要ス

第一百五條 動産質ハ當事者ノ意思ニ從ヒ働方及ヒ受方ニテ不可分タリ但反對ナル明

示ノ合意アルトキハ此限ニ在ラス  
動産質ハ債務者ヨリ債務ノ一分ヲ辨濟シタルトキト雖モ元利及ヒ費用ノ皆濟ニ至ルマテ質物ノ全部及ヒ各箇ニ於テ存在ス

第二節 動産質契約ノ効力

第六條 質取債權者ハ質物ヲ返還スルマテ其看守及ヒ保存ニ付キ善良ナル管理人ノ注意ヲ加フル責アリ

質取債權者ハ債務者ノ許諾ヲ受ケスシテ質物ヲ貸貸スルコトヲ得ス又債務者ノ許諾ヲ受ケタルトキ又ハ物ノ使用カ其保存ニ必要ナルトキニ非サレハ自ラ之ヲ使用スルコトヲ得ス

若シ質取債權者カ質物ヲ濫用スルトキハ裁判所ハ其失權ヲ宣告スルコトヲ得

第七條 質取債權者ハ自己ノ責任ヲ以テ質物ヲ自己ノ債權者ニ轉質ト爲スコトヲ得此場合ニ於テハ轉質ヲ爲ササレハ生セサル可キ意外又ハ不可抗ノ危險ニ付テモ亦其責ニ任ス

第八條 質物カ果實又ハ產出物ヲ生スルトキハ之ニ關シ質取債權者ハ第九十四條第二項ニ定メタル留置權者ノ權利及ヒ義務ヲ有ス

質ト爲シタル債權ニ關シテハ質取債權者ハ其利息ヲ收取シ之ヲ自己ノ債權ニ充當ス然レトモ債務者ノ特別ナル委任ヲ受ケスシテ其元本ヲ受取ルコトヲ得ス但裏書ヲ以テ取引ス可キ證券ニ關スルトキハ此限ニ在ラス

第九條 質取債權者カ質物保存ノ爲メ必要ノ出費ヲ爲シタルトキハ債權ニ先タチ動産質ヲ以テ其出費ノ辨償ヲ擔保ス  
質物ノ隠レタル瑕疵ニ因リテ債權者ノ受ケタル損害ノ賠償ニ付テモ亦同シ

第十條 質取債權者ハ動産質ノ附キタル主從ノ債務及ヒ前條ノ償金ノ皆濟ニ至ルマテ債務者及ヒ其讓受人ニ對シテ質物ノ占有ヲ留置スルコトヲ得

債權者ハ其債權ノ滿期ニ至ラサル間ハ債務者ノ他ノ債權者ヨリ爲ス質物ノ差押及ヒ其競賣ヲ拒ムコトヲ得

第十一條 動産質ノ附キタル債務カ滿期ト爲リタルトキ債務者履行ヲ爲ササルニ於テハ質取債權者又ハ其他ノ債權者ヨリ質物ノ競賣ヲ求ムルコトヲ得質取債權者ハ他ノ債權者ニ先タチ元利、費用及ヒ第九條ニ掲ケタル償金ノ辨償ヲ受ク

第十二條 他ノ債權者ヨリ競賣ヲ求メス又ハ之ヲ實行スルコトヲ得サルトキ質取債權者ハ質物ヲ已レノ有ト爲サントスルコトニ付キ債務者ト一致セサルニ於テハ鑑定人ノ評價シタル價額ニ達スルマテ質物ヲ辨濟ニ充ツ可キコトヲ裁判所ニ請求スルコトヲ得但其請求書ヲ債務者ニ豫メ提示スルコトヲ要ス  
質物ノ價額カ債務ヲ超ユル場合ニ於テハ質取債權者ハ債務者ニ其超過額ヲ辨償スルコトヲ要ス

第十三條 總テ動産質契約ノ約款又ハ債務滿期前ノ合意ニシテ債權者ニ其債權ノ全部又ハ一分ニ付キ辨濟ノ爲メ裁判上ノ評價ナクシテ流質ヲ許スモノハ當然無効タリ

本條ノ禁止ヲ犯ス爲メ債務者カ債權者ニ爲シタル受戻約款附ノ賣買其他ノ合意ハ之ヲ無効ト宣告スルコトヲ得

本條ニ定メタル無効ハ質取債權者ヨリ之ヲ援用スルコトヲ得スシテ債務者又ハ其承繼人ノミ之ヲ援用スルコトヲ得

第十四條 質物カ質取債權者ノ方ニ存スル間ハ其債務ノ免責時効ノ成就ヲ停止ス



第百十五條 質物ノ占有ハ常ニ容假ノ占有ニシテ其占有ノ繼續期ノ如何ニ拘ハラス  
又債務カ辨濟其他ノ方法ニテ消滅シタル後ト雖モ質取債權者ハ取得時効ヲ援用ス  
ルコトヲ得ス

然レトモ財産編第百八十五條ニ定メタル二箇ノ場合ニ於テハ容假タルコトハ止ム  
第三章 不動産質

第一節 不動産質ノ目的、性質及ヒ組成

第百十六條 不動産質契約ハ不動産質債權者ニ他ノ總債權者ヨリ先ニ其不動産ノ果  
實及ヒ入額ヲ收取スル權利ヲ付與ス

債務ノ滿期ニ至レハ債權者ハ抵當權アル債權者ノ權利ヲ行フ

此期限ハ三十年ヲ超過スルコトヲ得ス之ヲ超ユルトキハ當然三十年ニ減縮ス  
此期限ハ縱令之ヲ延ブルモ前後通算シテ三十年ヲ超過スルコトヲ得ス

第百十七條 不動産質ハ債務者ノ爲メ第三者ヲ設定スルコトヲ得其不動産質ハ債  
務者ト設定者トノ間ニ於テハ動産質ノ爲メ第九十八條ニ定メタル効力ヲ生ス

第百十八條 不動産質ハ第百九十七條及ヒ第百九十八條ニ從ヒ抵當ト爲スコトヲ得  
ヘキ財産ノ上ニ非サレハ之ヲ設定スルコトヲ得ス

此他設定者ハ質ト爲ス財産ノ收益權ヲ自ラ有スルコトヲ要ス其質ハ如何ナル場合  
ニ於テモ其收益權ノ繼續期間ヲ超過スルコトヲ得ス

不動産質設定ノ爲メニ要スル能力ハ第百九條及ヒ第二百十條ニ定メタル抵當設  
定ノ能力ト同一ナリ

第百十九條 不動産質カ合意上ノモノナルトキハ其質ハ公正證書又ハ私署證書ヲ以  
テスルニ非サレハ當事者ノ間ニ之ヲ設定スルコトヲ得ス

又不動産質ハ第二百十二條ニ從ヒ遺言上ノ抵當ノ許サルル場合ニ於テハ遺言ヲ以  
テ之ヲ設定スルコトヲ得

不動産質ハ之ヲ設定スル證書又ハ遺言書ニ依リ財産編第三百四十八條ニ從ヒテ登  
記シタル後ニ非サレハ之ヲ以テ第三者ニ對抗スルコトヲ得ス

右ノ登記ハ抵當ノ順位ヲ保存スル爲メ抵當ノ登記ニ同シキ効力ヲ有ス

第百二十條 不動産質ヲ設定スル證書又ハ遺言書ニハ其不動産ノ精確ナル指示ノ  
外元利ノ債權額ヲ指示スルコトヲ要ス

右ノ指示カ不十分ナル場合ニ於テハ既ニ爲シタル登記ニ補足ノ合意ヲ附記ス然レ  
トモ此附記ハ其日附後ニ非サレハ効力ヲ生セス

第百二十一條 先ト爲シタル物權カ利益權、賃借權又ハ永借權ナルトキハ此權利ノ  
設定證書ニ依ル登記ニ其質權ヲ附記スルヲ以テ足レリトス

第百二十二條 先取債權者ハ右ノ外動産質ニ關シ第百二條ニ記載シタル如ク其債權  
ヲ擔保スル不動産ヲ現實ニ占有スルコトヲ要ス

第百二十三條 不動産質ハ動産質ニ關シ第百五條ニ記載シタル如ク働方及ヒ受方ニ  
テ不可分タリ

第二節 不動産質ノ効力

第百二十四條 質取債權者ハ質ニ取リタル不動産ヲ財産編第百十九條乃至第百二十  
二條ニ規定シタル制限ニ從ヒ且質契約ノ期間ニ限り質貸スルコトヲ得但反對ノ合  
意アルトキハ此限ニ在ラス

又質取債權者ハ自己ノ權利ノ繼續期間ニ限り動産質ニ付キ第百七條ニ記載シタル  
如ク自己ノ責任ヲ以テ其不動産ヲ轉質ト爲スコトヲ得

第二百二十五條 質取債權者ハ租稅其他毎年ノ公課ヲ負擔ス

質取債權者ハ小修繕及ヒ必要且急迫ナル大修繕ヲ爲ス責ニ任ス若シ此ニ違フトキハ損害賠償ヲ負擔ス但此大修繕ノ費用ハ債務者之ヲ償還ス

第二百二十六條 建物、宅地ノ質ニ付テハ債權者ハ自ラ之ヲ領スルト之ヲ質貸スルトヲ問ハス其質賃ヲ自己ノ債權ノ利息ニ充當シ猶ホ超過額アルトキ又ハ債權カ無利息ナルトキハ元本ニ充當ス

田畑山林ノ質ニ付テハ當事者ノ問ニ於テ果實ト利息トハ計算セスシテ相殺シタリト看做ス但反對ノ合意アルトキ又他ノ債權者ニ對シ又ハ利息ノ法律上ノ制限ニ付キ顯著ナル詐害アルトキハ此限ニ在ラス  
貸賃又ハ果實ヲ利息ニ充當スルニハ毎年ノ公課及ヒ保持、管理、栽培ノ費用ヲ控除シタル純益價額ニ付キ之ヲ爲ス

第二百二十七條 質取債權者ハ如何ナル反對ノ合意アルニ拘ハラズ常ニ己レノ爲メ負擔重キニ過クルト思慮スル收益權ヲ將來ニ向ヒテ拋棄シ無利息ニテ抵當權ノミチ存スルコトヲ得然レトモ適當ノ時期ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第二百二十八條 債權者ハ債務ノ皆濟ニ至ルマテ質ニ取リタル不動産ノ占有ヲ留置スルコトヲ得

然レトモ質取債權者ハ債務ノ滿期前又ハ滿期後ニ債務者又ハ他ノ債權者ヨリ求メタル賣却ニ故障ヲ申立ツルコトヲ得ス

又質取債權者ハ滿期後自ラ賣却ヲ申立ツルコトヲ得  
右ハ下ニ指示シタル別異ノ効力ヲ生ス

第二百二十九條 他ノ債權者ヨリ求メタル賣却ノ場合ニ於テハ質取債權者ハ其順位ニ

於テ其抵當權ヲ行ヒ且其債權者カ如何ナル先取特權又ハ抵當權アル他ノ債權者ニモ先ンセラレサルトキ及ヒ先ンセラレルモ他ノ債權者カ總テノ代價ヲ取盡サスシテ殘餘アルトキハ取得者ハ質取債權者ノ尙ホ受ク可キモノノ爲メ第二百十六條ニ從ヒ質ノ終了ス可キ時期ニ至ルマテ留置權ニ遵フ責アリ

債務者ノ爲シタル賣却ニシテ先取特權若クハ抵當權アル債權者又ハ質取債權者ノ請求ニ因リテ增價競賣ノ有リタル場合ニ於テモ亦同シ

然レトモ質取債權者自ラ賣却ヲ求メタル場合ニ於テハ其收益權及ヒ留置權ハ消滅ス但其賣却ニ付キ明白ニ此權利ヲ留保シ且順位ノ如何ヲ問ハス他ニ先取特權又ハ抵當權アル債權者アラサルトキハ此限ニ在ラス

右二箇ノ條件アルトキハ取得者債務ノ消滅ニ至ルマテ質權ニ遵フ責アリ

第二百三十條 第六條、第九條、第十條及ヒ第百十三條乃至第百十五條ハ不動産質ニモ之ヲ適用ス

#### 第四章 先取特權

##### 總則

第三百三十一條 先取特權ハ合意ナキモ法律カ或ル債權ノ原因ニ附著セシメタル優先權ナリ但動産質及ヒ不動産質ヨリ生スル先取特權ハ合意上ノモノトス  
先取特權ハ法律ノ制限定シテ定メタル原因、條件及ヒ目的ニ於ケルニ非サレハ存在セス  
先取特權カ第三所持者ニ對シテ追及權ヲ付與スル場合及ヒ其權利行使ノ條件モ亦法律ヲ以テ之ヲ定ム

第三百三十二條 先取特權ハ動産質及ヒ不動産質ニ關シ第百五條及ヒ第百二十三條ニ

記載シタル如ク働方及ヒ受方ニテ不可分タリ

第三百三十三條 先取特權ノ負擔アル物カ第三者ノ方エテ滅失シ又ハ毀損シ第三者此カ爲メ債務者ニ賠償ヲ負擔シタルトキハ先取特權アル債權者ハ他ノ債權者ニ先タ于此賠償ニ於ケル債權者ノ權利ヲ行フコトヲ得但其先取特權アル債權者ハ辨濟前ニ合式ニ拂渡差押ヲ爲スコトヲ要ス

先取特權ノ負擔アル物ヲ賣却シ又ハ賃貸シタル場合及ヒ其物ニ關シ權利ノ行使ノ爲メ債務者ニ金額又ハ有價物ヲ辨濟ス可キ總テノ場合ニ於テモ亦同シ

第三百三十四條 先取特權ノ種類ハ之ヲ左ニ掲ク

第一 債務者ノ總動産及ヒ附隨ニテ其總不動産ニ係ル一般ノ先取特權

第二 或ル動産ニ係ル特別ノ先取特權

第三 或ル不動産ニ係ル特別ノ先取特權

第三百三十五條 一般又ハ特別ノ先取特權ヲ有スル債權者ノ相互ノ順位ハ本章ノ各節ニ於テ之ヲ規定ス

不動産ニ付キ先取特權ヲ有スル債權者ハ其同一ノ不動産ニ付キ抵當權ヲ有スル債權者ニ先タツ但法律ニ於テ特別ニ規定シタル場合ハ此限ニ在ラス

同原因又ハ同順位ノ先取特權アル債權者ハ其債權額ノ割合ニ應シテ辨濟ヲ受ク

第三百三十六條 本法ニ定メタル先取特權ハ商法又ハ特別法ヲ以テ規定シ又ハ規定ス可キ先取特權ヲ妨ケス

商法又ハ特別法ノ先取特權ハ別段ノ規定ナキ場合ニ於テハ下ニ定メタル一般ノ規則ニ從フ

第一節 動産及ヒ不動産ニ係ル一般ノ先取特權

第一款 一般ノ先取特權ノ原因

第三百二十七條 動産及ヒ不動産ニ係ル先取特權アル債權ハ之ヲ左ニ掲ク但下ニ定メタル制限及ヒ條件ニ從フ

第一 訟事費用

第二 葬式費用

第三 最後疾病費用

第四 雇人給料

第五 日用品供給

第一則 訟事費用ノ先取特權

第三百二十八條 訟事費用ノ先取特權ハ或ハ債務者ノ財産ヲ保存スル爲メ或ハ其財産ヲ清算配當スル爲メ各債權者ノ共同利益ニ於テ正當ニ爲セル裁判上若クハ裁判外ノ總テノ行爲ニ付キ金錢ノ立替ヲ爲シタル債權者又ハ給料若クハ謝金ヲ受取ル可キ債權者ニ屬ス

總債權者ニ有益ナリサリシ費用ニ付テハ先取特權ハ特別ノモノニシテ其費用ノ爲メ利益ヲ得タル債權者ニ對スルニ非サレハ之ヲ以テ對抗スルコトヲ得ス

第二則 葬式費用ノ先取特權

第三百二十九條 債務者ノ身分ニ應シ且慣習ニ從ヒテ爲シタル葬式費用ハ先取特權アルモノトス

先取特權ハ債務者ノ擔當ニ係ル同居親族ノ葬式費用ニモ亦之ヲ適用ス  
此先取特權ハ葬式ニ連續シタル出費ニ及ハス縱令其出費カ慣習上ノモノタルモ亦同シ

第三則 最後疾病費用ノ先取特權

第四百十條 最後疾病費用ノ先取特權ハ債務者又ハ前條ニ指定シタル親族ノ死亡前ノ疾病ニ關スル醫師、藥商、看病人其他此ニ類スル費用ヲ包含ス但債務者ノ破産前又ハ無資力前ノ疾病及ヒ其親族ノ疾病ニ關スル費用モ亦同シ  
長病ノ場合ニ於テハ右ノ費用ノ先取特權ハ最後ノ一年ノ費用ニ之ヲ制限ス  
右ノ費用ヲ生セシメタル疾病ノ外ナル原因ノ爲メ死亡アリタルトキト雖モ先取特權ハ猶ホ存ス

第四則 雇人給料ノ先取特權

第四百十一條 雇人ノ先取特權ハ債務者又ハ其擔當ニ係ル同居親族ノ雇人ニ屬ス  
右ノ先取特權ハ最後ノ一年ノ給料ノミヲ擔保ス

第五則 日用品供給ノ先取特權

第四百十二條 日用品供給ノ先取特權ハ債務者又ハ其擔當ニ係ル同居ノ親族及ヒ雇人ノ生活ニ必要ナル日用品ノ供給者ニ屬ス  
右ノ先取特權ハ最後ノ六ヶ月間ノ供給ノミヲ包含ス

第二款 一般ノ先取特權ノ効力及ヒ順位

第四百十三條 一般ノ先取特權ハ先取特權アル各債權者カ動産ニ付キ配當ヲ受ケ尙ホ不足アルニ非サレハ不動産ニ付キ之ヲ行フコトヲ得ス  
然レトモ動産代價ノ配當ニ先タチ不動産代價ノ配當アルトキハ債權者ハ假ニ條件附ニテ之ニ加入スルコトヲ得但日後動産代價ノ配當加入ニ於テ辨濟ヲ得サル部分ニ非サレハ之ヲ受クルコトヲ得ス  
動産代價ノ配當ニ有益ナル時期ニ加入スルコトヲ怠リタル債權者ハ動産ニ付キ受

ク可カリシモノノ限度ニ於テ不動産ニ付キ其優先權ヲ失フ

第四百十四條 一般ノ先取特權ノ互ニ競合スル場合ニ於テハ第四百三十八條乃至第四百四十二條ニ列記シタル相互ノ順序ニ從ヒテ配當加入ヲ定ム

右ノ數條ニ掲ケタル同原因ノ債權ハ同順位ニテ配當ニ加入ス  
若シ一般ノ先取特權カ動産ニ係ル特別ノ先取特權ト競合スルトキハ其順位ハ下ノ

第二節ニ於テ之ヲ規定ス

不動産ニ係ル特別ノ先取特權ハ一般ノ先取特權ニ先タチ又特別ノ抵當ハ後ノ設定

ニ係ルト雖モ詐害ナキニ於テハ一般ノ先取特權ニ先タツ

然レトモ一般ノ先取特權ハ其發生前ノ取得ニ係ル一般ノ抵當ニモ先タツ

一般ノ抵當ノ負擔アル總不動産ヲ同時ニ賣却シタル場合ニ於テハ一般ノ先取特權

ハ各不動産ノ賣却代價ノ割合ニ應シテ其總不動産ニ付キ配當ニ加入ス

若シ順次ニ右ノ不動産ヲ賣却スルトキハ一般ノ先取特權ハ初ノ賣却ニ付キ全部之

ヲ充當シ尙ホ附隨ニテ次ノ賣却ニ付キ之ヲ充當ス且此先取特權ヲ負擔セシ不動産

ニ付キ一般ノ抵當ヲ有スル債權者ハ他ノ不動産ノ賣却代價ニ付キ求償權ヲ有ス

第四百十五條 一般ノ先取特權ハ不動産カ債務者ニ屬スル間ハ他ノ債權者ニ對抗ス

ル爲メ其不動産ニ付テノ登記ヲ要セス

第二節 動産ニ係ル特別ノ先取特權

第一款 動産ニ係ル特別ノ先取特權ノ原因及ヒ目的

第四百十六條 上ノ第二章ニ規定シタル先取特權ヲ有スル動産質取債權者ノ外下ニ

指定シタル動産物ニ付キ先取特權ヲ有スル債權者ハ之ヲ左ニ掲ク

第一 不動産ノ質貸人

第二 種子及ヒ肥料ノ供給者  
 第三 農業ノ稼人及ヒ工業ノ職工  
 第四 動産物ノ保存者  
 第五 動産物ノ賣主  
 第六 旅店主人  
 第七 舟車運送營業人  
 第八 保證金ヲ供スル義務アル公吏ノ職務上ノ所爲ニ對スル債權者  
 第九 右保證金ノ貸主  
 第一則 不動産賃貸人ノ先取特權  
 第一百四十七條 居宅、倉庫其他ノ建物ノ賃貸人ハ賃借人ノ使用又ハ商工業ノ爲メ此建物内ニ備ヘタル動産物ニ付キ先取特權ヲ有ス  
 右ノ動産物カ賃借人ニ屬セスト雖モ先取特權ハ猶ホ存ス但賃貸人カ賃貸場所ニ此動産物ノ持込ヲ知リタル當時其物ノ賃借人ニ屬セサル事實ヲ知ラス且其事實ヲ豫見スルニ足ル可キ理由アラサリシトキニ限ル  
 賃貸人ノ先取特權ハ現金ニ付キ又賃借人及ヒ其家族ノ一身ノ使用ニ供シタル金玉寶石ニ付キ又無記名ナルモ證券ニ付キ之ヲ行フコトヲ得ス  
 第一百四十八條 賃貸人ハ家賃ノ當期分及ヒ後ノ一期分ノ辨濟ヲ擔保スルニ足ル可キ動産ヲ賃貸シタル場所ニ備フルコトヲ賃借人ニ要求スルコトヲ得賃借人之ヲ爲サス且此家賃ノ前拂又ハ之ニ相當スル其他ノ擔保ヲ供セサルトキハ賃貸人ハ賃貸借ヲ解除スルコトヲ得尙ホ損害アルトキハ其賠償ヲ求ムルコトヲ得  
 賃貸場所ニ備ヘタル動産ヲ賃貸人ノ許諾ナクシテ取去リタルモ別ニ詐害ナキニ於

テハ賃貸人ハ其擔保カ不足ト爲リタルトキ且賃借人ニ屬スル權利ノ限度内ニ非サレハ此動産ヲ其場所ニ復セシムルコトヲ得ス  
 然レトモ賃貸人ノ權利ヲ詐害シテ爲シタル行爲ニ付テハ賃貸人ハ財産編第三百四十一條以下ニ記載シタル條件及ヒ區別ニ從ヒ第三者ニ對シテ其行爲ヲ廢罷セシムルコトヲ得  
 右ハ總テ第三百三十三條ニ依リテ賃貸人ノ有スル權利ヲ妨ケス  
 第一百四十九條 賃貸借ト永貸借トヲ問ハス田畑山林ノ賃貸人ハ賃借人カ居宅竝ニ土地利用ノ建物内ニ備ヘタル動産ニ付キ及ヒ土地ノ利用ニ供シタル動物、農具其他ノ器具ニ付キ上ト同一ノ限度ニ於テ先取特權ヲ有ス  
 右ノ賃貸人ハ賃貸シタル土地ノ收穫物其他ノ產出物カ猶ホ土地ニ附著スルト土地ニ保存シ有ルトヲ問ハス其收穫物及ヒ產出物ニ付キ先取特權ヲ有ス  
 分果賃貸人ハ賃貸シタル土地ノ收穫物其他ノ產出物ノ中ニテ自己ノ權利ヲ有スル部分カ猶ホ分果小作人ノ方ニ存スル間ハ直接ニ其收穫物其他ノ產出物ノ上ニ先取特權ヲ行フ  
 第一百五十條 賃借權ノ讓渡又ハ轉貸ノ場合ニ於テ賃貸人ハ賃貸場所ニ備ヘ有ル動産カ讓受人又ハ轉借人ニ屬スルコトヲ知ルト雖モ其先取特權ハ此等ノ物ニ及ブ  
 此場合ニ於テ先取特權ハ第三百三十三條ニ從ヒ讓渡又ハ轉貸ノ代價トシテ主タル賃借人ノ受取ル可キ金額ニ及ブ但前拂ヲ以テ賃貸人ニ對抗スルコトヲ得ス  
 第一百五十一條 賃借人ノ財産ノ總清算ノ場合ニ於テハ賃貸人ハ土地、建物ノ借賃其他ノ負擔ニ付キ前期、當期及ヒ次期ノ分ニ非サレハ前數條ニ定メタル先取特權ヲ有セス

此他先取特權ハ質貸借ヨリ生スル他ノ合意上ノ義務、前期及ヒ當期ニ於テノ質借人ノ過失又ハ懈怠ノ爲メ質貸人ノ受ク可キ賠償及ヒ質貸人カ請求スルコトヲ得ヘキ解除ニ添ヒタル損害賠償ヲ擔保ス

第一百五十二條 右清算ノ場合ニ於テ他ノ債權者ハ自己ノ利益ノ爲メ質貸借ノ解除ヲ防止シ及ヒ初ヨリ轉貸又ハ讓渡ノ禁止アルニ拘ハラス其質借權ヲ轉貸シ又ハ讓渡スコトヲ得但質貸借殘期ノ爲メ質貸人ニ土地、建物ノ借賃其他ノ納額ヲ擔保スルコトヲ要ス

第二則 種子及ヒ肥料ノ供給者ノ先取特權

第一百五十三條 所有者、用益者、質借人又ハ占有者ニ種子及ヒ肥料ヲ供給シタル者ハ之ヲ用キタル年ノ果實ニ付キ先取特權ヲ有ス  
蠶種及ヒ蠶ノ飼養ニ供スル桑葉ヲ供給シタル者ニ付テモ亦同シ

第三則 農業稼人及ヒ工業職工ノ先取特權

第一百五十四條 雇人ノ外其年ノ耕耘收穫ノ爲メ勞動シタル稼人ハ一个年間ノ給料ノ爲メ其收穫物ニ付キ先取特權ヲ有ス  
又工業ノ職工ハ工業ヨリ生スル產出物又ハ製造品ニ付キ先取特權ヲ有ス但其年ノ給料中最後ノ三ヶ月間ノ爲メノミニ限ル

第四則 動產物保存者ノ先取特權

第一百五十五條 動產物ノ修繕又ハ保存ノ費用ニ付テノ債權者ハ第九十二條ニ從ヒ己レニ屬スル留置權ヲ行ハサルトキト雖モ其修繕又ハ保存シタル物ニ付キ先取特權ヲ有ス  
右ノ先取特權ハ金額、有價物其他動產物ニ關スル物權又ハ人權ヲ債務者ノ爲メニ

追認シ保存シ又ハ實行セシメタル裁判上又ハ裁判外ノ行爲ノ費用ニ之ヲ適用ス

第五則 動產物賣主ノ先取特權

第一百五十六條 動產物ノ賣主ハ代價辨濟ノ爲メ期限ヲ許與シタルト否トヲ問ハス其代價及ヒ利息ノ爲メ賣却物ニ付キ先取特權ヲ有ス  
若シ補足額ヲ以テスル交換アリテ其補足額カ讓渡シタル物ノ價額ノ半ヲ超ユルト

キハ先取特權ハ其補足額ノ爲メ交換ニ付キ存在ス

第一百五十七條 先取特權ハ賣却物カ用方ニ因リ又ハ不動産ニ合體スルニ因リテ不動産ト爲リタルトキト雖モ猶ホ買主ノ占有ニ在リ且變形セサル間ハ存續ス但合體ノ

場合ニ於テハ不動産ヲ毀損セスシテ其物ヲ分離スルヲ得ルコトヲ要ス

第一百五十八條 賣主ノ先取特權ハ財産取得編第四十七條及ヒ第八十二條ニ規定シタル留置及ヒ解除ノ權利ヲ妨ケス

第六則 旅店主人ノ先取特權

第一百五十九條 旅店ノ主人ハ旅客其從者及ヒ牛馬ノ宿泊料、食料ノ爲メ其旅客ノ攜帶シテ尙ホ旅店ニ存スル手荷物ニ付キ先取特權ヲ有ス

第七則 舟車運送營業人ノ先取特權

第一百六十條 舟車運送營業人ハ旅客又ハ荷物ノ運送賃ノ爲メ及ヒ關稅其他正當ナル附從ノ費用ノ爲メ自己ノ手ニ存スル運送物ニ付キ先取特權ヲ有ス

運送營業人カ運送物ノ引渡ヨリ四十八時以内ニ債務者又ハ其名ヲ以テ其物ヲ受取リタル者ニ對シ其物ヲ返還スルカ又ハ運送賃其他ノ費用ヲ辨濟スルカノ催告ヲ爲シ且其効果ヲ生セシムル爲メ成ル可ク短キ時間ニ裁判上ノ請求ヲ爲シタルトキハ其先取特權ハ物ノ引渡後ト雖モ存續ス

如何ナル場合ニ於テモ第三取得者ニ對シテ物ヲ回復スルコトヲ得ス但第四百四十八條ニ規定シタル如ク詐害アル場合ハ此限ニ在ラス且第三百三十三條ノ適用ヲ妨ケス

第八則 職務上ノ所爲ニ對スル債權者ノ先取特權

第六十一條 保證ヲ供スル義務アル公吏ノ職務上ノ過失又ハ職權ノ濫用ヨリ生スル債權ハ其保證金ニ付キ先取特權アリ

第九則 保證金貸主ノ先取特權

第六十二條 前條ノ保證金ヲ貸付タル第三者ハ職務上ノ所爲ヨリ害ヲ受ケタル者ニ辨濟アリシ後第二位ニテ此保證金ニ付キ先取特權ヲ有ス但第三者カ貸付ノ當時又ハ他ノ債權者ヨリ何等ノ故障ヲモ述ヘサル前規則ニ從ヒテ其權利ヲ證シタルトキニ限ル

第二款 動産ニ係ル特別ノ先取特權ノ順位

第六十三條 動産ニ係ル特別ノ先取特權ト一般ノ先取特權ト競合スルトキハ優先ノ順序ヲ左ノ如ク規定ス

第一 訟事費用ハ其費用ノ有益タリシ總債權者ノ債權ニ先タツ但有益ノ限度又ハ割合ニ從フ

第二 此他四箇ノ一般ノ先取特權ハ第三百二十七條ニ定メタル順序ヲ以テ總テノ特別ノ先取特權ニ先タツ但特別ノ先取特權ニ屬セサル動産ノ不足ナル場合ニ限ル

第六十四條 一箇ノ動産ニ付キ特別ノ先取特權ヲ有スル諸種ノ債權競合スルトキハ其相互ノ優先權ハ下ノ順序及ヒ區別ニ從ヒテ之ヲ定ム  
第一ノ順位ハ先取特權ノ目的物ヲ保存シタル者ニ屬ス

若シ數人ノ債權者漸次ニ保存ヲ爲シタルトキハ優先權ハ其間ニテ最後ノ保存者ニ屬ス

第二ノ順位ハ合意上ノ動産質ニ因リ或ハ不動産ノ質貸人、旅店主人又ハ運送營業人ノ如ク默示ノ動産質ニ因リテ物ヲ質ニ取リタル債權者ニ屬ス

第三ノ順位ハ物ノ賣主ニ屬ス  
然レトモ質取債權者ハ動産質設定ノ時其物ノ保存費用ノ未タ支拂アラサルコトヲ知ラサリシトキハ第一ノ順位ヲ得  
之ニ反シテ質取債權者カ賣却代價ノ未タ支拂アラサルコトヲ知リタルトキハ賣主ニ先タツ

收穫物ニ關シテハ第一ノ順位ハ農業ノ稼人ニ第二ノ順位ハ種子及ヒ肥料ノ供給者ニ第三ノ順位ハ土地ノ質貸人ニ屬ス

工業ノ職工ハ工業ヨリ生スル產出物又ハ製造品ニ付キ質貸人ニ先タツ

公吏ノ保證金ニ關シテハ職務上ノ所爲ニ對スル各債權者ハ相共ニ債權ノ割合ニ應シ其債權ノ日附ニ關セス他ノ債權者ニ先タチ又保證金ヲ貸付タル債權者ニモ先タツ其保證金ヲ貸付タル債權者ハ保證金ノ殘額ニ付キ第二位ニテ先取特權ヲ有ス

第三節 不動産ニ係ル特別ノ先取特權

第一款 不動産ニ係ル特別ノ先取特權ノ原因及ヒ目的

第六十五條 左ノ債權者ハ下ニ定メタル債權ノ爲メ其條件ニ從ヒ不動産ニ付キ先取特權ヲ有ス

第一 賣買、交換其他有償ノ行爲ニ因リ又無償ナルモ負擔ヲ帶フル行爲ニ因リテ不動産ヲ讓渡シタル者ハ其讓渡シタル不動産ニ付キ先取特權ヲ有ス

第二 共同分割者ハ分割中ニ包含シタル不動産ニ付キ先取特權ヲ有ス  
第三 工匠、技師及ヒ工事請負人ハ工事ニ因リテ不動産ニ生シタル増價ニ付キ先取特權ヲ有ス

第四 先取特權ヲ生セシムル行為ノ當時讓渡人、共同分割者、工事請負人ニ支拂ヒタル金錢ノ貸主ハ右同一ノ不動産ニ付キ先取特權ヲ有ス

第一則 讓渡人ノ先取特權

第六十六條 讓渡人ノ先取特權ハ左ノ各人ニ屬ス

第一 賣買ノ代價及ヒ利息其他ノ負擔ニ付テハ賣主

第二 交換ノ補足額、負擔及ヒ交換物ノ追奪擔保ニ付テハ交換者

第三 贈與ノ負擔ニ付テハ贈與者又ハ其承繼人

其他ノ不動産讓渡人ハ一般ニ其對價及ヒ負擔ニ付キ先取特權ヲ有ス

第六十七條 賣買代價、交換補足額ノ外賣買、交換、贈與ノ負擔及ヒ交換其他有償ノ

合意ニ於ケル追奪擔保ノ未定ノ賠償ハ讓渡ノ證書又ハ日後ノ證書ヲ以テ金錢ニテ

之ヲ定ムルコトヲ要ス

其他右ノ證書ハ次款ニ記載スル如ク之ヲ公示スルコトヲ要ス

第六十八條 交換其他不動産ノ讓渡ノ對價トシテ受取リタル不動産ノ追奪擔保ノ

爲メノ先取特權ハ其追奪力讓渡ノ時ヨリ十箇年内ニ生シ且廢罷ス可カラサル判決

ヨリ一個年内ニ擔保ノ請求ヲ存シ之ヲ公示シタルトキニ非サレハ存在セス

對價トシテ受取リタル動産ニ關シテハ擔保ノ爲メノ先取特權ハ追奪力一個年内ニ

生シ且廢罷ス可カラサル判決ヨリ一個月内ニ請求ヲ爲シ之ヲ公示シタルトキニ非

サレハ存在セス

第六十九條 不動産ノ讓渡人ノ先取特權ハ債務者ノ所爲ニ因リ又ハ其權利ニ基キ

且其費用ヲ以テ不動産ニ加ヘタル増加及ヒ改良ニ及ハス

第二則 共同分割者ノ先取特權

第七十條 社員其他ノ共有者ハ或ハ抽籤ノ方法或ハ合意上ノ指定或ハ不分割物競

賣ニ因レル分割ヨリ生スル左ノ債權ノ爲メ其分割ニ於テ各自ノ得タル不動産ニ付

キ互ニ先取特權ヲ有ス

第一 補足額ノ爲メ即チ配當過分ノ返還ノ爲メニハ之ヲ負擔セル分割者ニ歸シ

タル不動産ニ付キ先取特權アリ

第二 不分割物競賣ノ代價ノ爲メニハ其競賣シタル不動産ニ付キ先取特權アリ

第三 分割者ノ一人カ其配當部分ノ動産又ハ不動産ニ於テ受ケタル追奪ノ擔保

ノ爲メニハ他ノ分割者ニ歸シタル總不動産ニ付キ先取特權アリ但各分割

者ノ債務ノ部分ニ限ル

第七十一條 右ノ擔保ハ左ノ諸件ニ之ヲ適用ス

第一 社員ニシテ他ノ社員ニ對シ補足額又ハ不分割物競賣ノ代價ヲ負擔シタル者

ノ無資力

第二 分割者ノ一人ノ配當部分ニ債權ヲ充テタルトキ其債務者ノ無資力但其債

務者ハ分割者タルト外人タルトヲ問ハス分割ノ當時無資力タリシコトヲ

要ス

第七十二條 第六十八條ハ分割者間ノ追奪擔保ノ先取特權ニ之ヲ適用ス

分割者タルト否トヲ問ハス債務者ノ無資力ニ關シテハ其擔保ハ元本ニ於ケル債務

ノ満期ヨリ一個年内ニ請求ヲ爲シ之ヲ公示シタルトキニ非サレハ當事者ノ間ニテ



モ第三者ニ對シテモ之ヲ負擔セシムルコトヲ得ス  
債務カ無期又ハ終身ノ年金權タルトキ債務者ノ無資力カ分割ノ日ヨリ十個年後ニ  
生スルニ於テハ其擔保ノ負擔ハ止ム

債務カ利息ヲ生スル元本ニシテ其滿期カ十個年以上ニ及フトキモ亦同シ  
第二百七十三條 第六十九條ノ規定ハ分割者ノ先取特權ニモ亦之ヲ適用ス

第三則 工匠、技師及ヒ工事請負人ノ先取特權

第二百七十四條 工匠、技師及ヒ工事請負人ハ建物、土手若クハ掘割ノ築造若クハ修繕  
又ハ地上ニ爲シタル排泄、灌溉、開墾、置土其他之ニ類似スル工事ヨリ生スル債權  
ノ爲メ先取特權ヲ有ス

右ノ先取特權ハ鑛坑及ヒ石坑ノ開掘、利用、閉鎖又ハ廢止ニ關スル地下又ハ外部ノ  
工事ノ爲メ工匠、技師及ヒ工事請負人ニ屬ス

第二百七十五條 右ノ工事ヨリ生スル先取特權ハ其工事ニ因リ土地又ハ建物ニ加ヘタ  
ル増價ニシテ先取特權行使ノ當時猶ホ存スルモノノミニ付キ存在ス

右ノ増價ハ裁判所ノ選任シタル鑑定人ノ作レル三箇ノ調書ヲ以テ之ヲ證スルコト  
ヲ要ス

此第一調書ハ工事ヲ始ムル前ニ之ヲ作りテ場所ノ現狀ヲ明定シ且目論見タル工事  
ノ概畧ヲ指示スルコトヲ要ス

此第二調書ハ工事ノ受取ニ付キ爭アルモ工事ノ竣成ヨリ又ハ原因ノ如何ヲ問ハス  
其工事ノ絶止ヨリ三個月内ニ之ヲ作り且其工事ヨリ現ニ生スル増價ヲ證スルコト  
ヲ要ス

此第三調書ハ配當加入ノ請求ノ當時之ヲ作り且右増價ノ存スルモノヲ證スルコト

ヲ要ス

第四則 金錢貸主ノ先取特權

第二百七十六條 前數條ニ掲ケタル先取特權ハ讓渡若クハ分割ノ當時又ハ工匠、技師  
若クハ工事請負人トノ約則ノ當時ニ於テ賣買若クハ不分割物競賣ノ代價、交換若ク  
ハ分割ノ補足額又ハ工事ノ代金ノ辨濟ノ爲メ金錢ヲ貸付タル者ニ法律ニ依リテ直  
接ニ屬ス但其金錢ノ貸付及ヒ使用ヲ此等ノ行爲ノ證書中ニ記載シタルトキニ限ル  
若シ讓渡人、分割者又ハ工事ノ爲メノ債權者ノ利益ニ於テ先取特權ノ生セシ後ニ  
金錢ヲ貸付タルトキハ貸主ハ財産編第四百八十七條及ヒ第四百八十一條ニ定メタ  
ル條件及ヒ方式ニ從ヒ債權者又ハ債務者ヨリ合意上ノ代位ヲ得タルトキニ非サレ  
ハ先取特權ヲ取得セス

孰レノ場合ニ於テモ金錢ノ貸主カ債務ノ一分ノミヲ拂ヒタルトキハ貸主ハ其拂ヒ  
タルモノノ割合ニ應シ財産編第四百八十六條ニ從ヒ原債務者ト共ニ先取特權ヲ行  
フ

第二款 債權者間ニ於ケル不動産ノ特別先取特權ノ効力及ヒ順位

第二百七十七條 前數條ニ掲ケタル先取特權ハ下ニ定メタル方法、條件及ヒ期間ヲ以テ  
公示シ且保存シタルトキニ非サレハ之ヲ以テ他ノ債權者ニ對抗スルコトヲ得ス

第二百七十八條 賣買代價ノ爲メノ賣主ノ先取特權及ヒ補足額ノ爲メノ交換者ノ先取  
特權ハ代價又ハ補足額ノ全部又ハ一分ヲ未タ辨濟セサル旨ヲ記シタル所有權移轉  
證書ニ依ル登記ヲ以テ之ヲ保存ス

又交換ニ於ケル追奪擔保ノ爲メ及ヒ賣買、交換其他所有權移轉契約ノ附從負擔ノ  
爲メノ先取特權ハ證書ニ依ル登記ヲ以テ之ヲ保存ス但擔保及ヒ負擔ノ評價ヲ證書  
中ニ記載シタルトキニ限ル

第七十九條 分割者ノ先取特權ハ分割證書ニ依ル登記ヲ以テ之ヲ保存ス但其證書ニ不分割物競買代價又ハ補足額即チ配當過分ノ返還及ヒ追奪擔保ノ評價其他各配當部分ノ負擔ノ評價ヲ記載シタルトキニ限ル

第八十條 右讓渡又ハ分割ノ證書ニ依ル登記ナキ間ハ取得者又ハ分割者ノ權利ニ基キ物上擔保ヲ得タル債權者ハ其擔保ヲ登記シタルトキト雖モ其登記ヲ以テ先取特權アル讓渡人又ハ分割者ニ對抗スルコトヲ得ス但工事ヨリ生スル先取特權アル債權ハ此限ニ在ラス

然レトモ利害關係人ハ原契約者ノ承諾ヲ得スト雖モ常ニ右讓渡又ハ分割ノ登記ヲ爲サシムルコトヲ得

第八十一條 讓渡又ハ分割ノ證書ニ其對價物ノ全部若クハ一分ノ未タ辨濟アラサルコト又ハ負擔ノ付シ有ルコトヲ記載セサルトキハ日後ノ證書ヲ以テ此脫漏ヲ補フコトヲ得且其補脫ハ債權者ノ注意ヲ以テ讓渡又ハ分割ト共ニ之ヲ公示スルコトヲ得

右ノ補脫ヲ讓渡又ハ分割ノ登記ト共ニ公示セサルトキハ債權者ハ何時ニテモ其補脫ヲ公示スルコトヲ得但此場合ニ於テハ先取特權ハ單純ナル法律上ノ抵當ニ變性ス

右ノ抵當ハ二箇ノ公示ノ間ニ於テ債務者ノ權利ニ基キ物上擔保ヲ取得シ且合式ニ之ヲ公示シタル債權者ニ之ヲ以テ對抗スルコトヲ得ス

讓渡若クハ分割ノ證書ニ記シタル負擔又ハ擔保ノ評價ヲ後日ノ證書ニ記載シタルトキモ亦同シ但其證書ニ依ル抵當ノ登記ハ其登記ヲ爲シタル日附ニ從ヒテ債權者ノ順位ヲ定ム

第八十二條 讓渡人又ハ分割者ハ其先取特權カ法律上ノ抵當ニ變性シタルトキハ

此抵當ノ登記前ニ債務者ノ權利ニ基キ物上擔保ヲ取得シ且合式ニ保存シタル債權者ヲ害シテ義務不履行ノ爲メノ解除訴權ヲ行フコトヲ得ス

第八十三條 工匠、技師又ハ工事請負人ノ先取特權ハ第七十五條ニ定メタル第

一第二ノ調書ニ依リ登記スルヲ以テ之ヲ保存ス

此第一調書ニ依ル登記ハ工事ヲ始ムル前ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

第二調書ニ依ル登記ハ其調製ヨリ一个月内ニ於テ之ヲ爲スコトヲ要ス

第二調書ニ依ル登記ノ効力ハ第一調書ノ日附ニ遡及シ且工事ノ前又ハ後ニ債務者

ト契約シタル各人ニ對シ其増價ニ付テノ優先權ヲ先取特權アル債權者ニ保有セシム

利害關係人中ノ一人ノ爲シタル右調書ニ依リテ爲シタル登記ハ委任ナキトキト雖モ他ノ關係人ヲ利シ且總關係人ニ其債權ノ割合ニ應シテ辨濟ヲ受クル爲メノ同一ノ順位ヲ保有セシム但總テノ者カ有益ノ時期ニ於テ必要ナル説明ヲ爲スコトヲ要ス

第八十四條 前條ニ指定シタル期間ニ二箇ノ調書ニ依ル登記ノ一ヲ爲サザリシト

キハ先取特權ハ法律上ノ抵當ニ變性シ其順位ハ左ノ日附ヲ以テ之ヲ定ム

第一 工事ノ竣成又ハ絶止ノ時ヨリ三个月内ニ第二調書ヲ調製シ且次月内ニ之

ヲ登記シタルトキハ第一調書ノ遅延登記ノ日附

第二 右ノ三个月内ニ第二調書ヲ調製セス又ハ三个月内ニ之ヲ調製シタルモ次

月内ニ之ヲ登記セサルトキハ其第二調書ニ依ル登記ノ日附

第八十五條 取得、分割又ハ工事ノ爲メ初ニ金錢ヲ貸付タル者ノ第七十六條第

一項ニ從ヒテ有スル先取特權ハ讓渡人、分割者又ハ工事請負人ニ於ケルト同一ノ方法ヲ以テ之ヲ保存ス

右貸主カ日後代位ニ因リテ讓渡人、分割者又ハ工事請負人ニ承繼シタルトキ未タ先取特權ノ公示アラサルニ於テハ其貸主ハ主タル證書及ヒ代位證書ニ依ル登記ニ因リテ其公示ヲ爲シシム

若シ代位前ニ公示アリタルトキハ貸主ハ登記ニ代位ノ附記ヲ請求ス可シ又先取特權アル債權ヲ讓受ケタル者ハ讓渡ノ附記ヲ請求ス可シ

此末ノ二箇ノ場合ニ於テ附記ヲ爲サシムルコトヲ遲延シタル代位者又ハ讓受人ハ其以前善意ニテ債務者又ハ其承繼人ト原債權者トノ間ニ爲シタル辨濟其他ノ免責ノ行爲ヲ駁撃スルコトヲ得ス

第百八十六條 上ニ記載シタル如クニ保存シタル先取特權又ハ抵當アル債權ニシテ利息又ハ年金ノ附キタルモノハ利息又ハ年金ノ滿期ト爲リタル最終ノ二個年分ニ非サレハ元本ト同一ノ順位ニテ配當ニ加入スルコトヲ得ス但滿期ノ利息又ハ年金ノ中ニテ二個年以外ノモノノ爲メ漸次ニ特別ノ抵當登記ヲ爲ス可キ債權者ノ權利ヲ妨ケス

第百八十七條 不動産ニ付キ先取特權アル債權者間ノ相互ノ優先權ハ左ノ順序ニ從フ

第一 工匠、技師及ヒ工事請負人但其債權カ他ノ債權ヨリ後ニ生シタルトキモ亦優先權ヲ有ス

此工事ヨリ生スル増價額カ右ノ各人ニ全ク辨濟スルニ足ラサル場合ニ於テハ債權ノ割合ニ應シ同一ノ順位ニテ其配當加入ヲ定ム

第二 讓渡人又ハ分割者

逐次ノ讓渡又ハ分割ノ場合ニ於テハ優先權ハ債權者間最モ舊キ者ニ屬ス金錢ノ貸主ハ或ハ初ヨリ或ハ合意上ノ代位ニ因リ貸付タル其金錢ニテ全部又ハ一分ノ辨濟ヲ受ケタル債權者ト同一ノ順位ヲ有ス

第百八十八條 先取特權ノ登記及ヒ其更新、抹消、減少ニ關スル規則ハ先取特權及ヒ抵當權ニ共通ニシテ之ヲ次章ニ規定ス

第三款 第三所持者ニ對スル不動産先取特權ノ効力

第百八十九條 合式ニ公示シタル先取特權ハ其負擔アル不動産ニ付キ第三所持者ニマテ追及ス

第三所持者カ下ニ定ムル方法ノ一ニ依リテ先取特權アル債權者ニ辨濟セサルトキハ其債權者ハ第三所持者ニ對シ其不動産ヲ差押ヘ之ヲ競賣ニ付スルコトヲ得

第百九十條 一般ノ先取特權ハ第三所持者ノ取得ノ登記前ニ之ヲ登記シタルトキニ非サレハ其第三所持者ニ移轉シタル不動産ニ付キ追及權ヲ與ヘス

第百九十一條 轉得者ノ取得ノ登記前ニ登記セサル讓渡又ハ分割ニ因リテ先取特權ヲ有スル債權者ハ其先取特權ノ生シタル權原ヲ登記スルコトニ付キ轉得者ヨリ催告ヲ受ケタルモ一个月内ニ其登記ヲ爲ササリシトキニ非レハ追及權ヲ失ハス但此一个月ニハ距離ニ應シテ法律上ノ期間ヲ加フ

然レトモ轉得者ハ其讓渡人カ十年以上不動産ニ付キ法定ノ占有ヲ爲シタルトキハ右ノ催告ヲ爲ス責ナク且舊所有者ノ總テノ先取特權ヲ免カル

第百九十二條 工事ニ因リ先取特權ヲ有スル債權者ハ工事ノ竣成又ハ其絶止ノ前ニ讓渡ノ登記アリタルモ第一調書ニ依ル登記ニ因リテ追及權ヲ行フコトヲ得

工事ノ竣成シ又ハ絶止シタルトキ第二調書ノ調製及ヒ之ニ依ル登記ノ二箇ノ期間  
カ未タ経過セサルニ於テハ右ノ債權者ハ此期間ノ滿了後又ハ第二調書ヲ調製シ且  
之ニ依リテ登記ス可キ催告ヲ受ケタルモ一个月内ニ之ニ應セサリシ後ニ非サレハ  
先取特權ヲ失ハス

第九十三條 先取特權アル債權者ハ追及權ヲ保存シ及ヒ之ヲ行フ爲メニ必要ナル  
公示ヲ爲ササルモ第三所持者ノ負擔シタル讓受代價ニ付キ辨濟ヲ受クル權ヲ失ハ  
ス但代價ノ辨濟前又ハ順序配當手續ノ閉鎖前ニ自ラ債權者タルコトヲ知ラシメ且  
其債權ヲ證シタルトキニ限ル

第九十四條 先取特權ニ關スル追及權、其條件、効力並ニ第三所持者カ所有權徵收  
ヲ避クル方法及ヒ先取特權消滅ノ原因ハ次章ノ第三節第五節乃至第七節ノ規定ニ  
從フ但先取特權ノ固有ノ規則ニ反スルモノハ此限ニ在ラス

第五章 抵當

第一節 抵當ノ性質及ヒ目的

第九十五條 抵當ハ法律又ハ人意ニ因リテ或ル義務ヲ他ノ義務ニ先タチテ辨償ス  
ル爲メニ充テタル不動産ノ上ノ物權ナリ

第九十六條 抵當ハ動産質及ヒ不動産質ニ付キ記載シタル如ク働方及ヒ受方ニテ  
不可分タリ但反對ノ合意アルトキハ此限ニ在ラス

第九十七條 抵當ハ不動産ノ完全所有權ノ上ノミナラス用益權、質借權、永借權及  
ヒ地上權ノ上ニモ此等ノ權利ヲ支分シタル所有權ノ上ニモ之ヲ設定スルコトヲ得  
然レトモ完全ノ所有權ヲ有スル者ハ虛有權又ハ用益權ノミヲ分離シテ之ヲ抵當ト  
爲スコトヲ得ス

之ニ反シテ所有者ハ其不動産ノ限界ニ因リテ定マリタル部分又ハ其不分ノ幾部分  
ヲ抵當ト爲スコトヲ得

地役ハ要役地ヨリ分離シテ之ヲ抵當ト爲スコトヲ得ス又用方ニ因ル不動産ハ其附  
著スル不動産ヨリ分離シテ之ヲ抵當ト爲スコトヲ得ス

第九十八條 左ニ掲グルモノハ之ヲ抵當ト爲スコトヲ得ス

第一 使用權、住居權其他讓渡スコトヲ得ス又ハ差押フルコトヲ得サル財産

第二 財産編第十條第二號及ヒ第三號ニ掲ケタル如キ不動産債權

第三 同條第四號ニ掲ケタル如キ不動産ト爲シタル債權但之ヲ不動産ト爲スコ  
トヲ許可スル法律カ其抵當ヲ許ササトキニ限ル

船舶ノ抵當ニ付テハ商法ノ規定ニ從フ

第九十九條 此章ノ規定ハ商法其他特別法ニ於テ異例ヲ設ケサル限りハ此等ノ法  
律ヲ以テ設定シタル抵當ニ之ヲ適用ス

第二百條 抵當ハ意外及ヒ無償ノ原因ニ由リ或ハ債務者ノ所爲及ヒ費用ニ因リテ  
不動産ニ生スルコト有ル可キ増加又ハ改良ニ當然及フモノトス但他ノ債權者ニ對  
シテ詐害ナキコトヲ要シ且前章ニ規定シタル如ク工匠、技師及ヒ工事請負人ノ先  
取特權ヲ妨ケス

抵當ハ債務者カ縱令無償ニテ取得シタルモノナルモ其隣接地ニ及ハサルモノトス  
但新圍障ノ設立又ハ舊圍障ノ棄廢ニ因リテ隣接地ヲ抵當不動産ニ合體シタルトキ  
モ亦同シ

第二百一條 意外若クハ不可抗ノ原因又ハ第三者ノ所爲ニ出テタル抵當財産ノ滅  
失、減少又ハ毀損ハ債權者ノ損失タリ但先取特權ニ關シ第三百二十三條ニ記載シタ

ル如ク債權者ノ賠償ヲ受ク可キ場合ニ於テハ其權利ヲ妨ケス  
若シ抵當財産カ債務者ノ所爲ニ因リ又ハ保持ヲ爲ササルニ因リテ減少又ハ毀損ヲ  
受ケ此カ爲メ債權者ノ擔保力不十分ト爲リタルトキハ債務者ハ抵當ノ補充ヲ與フ  
ル責ニ任ス

此補充ヲ與フルコト能ハサル場合ニ於テハ債務者ハ擔保ノ不十分ト爲リタル限度  
ニ應シ滿期前ト雖モ債務ヲ辨濟スル責ニ任ス

第二百二條 抵當財産ノ差押ナキ間ハ債務者ハ財産編第一百九條及ヒ第二百十條ニ  
定メタル期間其不動産ヲ質貸スルコトヲ得又其果實及ヒ產出物ヲ讓渡シ及ヒ管理  
ノ總テノ行爲ヲ爲スコトヲ得

第二節 抵當ノ種類

第二百三條 抵當ハ法律上、合意上又ハ遺言上ノモノタリ

第一款 法律上ノ抵當

第二百四條 左ノ抵當ハ總テノ要約ニ關セス當然成立ス

第一 婦カ其夫ニ對シテ有スルコト有ル可キ總債權ノ爲メ婚姻ノ日現ニ夫ニ屬  
スルト日後之ニ屬ス可キトヲ問ハス其夫ノ總不動産ニ付キ婦ノ有スル抵  
當但夫ノ未成年タルトモ亦同シ

第二 未成年者及ヒ禁治產者カ其後見人ニ對シテ有スル總債權ノ爲メ現在ニ屬  
スルト將來ニ得ルトヲ問ハス後見人ノ總不動産ニ付キ有スル抵當

第三 國、府縣、市町村及ヒ公設所カ行政法ノ定メタル限度ト條件トニ從ヒ會計  
吏員ノ管理ノ爲メ其不動産ニ付キ有スル抵當  
又第八十一條及ヒ第八十四條ニ從ヒテ變性シタル先取特權ヨリ生スル抵當ハ

之ヲ法律上ノ抵當ト看做ス

第二款 合意上ノ抵當

第二百五條 合意上ノ抵當ハ公正證書又ハ私署證書ヲ以テスルニ非サレハ之ヲ設ク  
ルコトヲ得ス代理人ヲ以テ抵當ヲ設定スルトキハ委任ノ要旨ヲ抵當ノ設定證書ニ  
示スコトヲ要ス

第二百六條 本邦ニ存在スル財産ニ付キ外國ニ於テ爲シタル抵當ノ合意ハ此種類ノ  
行爲ノ爲メ外國ニ於テ用ユル方式ニ從ヒ之ヲ爲シタルトキハ其効ヲ生ス然レトモ  
特別法ニ規定シタル條件ニ從フニ非サレハ此合意ニ依リ本邦ニ於テ登記ヲ爲スコ  
トヲ得ス

第二百七條 抵當ノ設定證書ニハ義務ノ擔保ニ充テタル不動産ヲ其性質及ヒ所在ヲ  
以テ特ニ指定スルコトヲ要ス

若シ抵當ノ設定カ債務者ノ現在ノ各不動産ヲ特ニ指定セスシテ其全部又ハ一分ヲ  
包含スルトキハ債務者ノ請求ニ因リ債權ノ擔保ニ必要ナル限度ニ其抵當ヲ減少ス  
ルコトヲ得

債務者ノ將來ノ財産ニ付テノ一般又ハ特別ノ抵當ノ設定ハ無効タリ

第二百八條 抵當ノ設定證書ニハ右ノ外義務ノ原因體標及ヒ其主從ノ目的ヲ明カニ  
指示スルコトヲ要ス

義務ノ目的カ金錢タジサルトキハ之ヲ評價ス可シ然レトモ其評價ハ登記ノ時ニ於  
テモ猶ホ之ヲ爲スコトヲ得

第二百九條 抵當ハ抵當ニ充テント欲スル物ノ所有權又ハ收益權ヲ有シ且有償又ハ  
無償ニテ其物ヲ處分スル能力ヲ有スル者ニ非サレハ之ヲ承諾スルコトヲ得ス但第

三者ノ抵當設定ニ關スル第二百一十一條ノ規定ヲ妨ケス

若シ有期ノ物權ヲ抵當ト爲シタルトキハ其抵當ト此權利ノ時期外ニ効力ヲ生スルコトヲ得ス然レトモ抵當ト爲リタル權利カ此時期ノ滿了前或ル出來事ニ因リ物ノ價額ヲ代表スル償金ニ移リタルトキハ債權者此償金ニ付キ其權利ヲ行フ

第二百十條 未成年者、禁治産者及ヒ失踪者ノ財産ハ法律ニ定メタル原因及ヒ方式ニ依ルニ非サレハ其代人ニ於テ之ヲ抵當ト爲スコトヲ得ス

第二百一十一條 合意上ノ抵當ハ第九十八條及ヒ第一百七條ニ於テ動産質及ヒ不動産質ニ付キ記載シタル如ク債務者ノ債務ヲ擔保スル爲メ第三者ヨリ之ヲ設定スルコトヲ得

右ノ抵當ハ之ヲ設定セシムル爲メ債務者カ何等ノ出捐モ爲ササルトキハ債務者ニ對シテハ恩惠ナリトス

又抵當ハ債權カ無償ナルトキ又ハ有償ナルモ諾約ナクシテ主タル合意以後ニ之ヲ設定シタルトキハ債權者ニ對シテモ恩惠ナリトス

第三款 遺言上ノ抵當

第二百十二條 抵當ハ遺贈ノ擔保ノ爲メ又ハ第三者ノ債務ノ擔保ノ爲メニ遺言ヲ以テ之ヲ設定スルコトヲ得

第三節 抵當ノ公示

第一款 登記ノ條件及ヒ期間

第二百十三條 凡ソ法律上、合意上又ハ遺言上ノ抵當ハ下ニ定メタル條件ニ從ヒ其不動産所在地ノ登記所ニ於テ登記ヲ爲シタルニ非サレハ之ヲ以テ第三者ニ對抗スルコトヲ得ス

數箇ノ登記所ノ管轄ニ跨カル不動産ノ全部ヲ抵當ト爲シタルトキハ其主タル部分ノ所在地ヲ管轄スル登記所ニ於テ登記ヲ爲シ他ノ登記所ニ於テハ其登記及ヒ日附ノ記載ノミヲ爲ス

第二百十四條 抵當ハ其設定ノ後債務者ノ無資力カ正當ニ宣告セラレ又ハ其財産ノ全部若クハ過半ノ差押ニ因リ顯然ト爲リタルトキハ有効ニ之ヲ登記スルコトヲ得ス但破産ノ場合ニ於ケル登記ノ權利ニ付テノ商法ノ制限ヲ妨ケス

抵當財産ノ讓渡アリタルトキ其讓受人ニ對シテ債權者ノ登記スル權利ノ制限ハ第五節ニ於テ之ヲ規定ス

第二百十五條 債權者カ財産ノ管理權ヲ有セサルトキハ抵當ノ登記ハ法律上又ハ裁判上ノ代人ヲ爲ス

抵當ノ登記ハ總理代理人及ヒ法律上又ハ合意上ノ抵當ノ附著シタル行爲ヲ爲ス委任ヲ受ケタル部理代理人ノ權利及ヒ義務ニ屬ス

又登記ハ債權者ノ委任ナクシテ事務管理者之ヲ爲スコトヲ得

第二百十六條 婦ノ法律上ノ抵當ハ夫カ婦ニ對シ契約其他ノ方法ニテ條件附ナルト否トヲ問ハス債務者ト爲リタル時ヨリ夫又ハ裁判所ノ許可ヲ要セス婦ノ請求ニ因リテ之ヲ登記スルコトヲ得其又登記ハ婦ノ適當ト思考スル不動産ノ全部又ハ一部分ニ付キ之ヲ爲スコトヲ得第二百十六條ニ記載スル如ク夫ノ有スル抵當減少ノ權利ヲ妨ケス

婦カ登記ヲ爲ササルトキハ夫ハ婦ノ擔保ノ爲メ十分ナル不動産ニ付キ其登記ヲ爲スコトヲ要ス

婦又ハ夫カ登記ヲ爲ササルトキハ縱令委任ナキモ婦ノ親族又ハ姻族ニテ之ヲ爲ス

コトヲ得但婦ノ故障又ハ拋棄ナキコトヲ要ス

第二百十七條 未成年者ノ法律上ノ抵當ハ夫カ婦ノ法律上ノ抵當ヲ登記スルト同一ノ場合ニ於テ同一ノ條件ニ從ヒ後見人之ヲ登記スルコトヲ要ス

後見人登記ヲ爲ササルトキハ後見監督又ハ親族會員其登記ヲ爲スコトヲ要ス若シ之ヲ爲ササルトキハ未成年者ニ對シ連帶シテ損害賠償ヲ負擔ス

未成年者モ亦自治產者ト爲リタル後ハ其登記ヲ求ムルコトヲ得

第二百十八條 前條第一項及ヒ第二項ノ規定ハ禁治產者ノ法律上ノ抵當ニ之ヲ適用ス處刑言渡ニ因レル禁治產ノ場合ニ於テハ禁治產者ノ特別ノ代理人ニテモ登記ヲ求ムルコトヲ得

第二百十九條 債權者ノ相續人又ハ讓受人ハ原債權者ノミノ名ヲ以テ或ハ自己ト原債權者トノ連名ヲ以テ登記ヲ求ムルコトヲ得

債權者ノ代理人又ハ事務管理者ヨリ登記ヲ求ムルトキハ其名及ヒ分限ヲ本人ノ名及ヒ分限ト共ニ記載ス可シ

第二百二十條 債務者カ死亡シタルトキハ登記ハ債權者ノ選擇ニ因リテ其債務者ニ對シ又ハ其相續人ニ對シテ之ヲ爲スコトヲ得

第三者ノ設定シタル抵當ニ關シテハ設定者ニ對シテ登記ヲ爲スコトヲ要ス

第二百二十一條 法律上、合意上又ハ遺言上ノ抵當ノ登記ハ三十個年其効力ヲ有ス三十個年後ハ債權ノ時効カ中斷又ハ停止ニ係リタルトキト雖モ其登記ノ効力ヲ失フ

右抵當ノ時効ハ無能力者ニ對シテ停止セス但其代人ニ對スル求償ヲ妨ケス然レトモ三十個年ノ期間滿了前ニ登記ヲ更新シ舊登記ノ日附ヲ精確ニ記載シタル

トキハ抵當ノ順位ハ舊登記ト同一ノ日附ニテ存ス  
登記ノ効力ヲ失ヒシ後ノ更新ハ新登記ニ同シク其更新ノ日附ニ於テノミ効力ヲ生ス

第二百二十二條 三十個年ノ期間ニ於ケル登記ノ更新ハ舊登記後ニ起リタル債務者ノ破産、無資力又ハ死亡ニ拘ハラズ之ヲ爲スコトヲ得

第二百二十三條 登記ニ關スル爭ハ抵當財產所在地ノ裁判所ニ之ヲ訴フ可シ

第二款 登記ノ抹消減少及ヒ正誤  
第二百二十四條 登記ノ抹消ハ左ノ場合ニ於テ之ヲ爲ス

第一 債權ガ無効タリ若クハ銷除ス可キモノタルトキ又ハ其全部ノ消滅シタルトキ  
第二 抵當カ有効ニ設定セラレサルトキ

右ハ第二百三十條ニ記載シタル如ク或ル不動産ニ付テノ登記ヲ抹消スルコトヲ妨ケス

第二百二十五條 登記ノ抹消ハ債務者又ハ其承繼人ノ請求ニ因リテ之ヲ宣告スルコトヲ要ス但下ニ規定シタル方式ニ於テ債權者ヨリ抹消ヲ許シタルトキハ此限ニ在ラス

第二百二十六條 婦ノ法律上ノ抵當ヲ或ル不動産ニ制限セサル場合ニ於テ其債權ノ擔保ニ必要ナルヨリ多キ不動産ニ付キ登記アリタルトキ又ハ婚姻契約若クハ配偶者間ノ特別合意ニ因リテ婦ノ債權額ヲ評價セサル場合ニ於テ其債權ノ正當ナル評價ヨリ更ニ多キ金額ノ爲メニ登記アリタルトキハ夫又ハ其承繼人ハ不動産又ハ金額ニ關シ裁判上ニテ此登記ノ減少ヲ請求スルコトヲ得

第二百二十七條 右ニ同シク後後人又ハ其承繼人ハ未成年者又ハ禁治産者ノ擔保ニ必要ナルモノノ外ニ爲シタル登記ノ減少ヲ請求スルコトヲ得但親族會議ノ決議ニ因リテ抵當チ或ル不動産ニ制限セス又ハ債權者ヲ評價セサルトキニ限ル

第二百二十八條 合意上ノ抵當ハ債權者ノ現在ノ總財産ニ關シ過度ナルトキニ非サレハ第二百七條ニ記載シタル如ク債權者其減少ヲ請求スルコトヲ得ス

債權者ハ債權者ノ登記シタル債權ノ評價ノ減少ヲ請求スルコトヲ得但設定證書又ハ別證書ヲ以テ評價ヲ爲ササルトキニ限ル

第二百二十九條 遺言上ノ抵當ハ相續ノ不動産ニ付キ遺言者其制限ヲ爲サス又ハ債權ヲ評價セスシテ之ヲ設定シタルトキハ相續人其減少ヲ請求スルコトヲ得

第二百三十條 債務カ半額以上消滅シタルトキハ債務者ハ債務者ノ要求ニ因リ三種ノ抵當ニ付キ金額ノミノ登記ヲ減少ス可シ

債務者ハ一分ノ辨濟ヲ爲シタルトキハ常ニ自費ニテ登記ニ之ヲ附記スルコトヲ得

第二百三十一條 債務者ノ請求ヲ正當トスル判決ニハ抵當チ免カレタル不動産又ハ評價ヲ改メタル金額ヲ指示ス

右第一ノ場合ニ於テハ抵當ノ登記ヲ抹消シ第二ノ場合ニ於テハ之ヲ減少ス

第二百三十二條 前數條ニ從ヒ或ル不動産ニ抵當ノ登記ヲ減少シタル場合ニ於テ其不動産カ債權者ノ擔保ニ不十分ト爲リタルトキハ意外ノ事又ハ不可抗力ニ因ルト雖モ債權者ハ抵當ノ補充ヲ請求スルコトヲ得

第二百三十三條 登記ノ抹消又ハ減少ハ確定判決ニ依ルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得又證書ヲ以テスルニ非サレハ債權者之ヲ承諾スルコトヲ得ス

第二百三十四條 任意ノ抹消又ハ減少カ債務ノ消滅ニ基クトキハ其抹消又ハ減少チ

承諾スルニハ債權者其債務ノ辨濟ヲ受ケ又ハ之ヲ追認スル能力チ有スルヲ以テ足レリトス

抹消カ右ノ外第二百二十四條ニ記載シタル原因ノ一ニ基クトキハ債權者和解スルノ能力チ有スルコトヲ要ス

又抹消又ハ減少カ抵當チ無償ニテ拋棄スル性質チ有スルトキハ債權者無償ニテ債權チ處分スル能力チ有スルコトヲ要ス

第二百三十五條 登記ノ抹消又ハ減少チ承諾スル爲メノ委任ハ證書ヲ以テ之ヲ與フルコトヲ要ス

然レトモ抹消又ハ減少カ債務ノ消滅ニ基クトキハ債權者ノ免責チ承諾スル權限チ有シタル代理人ニ於テ其抹消又ハ減少チ承諾スルコトヲ得

和解又ハ無償ノ拋棄ニ付テハ委任ハ明示タルコトヲ要ス

第二百三十六條 抹消又ハ減少チ爲スニハ其合意又ハ判決チ登記ニ附記スルコトヲ要ス

第二百三十七條 抹消若クハ減少チ後日ノ判決又ハ債務者トノ合意ニテ銷除若クハ解除シタルトキハ其判決又ハ合意チ更ニ登記シ又ハ前登記ニ附記ス此場合ニ於テハ前登記ハ前債權者ノ爲メ其効力チ回復ス然レトモ抹消若クハ減少ノ後ニ於テ不動産ニ付キ權利チ取得シ抵當ノ復舊ノ公示前ニ其權利チ登記シタル第三者ニハ此登記チ以テ對抗スルコトヲ得ス

第二百三十八條 登記、更新、抹消又ハ減少ニ訛誤又ハ脱漏アルモ此カ爲メ銷除チ爲スニ足ラサルトキハ當事者ノ協議又ハ判決ヲ以テ正誤チ爲ス

第四節 債權者間ノ抵當ノ効力及ヒ順位



第二百三十九條 凡ソ不動産ニ付キ登記シタル抵當債權者ハ無特權債權者ニ先ダチ其不動産ノ代價ノ配當ニ加入スルコトヲ得

法律上、合意上又ハ遺言上ノ抵當チ有スル數人ノ債權者ニ於テハ其ノ配當加入ノ順位ハ數箇ノ登記ヲ同日ニ爲シタルトキト雖モ其登記ノ前後ニ因リテ之ヲ定ム

第二百四十條 登記ハ掲載シタル利息及ヒ定期ノ附從物ニ其經過シタル最後ノ二個年分ニ限り主タル債權ト同一ノ順位ヲ得セシム但二個年以外ノ利息及ヒ附從物ノ爲メ債權者ノ日後登記ヲ爲スノ權利ヲ妨ケス然レトモ此登記ハ其日附後ニ非サレハ効力ヲ生セス

第二百四十一條 抵當ノ順位ハ債權カ條件附ナルトキ又ハ信用ヲ開キテ爲ス貸付ノ如ク漸次ノ支拂ヨリ生スルトキト雖モ亦登記ニ因リテ之ヲ定ム

第二百四十二條 債權者カ數箇ノ不動産ニ付キ抵當チ有シ其各箇ノ代價カ同時ニ清算アリシトキハ其債權ハ總不動産ノ價額ノ割合ニ應シテ之ヲ分配ス可シ

漸次ノ清算ノ場合ニ於テ右ノ債權者カ不動産中ノ一箇ノ代價ニ因リテ全ク辨濟チ受ケ此一箇ノ不動産ニ付キ其債權者ノ次ニ抵當チ有スル一人又ハ數人ノ債權者カ爲メニ辨濟チ受ケルコトヲ得サルトキハ其一人又ハ數人ノ債權者ハ他ノ各不動産ニ付テハ其相互ノ順位ヲ以テ右辨濟チ受ケタル債權者ノ抵當ニ當然代位ス

第二百四十三條 前條ノ代位ハ原債權者ニ次テ右各不動産ニ付キ登記ヲ爲シタル債權者ニ對シテ其効チ生ス

右ノ代位者カ登記ニ其代位ヲ附記シタルトキハ其代位者ヲ順序配當手續中ニハ加ハラシムルコトヲ要シ且其承諾アルニ非サレハ何等ノ抹消又ハ減少ヲモ爲スコトヲ得ス

第二百四十四條 凡ソ債權チ處分スル能力アル抵當債權者ハ同一債務者ノ他ノ債權者ノ利益ニ於テ自己ノ抵當又ハ其順位ノミチ拋棄スルコトヲ得但財産編第五百條及ヒ第五百三條ニ於テ更改ニ關シ規定シタルモノヲ妨ケス

若シ抵當債權チ數次ニ數人ニ對シ讓渡、拋棄又ハ代位ノ目的ト爲セシトキハ優先權ハ承繼人中登記ニ自己ノ權利ノ設定權原ヲ附記シ又ハ登記ノ有ラサリシトキハ之ヲ爲シテ其取得チ第一ニ公示シタル者ニ屬ス

第二百四十五條 右ノ外第百八十五條ノ規定ハ前二條ノ場合ニ之ヲ適用ス

第二百四十六條 抵當債權者又ハ無特權債權者ハ他ノ抵當ノ登記チキチ知リタルコトヲ自認スト雖モ登記ノ欠缺チ申立ツル權利ヲ失ハス

第二百四十七條 不動産ノ賣却代價チ以テ全部ノ辨濟チ受ケサル抵當債權者ハ其殘額ニ付テハ無特權債權者タリ

若シ不動産ノ賣却ニ先ダチテ動産有價物ノ配當チ爲ストキハ抵當債權者ハ其債權全額ノ爲メ無特權債權者トシテ假ニ其配當ニ加入ス

其後ニ至リ抵當不動産ノ代價ノ配當アルトキハ抵當債權者ハ動産有價物ニ付キ何等ノ辨濟チモ受ケサリシカ如ク其配當ニ加入ス然レトモ此配當ニ於テ全ク辨濟チ受ケ可キ者ハ動産ノ配當ニテ受取リタル金額チ控除スルニ非サレハ其抵當ノ配當額チ受取ルコトヲ得ス其控除シタル金額ハ動産財團中ニ之ヲ返還ス

不動産ノ代價ノ配當ニ於テ一分ノミノ辨濟チ受ケルコトヲ得ヘキ者ニ付テハ其殘額ニ從ヒ其動産財團ニ對スル權利ヲ定ム但此割合外ニ受取リタルモノハ之ヲ動産財團中ニ返還ス

右ノ返還金額ハ純粹ノ無特權債權者ト有益ニ配當ニ加入スルヲ得サル抵當債權者

及ヒ債權ノ一分ノミニ付キ之ニ加入シタル抵當債權者トノ間ニ於テ更ニ之ヲ配當ス

第五節 第三所持者ニ對スル抵當ノ効力

總則

第二百四十八條 抵當不動産カ讓渡サレ又ハ用益權其他ノ物權ヲ負擔シタルトキハ其權原ノ登記前ニ登記ヲ爲シタル抵當債權者ハ第三取得者ニ對シ債務ノ辨濟ヲ請求スル權利ヲ保有シ此不動産ノ賣却代價ヲ以テ辨濟ヲ受クル爲メ其不動産ノ徵收ヲ訴追スル權利ヲ附隨ニテ保有ス

然レトモ財産編第一百十九條及ヒ第二百十條ニ規定シタル期間ヲ以テ爲シ又ハ更新シタル賃貸借ハ抵當債權者之ヲ遵守スルコトヲ要ス

第二百四十九條 所有權ノ支分權ヲ抵當ト爲シタル場合ニ於テ債務者其權利ヲ拋棄シタルトキハ其拋棄ノ登記前ニ抵當登記ヲ爲シタル債權者ハ其拋棄ニ拘ハラズ追及權ヲ保有ス

第二百五十條 公正證書ヲ以テ設定シタル抵當ハ其不動産ヲ差押ヘ之ヲ賣却セシメタル無特權債權者ニハ競落ノ登記前ニ其抵當登記ヲ爲シタルトキハ之ヲ以テ對抗スルコトヲ得但第二百十四條ニ掲ケタル場合ニ於テ爲セル登記ノ無効タルコトヲ妨ケス

第二百五十一條 第三所持者ノ破産又ハ無資力ハ其取得ノ登記アルマテハ抵當登記ノ妨碍ト爲ラス

第二百五十二條 第三所持者ハ場合ニ從ヒテ左ノ方法ニ依ルコトヲ得  
第一 抵當債務ヲ辨濟スルコト

第二 滌除スルコト

第三 財産檢索ノ抗辯ヲ以テ對抗スルコト

第四 不動産ヲ委棄スルコト

第五 所有權徵收ヲ受クルコト

第一款 抵當債務ノ辨濟

第二百五十三條 第三所持者ハ抵當債務ノ滿期ト爲ルニ從ヒ之ヲ辨濟スルニ於テハ所有權徵收又ハ妨碍ヲ受クルコト無シ

第二百五十四條 第三所持者ハ債務ノ全部又ハ一分ヲ辨濟シタルトキハ財産編第四百八十二條第一號、第四百八十三條第四號及ヒ第五號ニ從ヒ其辨濟ヲ得タル債權者ニ屬スル他ノ抵當、擔保及ヒ利益ニ代位ス

又第三所持者ハ其辨濟ヲ得サリシ債權者ヨリ所有權徵收ノ訴追ヲ受クルコト有ル可キ場合ノ爲メ其所持セル不動産ノ負擔スル抵當ニ付キ辨濟ヲ得タル債權者ニ未定ニテ代位ス

第二款 滌除

第二百五十五條 第三所持者ハ登記シタル總テノ抵當債務ヲ辨濟セサルモ債權者ニ其登記ノ順序ニ從ヒ不動産ノ取得代價、其評價若クハ之ニ超ユル金額ヲ拂渡シ又ハ債權者ノ爲メニ之ヲ供託シテ不動産ノ負擔ヲ免カレシムルコトヲ得但下ニ規定セル如キ提供及ヒ滌除ノ手續ヲ爲シタル後債權者ノ明示又ハ默示ノ承諾アリタルコトヲ要ス

第二百五十六條 停止條件附ニテ不動産ヲ取得シタル者ハ條件ノ成就ニ因リテ其權利ノ定マラサル間ハ滌除スルコトヲ得ス

解除條件附ニテ取得シタル者ハ條件ノ到來セサルニ因リテ其權利ノ定マル前ト雖モ滌除スルコトヲ得

此場合ニ於テ第三所持者ノ提供カ受諾セラレタルモ其金額ハ抵當債務ヲ全ク辨濟スルニ足ラスシテ其抵當ヲ抹消シタル後第三所持者ノ取得カ條件ノ到來ニ因リテ解除スルニ於テハ抹消ヲ受ケタル抵當債權者ノ登記ハ第二百三十七條ニ從ヒテ之ヲ回復ス

又右ノ場合ニ於テ提供カ受諾セラレスシテ下ニ規定セル如ク不動産ヲ競賣ニ付シタルトキハ競落ハ第三所持者ノ爲メ宣告アリタルト其他ノ者ノ爲メ宣告アリタルトテ問ハス以後解除條件ヲ免カレシム

第二百五十七條 抵當ヲ滌除スル權利ハ主タル債務者ト爲リ又ハ保證人ト爲リテ自身ニテ抵當債務ノ責ニ任スル第三所持者ニ屬セス

又右ノ權利ハ他人ノ債務ノ爲メ自己ノ財産ヲ抵當ト爲シタル者ニ屬セス

第二百五十八條 抵當債權者ヲ參加セシメタル總テノ競賣ニ付テハ滌除ヲ爲スノ限ニ在ラス

公用徵收ニ付テモ亦同シ

右ハ抵當債權者ノ其順位ヲ以テ競落代價又ハ徵收償金ノ配當ニ加入スル權利ヲ妨ケス

第二百五十九條 賃借權、使用權、住居權及ヒ地役權ハ滌除ヲ爲ス限ニ在ラス

此等ノ權利ヲ抵當前ニ設定シタルトキハ其附著ノ儘ニ非サレハ不動産ヲ賣却スルコトヲ得ス

抵當後ニ此等ノ權利ヲ設定シタルトキハ之ヲ斟酌セスシテ不動産ノ賣却ヲ訴追ス

ルコトヲ得

然レトモ此末ノ場合ニ於テ第三者ハ第二百四十八條第二項ニ記載シタル制限ニ從ヒ賃借權ヲ遵守スルコトヲ要ス

第二百六十條 第三所持者ハ債權者ヨリ訴追ヲ受ケサル間ハ何時ニテモ滌除スルコトヲ得又辨濟ヲ爲スカ又ハ不動産ヲ委棄スルカノ催告ヲ受ケタル後一个月内ニ滌除スルコトヲ得但此ニ違フトキハ其權利ヲ失フ

然レトモ右ノ失權ハ當然生セス之ヲ請求スルコトヲ要ス但裁判所ハ第三所持者カ正當ノ障礙アリシコトヲ證シ且債權者カ其遲延ノ爲メニ現實ノ損害ヲ受ケサル可キニ於テハ失權ヲ宣告セサルコトヲ得

又債權者ヨリ第二百六十五條第二號ニ規定シタル一个月ノ期間ニ失權ヲ請求セサルニ於テハ失權ヲ宣告スルコトヲ得ス

第二百六十一條 第三所持者ハ滌除ノ準備トシテ第三者ニ對スル自己ノ權利ヲ固定スル爲メ其取得ヲ登記スルコトヲ要ス  
右ノ後第三所持者ハ其不動産ノ負擔セル先取特權又ハ抵當ノ目錄ヲ登記官吏ニ要ス

第二百六十二條 上ニ記載シタル一个月ノ期間ニ第三所持者ハ登記シタル各債權者ト第百十九條、第百七十八條及ヒ第百七十九條ニ從ヒ登記カ抵當ノ登記ニ同シキ効力ヲ有スル債權者トニ左ノ諸件ヲ告知スルコトヲ要ス

第一 取得證書ノ旨趣、其日附及ヒ登記ノ日附、讓渡人及ヒ取得者ノ氏名、職業、住所、讓受ケタル不動産ノ性質、其所在地、讓渡ノ代價及ヒ其負擔ヲ指示スル要領書但交換、贈與若クハ遺贈ニ因リテ權利ヲ取得シタルトキハ其

評價ヲ指示ス可シ

第二 各抵當登記ノ日附、其帳簿ノ葉數、其債權者ノ氏名、住所及ヒ主タル債權トシテ登記シタル金額ヲ明示スル登記表

第三 第三所持者ハ右ノ債權者カ法律ニ從ヒ且一個月ノ期間ニ増價競賣ヲ求メサルニ於テハ滿期、未滿期又ハ條件附ノ債權ヲ區別セスシテ各債權者ノ抵當登記ノ順序ニ從ヒ之ニ不動産ノ代價、其評價若クハ之ニ超ユル金額ノ辨濟又ハ其債權者ノ爲メニ金額ノ供託ヲ爲サントスルノ陳述

第二百六十三條 抵當ヲ登記シタル債權者ノ中ニ先取特權ヲ有スル讓渡人又ハ分割者アルトキハ前條第三號ニ定メタル陳述ニハ此債權者ヲシテ右一個月ノ期間ニ其解除訴權ヲ行ハント欲スル旨ヲ述ヘシムル爲メノ催告ヲ添フルコトヲ要ス但第百八十一條及ヒ第百八十二條ノ明文ニ因リ法律上ノ抵當ニ變性シタル先取特權ヲ有スル者ニ付テモ亦同シ

第二百六十四條 讓渡證書中ニ抵當ト爲シ及ヒ爲ササル財産アルトキハ取得者ハ抵當財産ノ爲メニノミ提供ヲ爲スコトヲ得又増價競賣ハ此提供ニ基キ之ヲ爲スコトヲ要ス

第二百六十五條 凡ソ抵當ヲ登記シタル債權者ニシテ上ニ定メタル提供ヲ受諾セサル者ハ左ノ方式、期間及ヒ條件ヲ以テ抵當財産ノ競賣ヲ要求スルコトヲ要ス

第一 其要求ニハ提供金額ノ上少ナクトモ十分一ノ増價ニテ買受クルコトト其増額シタル代價ノ全部及ヒ費用ノ爲メ十分ナル保證人又ハ擔保ヲ供スル旨ノ陳述トヲ添フルコトヲ要ス若シ此ニ違フトキハ其要求ハ無効タリ但此場合ニ於テハ總テノ正本ニ要求者又ハ其特別代理人ノ署名アルコトヲ

要ス

第二 右ノ要求ハ提供告知ヨリ一个月内ニ第三所持者ニ之ヲ送達スルコトヲ要ス若シ此ニ違フトキハ其要求ハ亦無効タリ

第三 右ノ期間ニ於テ債務者タルト否トヲ問ハス前所有者ニ右ニ同シキ送達ヲ爲スコトヲ要ス

第四 主タル債務者ニ非サル者カ抵當ヲ設定シタルトキモ亦同一ノ期間ニ於テ其債務者ニ送達ヲ爲スコトヲ要ス

第二百六十六條 讓渡人又ハ分割者ニシテ其解除訴權ノ行使ヲ留保セスシテ前條ニ規定シタル如ク増價競賣ヲ要求シタル者ハ其訴權ヲ拋棄シタルモノト看做ス

若シ讓渡人又ハ分割者カ右ノ訴權ヲ保存セント欲スルトキハ増價競賣ノ爲メ許與セラレタル期間ト同一ノ期間ニ第三所持者ニ其旨ヲ告知スルコトヲ要ス若シ此ニ違フトキハ無効タリ但主タル債務者ナル前所有者ニ對シテ此ニ同シキ告知ヲ爲スコトヲ妨ケス

第二百六十七條 定マリタル方式及ヒ期間ヲ以テ増價競賣ノ告知ヲ爲シタルトキハ其競賣ノ要求者ハ抵當ノ登記ヲ爲シタル他ノ債權者ノ承諾ナクシテ競賣ヲ言消スコトヲ得ス其債權者ハ此増價競賣ノ實行ヲ要求スルコトヲ得

若シ競賣ノ實行アリタルトキハ第百七十八條以下ヲ適用ス

第二百六十八條 孰レノ債權者ヨリモ有効ニ競賣ヲ求メサリシトキハ不動産ノ滌除ハ債權者間ノ熟議上若クハ裁判上ノ順序配當ニ依ル辨濟ヲ以テ又ハ債權者ノ名ニ於テスル供託ヲ以テ不動産ヲ滌除ス但此供託ニ付テハ豫メ實物提供ヲ爲スコトヲ要セス

此場合ニ於テ總テノ抵當ハ之ヲ抹消ス其元資ノ不足シタルモノト雖モ亦同シ  
第二百六十九條 右ノ如ク滌除ヲ實行シタル後第三所持者ハ左ノ區別ニ從ヒ其讓渡  
人ニ對シテ擔保ノ求償權ヲ有ス

第一 賣買ノ場合ニ於テハ其賣買代價外ニ提供シ及ヒ辨濟シタルモノノ爲メ  
第二 交換其他ノ有償契約ノ場合ニ於テハ讓渡人ニ對スル自己ノ義務外ニ辨濟  
シタルモノノ爲メ但自己ノ供給シタル對價物ノ返還ヲ受ケサルトキニ限  
ル

第三 贈與又ハ遺贈ノ場合ニ於テハ贈與者又ハ遺言者ノ免責ニ付キ辨濟シタル  
モノノ爲メ

第四 總テノ場合ニ於テ自己ノ負擔シタル滌除手續ノ費用ノ爲メ

第三款 財産檢索ノ抗辯

第二百七十條 主トシテ抵當債務ノ責ニ任セサル第三所持者ハ訴追債權者ニ對シ  
同一債務ノ爲メニ抵當ト爲リタル他ノ不動産ヲ豫メ檢索シテ之ヲ賣却セシメント  
求ムルコトヲ得但此力爲メニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 其不動産カ義務ヲ履行ス可キ場所ノ控訴院ノ管轄内ニ在ルコト

第二 其不動産カ猶ホ主タル債務者ニ屬スルコト

第三 其不動産カ爭ニ係ラサルコト

第四 其不動産カ債權者ノ登記ノ順位ト其價額トヲ斟酌シテ之ニ全部ノ辨濟ヲ  
得セシムルニ不十分ナルコトノ明白ナラサルコト

右ノ抗辯ハ訴追ノ起初ニ之ヲ提出スルコトヲ要ス

第二百七十一條 第三所持者ハ第二十條乃至第二十三條ニ從ヒ保證人ノ分限ヲ以テ

己レニ屬スル檢索ノ利益ヲ拋棄シタルトキト雖モ抵當財産檢索ノ抗辯ノ利益ヲ失  
ハス

第二百七十二條 他人ノ債務ノ爲メ自己ノ不動産ヲ抵當ト爲シタル者ハ檢索ノ抗辯  
ヲ以テ對抗スルコトヲ得

連合債務者ノ中ニテ訴追前ニ債務ニ於ケル自己ノ部分ヲ辨濟シタル者ニ付テモ亦  
同シ

第四款 委 棄

第二百七十三條 第三所持者ハ所有權徵收ノ手續中何時ニテモ訴追ノ目的タル不動  
産ヲ委棄スルコトヲ得其委棄ニ因リ第三所持者ハ訴追債權者ニ所持ノミヲ委付シ  
不動産ノ所有權ト其法定ノ占有トヲ保存シテ其危險ヲ擔任ス

第二百七十四條 主タル債務者又ハ保證人トシテ自身ニ債務ヲ負擔シタルモノニ非  
サル第三所持者ノミ委棄ヲ爲スコトヲ連合債務者ノ中ニテ債務ニ於ケル自己ノ部  
分ヲ辨濟シタル者及ヒ供物保證人ハ訴追中ト雖モ委棄ヲ爲スコトヲ得

第二百七十五條 有効ニ委棄ヲ爲スニハ自身ナルト代人ノ資格ナルトヲ問ハス所有  
權徵收ノ訴追ニ被告トシテ出頭スル能力ヲ有スルヲ以テ足レリトス

第二百七十六條 委棄ハ委棄者又ハ其部理代理人抵當財産所在地ノ裁判所ノ書記課  
ニ於テ之ヲ陳述シ其陳述書ニ署名シテ訴追債權者ニ告知スルコトヲ要ス

裁判所ハ訴追債權者又ハ第三所持者其他ノ利害關係人ノ請求ニ因リテ委棄ニ付テ  
ノ管財人ヲ選任ス但所有權徵收ノ訴追ハ此管財人ニ對シテ繼續ス

第二百七十七條 第三所持者又ハ其代人ハ競落アルマテハ何時ニテモ委棄ヲ爲シタ  
ルト同一ノ方式ヲ以テ其委棄ヲ言消スコトヲ得此場合ニ於テハ訴追債權者ニ對ス

ル總債務ト其時マテノ費用トチ一个月内ニ辨濟シ又ハ供託スルコトヲ要ス但他ノ債權者ノ訴追ノ權利ヲ妨ケス又滌除ノ期間カ經過セサルニ於テハ其債權者ニ對スル滌除ノ權利ヲモ妨ケス

第五款 競賣及ヒ所有權徵收

第二百七十八條 第三所持者カ辨濟ヲ爲サス委棄ヲ爲サス又滌除ヲ提出セサルトキハ抵當債權者ハ民事訴訟法ニ規定シタル方式ト公示トヲ以テ不動産ヲ競賣ニ付ス滌除ノ目的ニテ爲シタル提供ノ受諾ヲ得サル場合ニ於テ增價競賣ノ請求アリタルトキモ亦同シ

第二百七十九條 讓渡人又ハ分割者カ第二百六十六條ノ明文ニ從ヒ其先取特權又ハ法律上ノ抵當權ヲ閣キテ其解除訴權ヲ行ハント欲スル旨ヲ陳述シタルトキハ競賣前ニ其訴ヲ爲スコトヲ要ス但第三所持者ノ請求ニ因リテ裁判所カ此事ニ付キ定メタル期間ヲ超ユルコトヲ得ス

第二百八十條 總テノ場合ニ於テ解除ノ請求ナク又ハ其認許ナキトキハ第三所持者ハ競賣ノ際競買人ト爲ルコトヲ得

第三所持者ノ利益ニ於テ競落ヲ宣告シタルトキハ其判決ハ原證書確認ノ證據トシテ其原證書ニ依ル登記ニ之ヲ附記スルノミ

第二百八十一條 第三所持者ニ非サル者ノ利益ニ於テ競落ヲ宣告シタルトキハ其判決ハ所有權移轉ノ證據トシテ特ニ之ヲ登記シ且前登記ニ之ヲ附記ス

第二百八十二條 前條ノ場合ニ於テハ競落ノ不動産ト第三所持者ニ屬スル他ノ不動産トノ間ニ存在セシ地役權ハ一旦混同シタルモ働方及ヒ受方ニテ再生シ其混同ハ解除セラル

第三所持者ニ其取得前ヨリ屬セシ用益權賃借權其他ノ所有權ノ支分ニ付テモ亦同シ

第二百八十三條 競落ノ孰レノ場合ニ於テモ第三所持者カ競落ノ不動産ニ付キ登記シタル抵當ヲ有セシトキハ其順位ニテ配當ニ加入ス

第二百八十四條 各債權者ニ其登記ノ順序ニ從ヒテ競落代價ヲ辨濟シ尙ホ剩餘アルトキハ其剩餘ハ競落人タルト否トヲ問ハス第三所持者ニ屬ス

若シ競落前ニ第三所持者ノ債權者カ右ノ不動産ニ付キ抵當ノ登記ヲ爲シタルトキハ其債權者ハ前所有者ニ對シテ登記シタル債權者ニ次キ配當ニ加入ス

第二百八十五條 第三所持者カ抵當不動産ノ占有中其所爲ニ因リテ之ヲ毀損シ又ハ之ニ必要若クハ有益ノ出費ヲ爲シタルトキハ第三所持者ト抵當債權者トノ間ニ於テ其計算ヲ爲ス

第二百八十六條 第三所持者ハ委棄スルカ又ハ辨濟スルカノ催告ヲ受ケタル後ニ非サレハ債權者ニ對シテ果實ノ計算ヲ爲スコトヲ要セス

第二百八十七條 如何ナル場合ニ於テモ競落代價ノ辨濟又ハ其供託ノ後ハ登記シタル總抵當ハ之ヲ抹消シ不動産ハ滌除セラル其元資ノ不足シタル抵當モ亦同シ

第二百八十八條 競落ノ後第三所持者ハ左ノ如ク讓渡人ニ對シテ擔保ノ求償權ヲ有ス

第三所持者カ競落人ト爲リタルトキハ第二百六十九條ニ記載シタル如ク賠償ヲ受ケ

外人ノ利益ニ於テ競落ノ宣告アリタルトキハ第三所持者ハ普通法ニ依リテ追奪擔保ニ付テノ權利ヲ有ス但左ノ區別ニ從フ

第一 賣買其他ノ有償取得ノ場合ニ於テ競落代價ヲ取得ノ原代價又ハ對價ヲ超過シタルトキハ此差額ハ第三所持者カ權利ヲ有スル損害賠償中ニ増價トシテ之ヲ加フ

第二 贈與又ハ遺贈ノ場合ニ於テハ第三所持者ハ競落カ贈與者若クハ遺言者ノ相續人ナシテ抵當債務ヲ免カレシメタル限度ニ非サレハ贈與又ハ遺言者ノ相續人ヨリ賠償ヲ受ケス

手續ノ費用ハ競落人ヨリ之ヲ第三所持者ニ辨償ス

第六節 登記官吏ノ責任

第二百八十九條 登記官吏ノ民事上ノ責任ニ關スル財産編第三百五十五條ハ抵當登記ノ脱漏又ハ訛誤ニ之ヲ適用ス

第二百九十條 登記官吏カ第三所持者ノ爲メ登記ヲ爲シタル後之ニ交付シタル認證書中一箇又ハ數箇ノ抵當登記ヲ脱漏シ此脱漏ノ爲メ登記債權者カ滌除ノ提供又ハ競落ノ手續ニ加ハラサリシトキト雖モ猶ホ不動産ノ抵當ハ滌除セラル

第二百九十一條 滌除ノ提供ニ對スル増價競賣ノ爲メ第二百六十五條ニ定メタル期間ノ滿了セサル間ハ脱漏セラレタル債權者ハ其脱漏ヲ第三所持者ニ告知シ之ニ提供ノ通示ヲ求メ増價競賣ヲ要求シ又所有權徵收ノ手續力終了セサルトキハ之ニ加ハルコトヲ得然レトモ此カ爲メ其手續ヲ遅延スルコトヲ得ス

如何ナル場合ニ於テモ右ノ債權者ハ協議上又ハ裁判上ニテ發開シタル順序配當手續ノ閉鎖セサル間ハ之ニ加ハルコトヲ得

右ハ前記ノ債權者カ脱漏ニ因リテ損害ヲ受ケタルコトヲ疏明スルニ於テハ登記官吏ニ對スル求償權ヲ妨ケス

登記官吏ハ主タル債務者又ハ其保證人ノ免責ノ爲メ右ノ求償ニ因リテ辨濟シタルモノニ就キ之ニ對シテ求償權ヲ有ス

第七節 抵當ノ消滅

第二百九十二條 抵當ハ左ノ諸件ニ因リテ消滅ス

第一 主タル義務全部ノ確定ノ消滅但更改ノ場合ニ付キ財産編第五百三條ニ記載シタルモノヲ妨ケス

第二 債權者ノ抵當ノ拋棄

第三 時効

第四 滌除但債權者提供ヲ受諾シ且第二百六十八條ニ從ヒテ提供金額ノ辨濟又ハ供託アリタルトキ

第五 競落但第二百五十八條及ヒ第二百八十七條ニ從ヒテ競落代價ノ辨濟又ハ供託アリタルトキ

第六 抵當不動産ノ全部ノ滅失但第二百一一條ニ從ヒテ債權者ノ權利カ其滅失ヨリ生ス可キ賠償ニ移轉スルコトヲ妨ケス

第七 公用徵收但抵當債權者ニ其償金ヲ辨濟スルコトヲ妨ケス

第二百九十三條 義務ノ消滅カ裁判上ニテ認メラレタル原因ニ由リテ取消サレタルトキハ登記ヲ抹消シタリト雖モ抵當ハ其原順位ニ復ス

然レトモ其抵當ハ抹消ノ後新登記ヲ爲ス前又ハ登記ヲ復シタル判決ヲ原登記ニ附記スル前ニ登記ヲ爲シタル債權者ヲ害スルコトヲ得ス

第二百九十四條 抵當ノ拋棄ハ場合ニ從ヒ有償又ハ無償ニテ債權ヲ處分スル能力ヲ有スル債權者ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

債權者其抵當順位ノミノ拋棄ヲ爲ストキモ亦同シ  
 抵當又ハ順位ノ拋棄ハ默示タルコトヲ得  
 債權者カ讓渡人ト共ニ抵當不動産ノ讓渡ニ參加シタルトキハ追及權ノミニ關シテ  
 其抵當ヲ拋棄シタルト看做ス但法律上特別ニ其參加ヲ要スル場合ハ此限ニ在ラス  
 第二百九十五條 抵當ノ時効ハ不動産カ債務者ノ資産中ニ存スル場合ニ於テハ債權  
 ノ時効ト同時ニ非サレハ成就セス  
 右ノ場合ニ於テ債權ニ關シ時効ノ進行ヲ中斷スル行爲及ヒ之ヲ停止スル原因ハ抵  
 當ニ關シテ同一ノ効力ヲ生ス  
 第二百九十六條 抵當不動産ノ所有者タル債務者カ其不動産ヲ讓渡シテ取得者又ハ  
 其承繼人カ之ヲ占有スルトキハ登記シタル抵當ハ抵當上ノ訴訟ヨリ生スル妨碍ナ  
 キニ於テハ取得者カ其取得ヲ登記シタル日ヨリ起算シ三十年ノ時効ニ因リテノ  
 ミ消滅ス但債權カ免責時効ニ因リテ其前ニ消滅ス可キ場合ヲ妨ケス  
 第二百九十七條 眞ノ所有者ニ非サル者カ讓渡不動産ヲシタルトキハ占有者ハ其善  
 意ナルト惡意ナルトニ從ヒ所有者ニ對シテ時効ヲ得ル爲メニ必要ナル時効ノ經過  
 ニ因リ抵當債權者ニ對シテ時効ヲ取得ス  
 無權原ニテ不動産ヲ占有スル者ニ付テモ亦同シ  
 第二百九十八條 第三所持者ノ爲メノ抵當消滅ノ時効ハ登記ノ更新ニ因リテ中斷セ  
 ラレス然レトモ其時効ハ占有者ノ任意ニテ爲シタル抵當ノ追認及ヒ第二百六十條  
 ニ規定シタル如ク其占有者ニ爲シタル催告ニ因リ其他證據編第九條以下ニ規定  
 シタル如ク總テ抵當權ニ効力ヲ與フル行爲ニ因リテノミ中斷セラル  
 右ノ時効ハ債權ニ附著スル期限又ハ條件ニ因リテ停止セラレス但債權者ハ證據編

第二百二十八條ニ規定シタル如ク其權利ヲ保存スルコトヲ得  
 此他證據編第三百一一條乃至第三百三十六條ニ規定シタル停止ノ原因ハ抵當ニ之ヲ  
 適用ス

民法證據編目錄

第一部 證據

總則

第一章 判事ノ考覈

第一節 當事者申述ノ聽取、係争物並ニ證書外ノ書類ノ調査及ヒ法律ノ解釋

第二節 臨檢

第三節 鑑定

第二章 直接證據

第一節 私書

第一款 私署證書

第二款 署名、捺印セサル證書

第二節 口頭自白

第一款 裁判上ノ自白

第二款 裁判外ノ自白

第三節 公正證書

第四節 反對證書

第五節 追認證書



第六節 證書ノ謄本

第七節 證人ノ陳述

第八節 世評

第三章 間接證據

第一節 法律上ノ推定

第一款 公益ニ關スル完全ナル法律上ノ推定

第二款 公益ニ關スル完全ナル法律上ノ推定

第三款 輕易ナル法律上ノ推定

第二節 事實ノ推定

第二部 時効

第一章 時効ノ性質及ヒ適用

第二章 時効ノ拋棄

第三章 時効ノ中斷

第四章 時効ノ停止

第五章 不動産ノ取得時効

第六章 動産ノ取得時効

第七章 免責時効

第八章 特別ノ時効

附則

民法

證據編

第一部 證據

總則

第一條 有的又ハ無的ノ事實ヨリ利益ヲ得ンカ爲メ裁判上ニテ之ヲ主張スル者ハ其事  
實ヲ證スル責アリ

相手方ハ亦自己ニ對シテ證セラレタル事實ノ反對ヲ證シ或ハ其事實ノ効力ヲ滅却  
セシムル事實トシテ主張スルモノヲ證スル責アリ

第二條 自己ノ主張ノ全部又ハ一分ヲ法律ニ從ヒテ證セス又ハ判事カ證據ヲ査定ス  
ル權ノ自由ナル場合ニ於テ判事ニ此主張ノ心證ヲ起サシメサリシ原告若クハ被告  
ハ其證セサリシ點ニ付キ請求又ハ抗辯ニ於テ敗訴ス

第三條 當事者ノ一方ハ或ル事實ノ證據カ將來已レノ爲メニ利益アルトキハ其利益  
ト證據喪失ノ危險トテ疏明シテ訴訟ノ起ラサル前ト雖モ其事實ノ證據ヲ舉グルコ  
トヲ裁判上主トシテ請求スルコトヲ得

第四條 下ニ定メタル規則ハ物權人權及ヒ人ノ身分ニ關スル證據ニ共通ノモノトス  
但特別ノ規定ヲ妨ケス

第五條 證據ハ左ノ諸件ヨリ成ル

第一 判事ノ考覈

第二 直接證據

第三 間接證據

第一章 判事ノ考覈

第六條 判事ハ左ノ諸件ニ依リ主張セラレタル事實ノ確實ヲ得タルトキハ自己ノ考  
覈ニ依リテ爭ヲ決スルコトヲ得

第一 當事者又ハ其代人ノ申述ノ聽取係爭物並ニ證書外ノ書類ノ調査及ヒ法律

ノ解釋

第二 臨檢

第三 鑑定

第一節 當事者申述ノ聽取、係爭物並ニ證書外ノ書類ノ調査及ヒ法律ノ解釋

第七條 當事者ノ自白アル場合ノ外當事者又ハ其代人ノ申述及ヒ說明ヨリ請求若クハ抗辯ノ證セラレサルコト又ハ尙ホ早キコトノ顯ハルルニ於テハ判事ハ其請求若クハ抗辯ヲ棄却シ又ハ他日本案ノ判決ヲ爲ス可キ旨ヲ言渡ス

右判事ノ心證カ係爭物及ヒ證書外ノ書類ノ調査ヨリ生スルトキモ亦同シ

第八條 受ケタル損害若クハ失ヒタル利益其他原因ニ爭ナク供給ス可キ價額ニ付キ爲ス可キ評價ノミニ爭ノ存スル場合ニ於テ判事ハ當事者又ハ其代人、陳述ヲ聽キ此評價ニ必要ナル元素ヲ得タルトキハ自ラ其評價ヲ爲スコトヲ得

第九條 事實ニ爭ナク法律ノ點ノミニ爭ノ得スルトキハ判事ハ當事者又ハ其代人ノ陳述ヲ聽キ法律ノ規定ヲ其精神ト明文トニ依リテ解釋シ且條理ト公道トノ普通原則ニ依リテ之ヲ補充シ自己ノ心證ヲ取ル

第二節 臨檢

第十條 境界、地役、占有、財産ノ損害及ヒ不動産工事ノ執行ニ關スル爭其他此ニ類似ノ爭ニ付テハ勿論裁判所ニ移送スルコトヲ得サル動産ノ形狀ヲ證スルニ關スルトキト雖モ判事ハ主張セラレタル事實ヲ直接ニ知ルコトヲ以テ訴訟事件ヲ明カナラシムルニ有益ナリト思考スルトキハ或ハ職權ヲ以テ或ハ當事者ノ申立ニ因リテ係爭物又ハ爭ヲ決定ス可キ元素ノ存在スル場所ニ臨檢スルコトヲ得

第三節 鑑定

第十一條 法律ニ於テ鑑定ニ依ル可キ旨ヲ定メタル場合ノ外判事ハ爭ノ判決ニ付キ特別ノ知識ヲ要スルトキハ何時ニテモ或ハ職權ヲ以テ或ハ當事者ノ申立ニ因リテ自己ノ考覈ヲ助ケシムル爲メ鑑定人ノ報告ヲ爲ス可キ旨ヲ命スルコトヲ得

判事ハ鑑定人總員一致ノ説ト雖モ之ニ從フ義務ナシ

第二章 直接證據

第十二條 左ノ諸件ニ於テハ人ノ證言ヨリ生スル直接ノ證據アリトス

第一 私書

第二 口頭自白

第三 公正證書

第四 證人ノ陳述

第一節 私書

第十三條 私書ノ證據力ハ其私書ノ對抗ヲ受クル當事者ノ之ニ署名シ又ハ捺印シタルト否トニ從ヒテ輕重アリ

第一款 私署證書

第十四條 私署證書ハ之ヲ以テ對抗セラルル者ニ不利ナル事實ノ陳述又ハ追認ヲ記載シ且其署名及ヒ印章又ハ其一アルトキハ署名者、捺印者ノ裁判外ノ自白即チ證言ヲ成スモノトス

右同一ノ條件ヲ有スル書狀ハ私署證書ト同一ノ證據力ヲ有ス

第十五條 自己ノ利益ニ於テ私署證書ヲ有スル者カ或ル者ヲ其署名者ナリト主張シ又ハ思考スル場合ニ於テハ爭ノ生スル前ト雖モ其者ニ對シ手跡、署名及ヒ印章ノ

追認ヲ請求スルコトヲ得

署名者ナリト主張セラレタル者ハ其手跡署名及ヒ印章ノ真正ナルコト又ハ其一ノ真正ナルコトヲ明確ニ追認シ又ハ否認スルコトヲ得ルノミ

裁判所ヨリ本條ノ規定ノ口諭ヲ受ケタル者否認ヲ爲ササルトキハ裁判所ハ其否認セサルモノニ付テハ之ヲ追認シタリト認定スルコトヲ得

第十六條 印章ニ關シテハ其印章ヲ提示セラレタル者ハ其印章ノ自己ノ印章ニ相違ナキコトヲ追認スルモ押捺ハ自身又ハ自己ノ許諾ニテ之ヲ爲シタルヲ否認スルコトヲ得但總テノ方法ヲ以テ其證據ヲ供スルコトヲ要ス

此追認證書ヲ與フル前ニ右ノ異議ヲ留メサリシトキハ其後ニ至リ右ノ抗辯ヲ爲スコトヲ得ス

又其署名又ハ印章ヲ追認シタルトキハ其署名又ハ印章ノ獲ラレシ手段タル強暴、錯誤又ハ詐欺ヲ最早主張スルコトヲ得ス但強暴力既ニ止ミ又ハ錯誤若クハ詐欺ヲ既ニ發見シ且此事ニ付キ何等ノ異議ヲ留メスシテ追認ヲ爲シタルトキニ限ル異議ヲ留メタルトキハ追認證書ニ之ヲ記ス可シ

第十七條 署名者ナリト主張セラレタル者ノ相續人、承繼人又ハ代人ニ對シテ追認ノ請求アリタルトキハ被告ハ或ハ自己ノ代表スル者ノ署名若クハ印章ヲ知ラサル旨或ハ其使用ノ不確實ナル旨ヲ陳述スルニ止マルコトヲ得

右ノ相續人、承繼人又ハ代人ハ印章ノ不正當ナル押捺又ハ承諾ノ瑕疵ヨリ生スル無効ノ方法ヲ申立ツル權利ヲ失ハス但此事ニ關シ異議ヲ留ムルコトヲ怠リタルトキト雖モ亦同シ

第十八條 被告ハ異議ヲ留メスシテ署名又ハ印章ヲ追認シタリト雖モ後ニ捺印白紙

ノ濫用又ハ署名若クハ印章ノ偽造アリタルコトヲ證スル權利ヲ失ハス

然レトモ右ノ追認アリタルコトヲ知リ其證書ニ依リ善意ニテ約定シタル第三者ニ證書無効ノ方法トシテ捺印白紙ノ濫用ヲ以テ對抗スルコトヲ得ス

第十九條 一人又ハ數人ノ證人カ私署證書ニ加署シ又ハ加印シタルトキハ其證人ヲ手跡驗眞ニ召喚ス

第二十條 手跡、印章又ハ署名ノ驗眞ノ請求ニ關スル方式並ニ期間及ヒ被告又ハ其代人ノ出席セサルニ因リ此等ノ者ニ於テ印章又ハ署名ヲ追認シタリト爲スコトヲ得ヘキ場合ハ民事訴訟法ニ於テ之ヲ定ム

署名者ナリト主張セラレタル者ノ明確ニ否認シ又ハ其相續人若クハ承繼人ノ追認ヲ爲ササル場合ニ於ケル手跡驗眞手續ノ規則ニ付テモ亦同シ

第二十一條 雙務契約ヲ證スル私署證書ハ反對ノ利益ヲ有スル當事者間ニ正本二通ヲ作り且之ニ署名又ハ捺印スルコトヲ要ス

又各正本ニハ二通ヲ作りタル旨ヲ附記スルコトヲ要ス  
然レトモ當事者ハ一通ノ證書ヲ作ルコトヲ得但其證書中指定シタル第三者ニ之ヲ寄託スルコトヲ合意シタルトキニ限ル

右ノ場合ニ於テ第三者ハ各當事者ノ求ニ應シテ其證書ヲ示ササル可カラズ但當事者雙方ノ承諾ナクシテ之ヲ交付スルコトヲ得ス

第二十二條 證書ノ調製及ヒ其數ノ附記又ハ證書ノ寄託ハ當事者カ合意ノ組成ヲ繋ラシメタル條件ト看做ス

然レトモ前條ニ從ヒテ證書ノ調製アラサリシ契約ノ全部又ハ一分ヲ履行シタル當事者ハ最早條件ノ不履行ヲ申立ツルコトヲ得ス

第二十三條 片務契約ヲ證スル私署證書ニ金錢其他ノ定量物ヲ供與シ辨濟シ又ハ返還スル諾約ヲ包有スル場合ニ於テ債務者カ證書ノ本文ヲ自書セサルトキハ債務者ハ其署名若クハ捺印ノ尙ホ金額若クハ數量ノ文字ニ捺印スルコトヲ要ス但數人ノ債務者アルトキハ其中ノ一人此捺印ヲ爲スヲ以テ足レリトス

第二十四條 二通ノ正本及ヒ前條ノ方式ハ商事ニ付テハ之ヲ要セス

第二十五條 前數條ノ方式ニ從ヒ調製シタル私署證書ニシテ其對抗ヲ受クル者カ追認シ又ハ裁判上ニテ其者カ追認シタリト爲シタルモノハ其主文及ヒ之ト直接ノ關係ヲ有シ且之ヲ補完スル文言ニ付テハ其者ニ對シテ完全ナル證據トス  
此他ノ文言ハ書面ニ因ル證據端緒ノミニ之ヲ用ユルコトヲ得

第三十八條ニ記載シタル自白不可分ナル原則ハ證書ノ各部分ニ之ヲ適用ス

第二十六條 證書カ第十八條ニ規定シタル如ク捺印白紙ノ濫用又ハ偽造ノ攻撃ヲ受ケタルトキハ其證據力ハ刑事裁判所ニ被告ノ送致アルニ因リテ停止セラレ其裁判所ノ判決ノ確定ト爲ルマテ民事ノ判決ヲ中止ス

嫌疑アル人ノ死亡其他ノ原因ニ由リテ刑事審問ノ開カレザリシトキハ民事裁判所ハ刑事事受理ノ理由ニ付キ裁判アルマテ本案ノ判決ヲ中止ス

又刑事審問中ナルトキハ民事裁判所ハ當事者ノ要求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其判決ヲ中止スルコトヲ得

第二款 署名捺印セサル證書

第二十七條 商人ノ帳簿ハ總テノ人ノ爲メ其商人ニ對シテ證據ヲ爲ス然レトモ其帳簿ヲ援用スル者ハ此ヨリ生スル自白ヲ分ツコトヲ得ス  
此他右帳簿ノ證據力ハ商法ニ於テ之ヲ規定ス

第二十八條 非商人ノ帳簿及ヒ覺書ハ其者ノ爲メ證據ヲ爲サス  
右ノ帳簿及ヒ覺書ハ其者ニ對シテ區別ニ從ヒテ證據ヲ爲ス

第二十九條 債權者ノ書面ハ左ノ場合ニ於テハ債務者ノ爲メ其債權者ニ對シテ證據ヲ爲ス  
第一 債務者ノ辨濟其他ノ免責ヲ明カニ掲グルトキ但債權者ニ於テ債務者ニ交付スル爲メ準備セル受取證書タルコトヲ證スルトキハ此限ニ在ラス  
第二 債務者ノ證書又ハ從來ノ受取證書ニ免責ヲ書込ミ且其書類カ債務者ノ手ニ存スルトキ

第三十條 債務者ノ書面ニ其義務ヲ掲ケ且之ヲ以テ債權者ノ證書ノ用ニ供スルモノタルコトヲ記載スルトキハ其書面ハ債務者ニ對シテ證據ヲ爲ス

第三十一條 前二條ノ場合ニ於テ抹殺シタル書面ハ之ヲ斟酌セス但其抹殺カ詐害又ハ錯誤ニ出テタルコトノ證アルトキハ此限ニ在ラス

第三十二條 非商人ハ裁判上ニテ帳簿及ヒ覺書ヲ差出タス義務ナシ然レトモ任意ニ之ヲ差出シタルトキハ爭ニ關スルモノヲ抄録シタル後ニ非サレハ之ヲ取戻スコトヲ得ス但抄録ヲ爲スニハ其者ノ出席ノ上又ハ之ヲ合式ニ召喚シタルトキニ限ル

第二節 口頭自白

第三十三條 口頭自白ハ一方ノ當事者カ己レニ不利ナル權利上ノ結果ヲ生スルコト有ル可キ事實ニ付キ爲スモノナリ其自白ハ裁判上ノモノ有リ裁判外ノモノ有リ

第一款 裁判上ノ自白

第三十四條 裁判上ノ自白ハ自發ノモノ有リ又ハ民事訴訟法ニ規定シタル本人訊問ニ因リテ爲スモノ有リ

第三十五條 自白ハ其自白ニ繫ル權利ヲ處分スル能力ヲ有スル者ニ非サレハ有効ニ之ヲ爲スコトヲ得ス但法律上自白ノ證據ヲ禁シタル事實ニ非サルトキニ限ル  
代理人ノ爲シタル自白ハ其管理行為ニ關スル外特別ノ委任ニ依リタルトキニ非サレハ有効ナラス但裁判上ノ代人ノ自白ト其陳述取消ノ方式及ヒ條件トニ關スル民事訴訟法ノ規定ヲ妨ケス

第三十六條 前條ニ從ヒテ爲シタル自白ヲ相手方ノ受諾シ又ハ之ヲ裁判所ニ於テ認メタルトキハ其自白ハ之ヲ爲シタル者ニ對シテ完全ノ證據ヲ爲ス

然レトモ其自白ハ事實ノ錯誤ノ爲メニ之ヲ言消スコトヲ得  
第三十七條 自白ハ法律ノ錯誤ノ爲メ之ヲ言消スコトヲ得ス

然レトモ相手方ノ權利ヲ直接又ハ間接ニ追認シタル者ハ其權利ノ原因及ヒ存續ヲ爭フ權能ヲ失ハス

第三十八條 複雜ナル自白ヲ援用セント欲スル者ハ陳述セラレタル數箇ノ事實ニ關シ其自白ヲ分ツコトヲ得ス但此等ノ事實カ相牽連シタルトキニ限ル  
然レトモ主タル事實ヲ變更スル事實ノ主張ハ通常ノ證據方法ヲ以テ之ヲ駁撃スルコトヲ得

第三十九條 裁判上ノ自白ノ効力ハ裁判所ノ管轄違カ公ノ秩序ニ關セサルモノタルトキハ其管轄違ニ因リテ無効ト爲ラス

反對ノ場合ニ於テハ自白ハ裁判外ノモノトシテノミ有効ナリ

第四十條 一方ノ當事者カ訴訟事件ノ或ル事實ノ存在ニ付キ陳述ス可キノ求ヲ受ケテ其事實ヲ爭ハサルニ因リ之ヲ追認シタリト看做ス場合ハ民事訴訟法ニ於テ之ヲ規定ス

第四十一條 一方ノ當事者カ癡疾其他ノ原因ニ由リテ語ルコトヲ得スト雖モ書面又ハ容態ヲ以テ裁判所ニ答フルコトヲ得ルニ於テハ裁判上ノ自白ノ規則ヲ之ニ適用ス

第二款 裁判外ノ自白

第四十二條 裁判外ノ自白ハ相手方又ハ其代人ノ面前ニ於テ口頭ニテ又ハ此等ノ者ニ送付シタル信書若クハ書類ニテ之ヲ爲シタルニ非サレハ其効ヲ有セス

此求ノ場合ノ外口頭ノ自白ヲ受ケ及ヒ證スル資格ヲ有スル官廳ニ於テ更ニ其自白ヲ爲ササリシトキハ人證ヲ許ス場合ニ非サレハ證人ヲ以テ之ヲ證スルコトヲ得ス

第四十三條 裁判上ノ自白ノ有効ナル爲メ要スル能力、其證據力、其言消及ヒ其不可分ニ關スル前數條ノ規定ハ裁判外ノ自白ニ之ヲ適用ス

然レトモ判事ハ確實ニシテ明白ナル自白ニ非サレハ之ヲ採用スルコトヲ得ス

第四十四條 上ノ規定ハ義務ノ全部又ハ一分ノ履行ヲ法律上ニテ默示ノ自白ト看做ス可キ場合ヲ妨ケス

第四十五條 裁判外ノ自白ハ有効ニ之ヲ言消シタリト雖モ相手方ノ利益ニ於テ時効ノ中斷ヲ生ス然レトモ自白ノ日以後ニ經過ス可キ時効ハ言消ノ日ヨリ再ヒ進行ス

第三節 公正證書

第四十六條 公正證書ハ公吏カ當事者ヨリ證スルコトヲ託セラレタル事實ニ付テノ證言ナリ

又官廳ノ代人トシテ事ヲ行フ官吏ノ調製シタル證書ハ公正ナリ

證書ハ公吏カ場所、證書ノ性質及ヒ其證書ニ關係スル人ニ付キ管轄ヲ有シ且法律ニ定メタル方式ニ從ヒテ之ヲ作りタルニ非サレハ公正ナラス

公證人其他當事者ノ囑託ニ應ス可キ公吏ノ管轄及ヒ其證書ノ方式ハ特別法ヲ以テ之ヲ定ム

第四十七條 前條ニ從ヒテ作りタル證書ハ偽造ノ申立アルマテハ公吏自身ニテ又ハ其面前ニテ爲シタル行爲及ヒ申述ニ付キ其吏員ノ陳述ノ證據ヲ爲ス  
此證書ハ之ニ記載シタル日附ニ付キ右同一ノ證據ヲ爲ス  
公吏ノ名ニテ作り且其署名及ヒ印章ヲ具ヘタル證書ハ偽造ノ申立アルマテハ其吏員ヨリ出テタルモノト推定ス

偽造申立手續ハ民事訴訟法ニ於テ之ヲ規定ス  
第四十八條 公正證書ノ證據力ハ偽造ノ申立ニ因リテ之ヲ停止ス其執行力ニ付テモ亦同シ

主文ト直接又ハ間接ノ關係アル文言ニ關シテハ第二十五條ノ規定ヲ適用ス

第四十九條 證書ニ公正證書トシテ有効ナル爲メ上ニ定メタル條件ノ一ヲ缺クコト有ルモ出捐ヲ爲ス總テノ當事者カ現實ニ之ニ署名シ又ハ捺印シタルトキハ其證書ハ第二十一條及ヒ第二十三條ニ定メタル條件ヲ履行セスト雖モ私署證書トシテ有効ナリ

第四節 反對證書

第五十條 當事者ハ祕密ニ存シ置ク可キ反對證書ヲ以テ公正證書又ハ私署證書ノ効力ノ全部又ハ一分ヲ變更シ又ハ滅却スルコトヲ得然レトモ其反對證書ハ公正證書タルトキト雖モ署名者及ヒ其相續人ニ對スルニ非サレハ効力ヲ有セス  
然レトモ當事者ノ債權者及ヒ特定承繼人カ當事者ト約定スルニ當リ反對證書アルヲ知リタルコトヲ證スルニ於テハ之ヲ以テ其債權者及ヒ承繼人ニ對抗スルコトヲ

得

第五十一條 不動産權利ニ關スル反對證書カ或ハ登記ニ因リ或ハ其附記ニ因リテ公ニ爲サレタルトキハ其反對證書ハ通常ノ効力ヲ取得ス總テ遡及ノ効力ヲ有セス

第五十二條 孰レノ場合ニ於テモ一方ノ當事者ノ總テノ承繼人ハ他ノ當事者及ヒ其相續人ニ反對證書ヲ以テ對抗スルコトヲ得

第五節 追認證書

第五十三條 追認證書ハ當事者ノ一方カ己レニ不利ナル公正又ハ私署ノ原證書ノ成立ヲ追認スル證書ナリ

右ノ證書ハ下ノ二箇ノ場合ヲ除キ原告ヲシテ原證書ヲ差出タス義務ヲ免カレシメス又其證書中ニ原證書ヨリ更ニ多ク又ハ更ニ少キ事項ヲ記シ又ハ之ト異ナリタル事項ヲ記スルモノハ其効ナシ但追認證書中ニ之ヲ原證書ニ代用ス可キ旨ヲ記載シタルトキハ此限ニ在ラス

第五十四條 左ノ二箇ノ場合ニ於テハ追認證書ハ原證書滅失ノ證アルトキ之ニ代ハルモノトス

第一 追認證書ニ原證書ノ事項ヲ再掲シタル旨ヲ記載スルトキ

第二 追認證書ノ日附ヨリ二十年ヲ經過シ且之ヲ援用スル者カ其證書ノミチニ既ニ權利ノ行使ニ用キタルトキ

第五十五條 前條ノ場合ノ外原告カ原證書ヲ差出タスコトヲ得サルトキハ追認證書ハ其利益ニ於テハ書面ニ因ル證據端緒トシテ有効ナリ  
總テノ場合ニ於テ追認證書ハ時効ヲ中斷ス

第六節 證書ノ謄本

第五十六條 裁判所又ハ當事者ヨリ正本ノ差出ヲ求ムルニ於テハ證書ノ謄本ハ之ヲ援用スル者ヲシテ其正本ヲ差出タス義務ヲ免カレシメス但其者カ正本ノ滅失ヲ證シタルトキハ此限ニ在ラス

然レトモ公正ノ正本又ハ裁判上追認アリタル私署ノ正本カ原本トシテ公吏ノ許ニ藏メテラレタル場合ニ於テ裁判所ニ其正本ヲ差出タスコトハ裁判所ノ命令ニ依リ民事訴訟法及ヒ公吏ノ規則ニ從ヒテ之ヲ爲ス

第五十七條 正本ノ滅失シタルトキ其謄本ハ左ノ四箇ノ場合ニ於テハ正本ト同一ノ證據力ヲ有ス

第一 公吏ノ作リシ公正證書ノ正式謄本タルトキ

第二 公正證書ノ謄本又ハ裁判上追認アリ且原本トシテ公吏ノ許ニ藏メタル私署證書ノ謄本ヲ當事者ノ要求ニ因リ其相手方ノ面前ニテ其公吏ノ作リタルトキ

第三 當事者出席ノ上又ハ合式ニ之ヲ召喚シタル上ニテ公吏カ裁判所ノ命ニ依リテ其謄本ヲ作リタルトキ

第四 右三箇ノ場合ノ外適法ニ正本ヲ預リタル公吏ノ作リシ謄本カ異議ヲ受ケスシテ其日附ヨリ二十个年ヲ經過シ且當事者間ニ於テ主張セラレタル權利ニ關シ裁判上又ハ裁判外ニテ既ニ援用セラレタルトキ

謄本ニハ左ノ諸件ヲ附記スルコトヲ要ス  
右第一ノ場合ニ於テハ其謄本ハ正式謄本タルコト

第二ノ場合ニ於テハ當事者ノ面前ニテ作リタルコト

第三ノ場合ニ於テハ裁判所ノ命ニ依リテ作リタルコト

總テノ場合ニ於テ其謄本ヲ正本ト校合シタル旨又ハ其謄本ノ正本ニ符合スル旨ヲ之ニ附記スルコトヲ要ス

第五十八條 前條ニ記載シタル四箇ノ場合ノ外ハ公吏ノ作リタル證書ノ謄本ハ書面ニ因ル證據端緒ノ用ヲ爲スノミ

第五十九條 公吏ノ作リタル謄本ノ復寫ハ人證ヲ許ス可キ場合ニ限り單純ナル參考書ノ用ヲ爲スノミ

然レトモ公正證書ノ謄本ヲ登記ノ公簿ニ謄寫シタルトキハ其謄寫ハ書面ニ因ル證據端緒ナリ

裁判上追認アリタル私署證書ノ正本ノ右ニ同シキ謄寫ハ亦書面ニ因ル證據端緒ノ効力ヲ有ス

謄寫カ其日附ヨリ二十个年ヲ經過シ且異議ヲ受クルコト無ク既ニ行使セラレタルトキハ其謄寫ハ第五十七條第四號ニ從ヒテ完全ノ證據トス

第七節 證人ノ陳述

第六十條 物權又ハ人權ヲ創設シ移轉シ變更シ又ハ消滅セシムル性質アル總テノ所爲ニ付テハ其所爲ヨリ各當事者又ハ其一方ノ爲メニ生スル利益カ當時五拾圓ノ價額ヲ超過スルトキハ公正證書又ハ私署證書ヲ作ルコトヲ要ス

人證ハ右ノ價額ヲ超過スルニ於テハ法律上明示若クハ默示ニテ例外ト爲シタルトキニ非サレハ裁判所之ヲ受理セス

第六十一條 雙務契約ニ於ケル證書ノ必要ハ權利ノ最高ナル價額ニ依ル

第六十二條 請求又ハ抗辯ノ目的カ金錢ニ非サル場合ニ於テ相手方カ爭ノ價額五拾圓ヲ超過スル旨ヲ陳述シテ人證ニ異議ヲ申立ツルトキハ裁判所ハ訴訟ノ元素ニ從

ヒ又ハ鑑定ニ從ヒテ豫メ假ノ評價ヲ爲ス

第六十三條 書面ヲ作りタル場合ニ於テハ書面ニ反スル事項若クハ書面外ノ事項ヲ證スル爲メ又ハ書面ノ意義ヲ變更ス可キ様其調製ノ際若クハ其前後ニ申述シタルモノヲ證スル爲メニハ縱令五拾圓ヨリ少ナキ利益ニ關スルモノ證ヲ許サス

此禁止ハ辨濟、免除、更改其他ノ義務消滅ノ原因ヲ證スル爲メ又ハ書面ヲ以テ證シタル物權ノ消滅又ハ變更ヲ證スル爲メ上ニ定メタル制限内ニ於ケル人證ヲ妨ケス總テノ場合ニ於テ主張セラレタル事實ノ日附及ヒ場所又ハ履行ノ爲メ口頭ニ定メタル時期及ヒ場所ノ脱漏ハ人證ヲ以テ之ヲ補足スルコトヲ得但此事ヨリ生スル利益ヲ主タル利益ニ加ヘテ價額五拾圓ヲ超過セサルトキニ限ル

第六十四條 争ノ利益カ五拾圓ヲ超過スル場合ニ於テハ原告又ハ被告ハ縱令其以下ノ數額ニ請求又ハ抗辯ヲ減スルモノ證ヲ許サス

五拾圓ヲ超過セサル請求又ハ抗辯カ此數額ヲ超過シタル價額ノ殘餘ナルトキ亦同シ

第六十五條 前條ニ規定シタル二箇ノ場合ニ於テ證人訊問ニ因リ五拾圓ヲ超過シタル利益ナルコトヲ發見シタルトキハ人證ヲ許シタル裁判所ハ之ヲ取消スコトヲ要ス

此他證人訊問ニ因リ法律上之ヲ許ササル事情ヲ發見シタル場合ニ於テモ亦同シ  
第六十六條 上ノ規定ハ填補利息、過怠約款又ハ契約ニ從ヒテ返還ヲ受ク可キ果實ノ計算ヲ加フルカ爲メニ五拾圓ノ額ヲ超過スル場合ニ於テ原告又ハ被告カ證人ヲ以テ其主タル債權ヲ證スル爲メ此從タル債權ヲ拋棄シ得ル妨ト爲ラス  
右ノ超過方遅延利息又ハ要約セサル損害賠償又ハ請求後ニ返還ヲ受ク可キ果實ノ

ミヨリ生スルトキハ全部ニ付キ人證ヲ許ス

第六十七條 書面ニ依リ全ク證セラレスシテ各別ニ人證ノ許サル可キ數箇ノ請求ヲ爲スコトヲ得ヘキ者ハ其原因ノ如何ニ拘ハラス一箇ノ訴狀ニ其數箇ノ請求ヲ併合スルコトヲ要ス但其請求カ總テ滿期ノモノニシテ同一裁判所ノ管轄ニ屬スルモノタルトキニ限ル

右ノ手續ヲ爲ササルニ於テハ最早其脱漏シタル請求ニ付キ人證ヲ許サス  
右ノ規定ハ同一ノ請求ニ對シ數箇ノ抗辯ヲ以テ對抗セント主張スル者ニ之ヲ適用ス

第六十八條 前條ニ記載シタル如ク併合シタル數箇ノ請求又ハ抗辯カ五拾圓ノ價額ヲ超過スルトキハ人證ヲ許サス但此請求又ハ抗辯カ相異ナル原因ヨリ生スルトキハ此限ニ在ラス

第六十九條 左ノ場合ニ於テハ争ノ價額ノ如何ニ拘ハラス人證ヲ許ス  
第一 書面ニ因ル證據端緒ノ存スルトキ

證據端緒トハ之ヲ以テ對抗セラルル人又ハ其人ヲ代表シタル者ヨリ出テタル總テノ書面ニシテ主張シタル事柄ニ付キ事實タルノ感ヲ起サシムルモノヲ謂フ

主張シタル事柄ノ書面ニ因ル證據端緒アルトキハ書面外ノ事項又ハ書面ニ反スル事項ニ付キ人證ヲ許ス

第二 原告又ハ被告カ不可抗力又ハ自己ノ過失若クハ懈怠ニ歸ス可カラサル意外ノ事ニ因リテ其證書ヲ失ヒタルコトヲ證スルトキ

第三 主張シタル事柄ノ有リタル當時利害關係人カ書證ヲ得ル能ハサリシトキ



第七十條 前條第三號ハ殊ニ左ノ場合ニ之ヲ適用ス

第一 財産取得編第二百二十條及ヒ第二百二十一條第一項ニ規定シタル急迫寄託

第二 事變、不期ノ危険又ハ急迫ナル必要ノ場合ニ於テ負擔シタル義務

第三 合意外ノ原因ヲ有スル義務但此場合ニ於テ不當ノ利得、不正ノ損害又ハ法律ノ規定ヨリ生シタリト主張スル義務カ書面ヲ以テ證ス可キ性質ノモノタル權利行爲ヲ推量セシムルトキハ豫メ其證據ヲ供スルコトヲ要ス

第七十一條 法律カ人證ヲ許ス場合ノ外人證ヲ拒ムニ利益ヲ有スル當事者カ人證ニ依リテ證據ヲ舉グルコトヲ承諾スルトキハ裁判所ハ人證ヲ拒絕シ又ハ之ヲ許可スルコトヲ得

七十二條 判事ハ證人ノ證據ニ因リテ拘束セラレス其心證ニ從ヒテ判決ス

第八節 世評

第七十三條 法律上特ニ世評ニ因ル證據ヲ許ス場合ノ外或ル事實カ顯著ナルトキ法律カ其規定ヲ此事實ニ適用ス可キコトヲ定メタル各箇ノ場合ニ於テハ此證ヲ用ユルコトヲ得

世評ニ因ル證據ニ於テハ證人ハ事實ニ付キ直接ニ自ラ知ラサルモ傳聞ニ因リ又ハ公然顯著ナルニ因リテ知リタル所ノモノヲ陳述スルコトヲ得

第三章 間接證據

第七十四條 間接證據ナル推定ハ法律カ直接證據ナキ場合ニ於テ知レタル事實ヨリ知レサル事實ニ自ラ推及シ又ハ裁判官ノ明識ト思慮トニ委ヌル結果ナリ

右第一ノ推定ヲ法律上ノ推定ト謂ヒ第二ノ推定ヲ事實ノ推定ト謂フ

第一節 法律上ノ推定

第七十五條 法律上ノ推定ニハ其證據力ト其原因トニ從ヒテ左ノ區別アリ

第一 完全ニシテ公益ニ關スルモノ

第二 完全ニシテ私益ニ關スルモノ

第三 輕易ナルモノ

第一款 公益ニ關スル完全ナル法律上ノ推定

第七十六條 公益ニ關スル完全ナル法律上ノ推定ハ法律ノ明示シテ定メタル場合及ヒ方法ニ從フニ非サレハ反對ノ證據ヲ許サス此推定ハ之ヲ左ニ掲ク

第一 既判力

第二 取得又ハ免責ノ時効

第七十七條 既判力ハ判決主文ニ包含スルモノニ存ス

第七十八條 既判力ハ真正ト推定セラル

然レトモ確定ト爲ラサル判決ハ民事訴訟法ニ定メタル方式及ヒ期間ニ於テ之ヲ攻撃スルコトヲ得

第七十九條 判決ノ確定ト爲リタルトキ同一ノ爭ヲ再ヒ訴フルニ於テハ其爭ハ下ノ區別ニ從ヒ既判力ニ依リテ之ヲ斥ク

第八十條 判決カ全部又ハ一分ニ付キ公ノ秩序ニ關スルトキハ既判力ニ因ル不受理ノ理由ハ裁判所ノ職權ヲ以テ之ヲ補足スルコトヲ要ス

此他ノ場合ニ於テハ利害關係人ヨリ其不受理ノ理由ヲ以テ對抗スルコトヲ要ス

第八十一條 既判力ニ因ル不受理ノ理由ヲ以テ新請求又ハ新答辯ニ對抗スルコトヲ得ルニハ其請求又ハ答辯力舊請求又ハ舊答辯ニ比較シテ左ノ諸件アルコトヲ要ス

第一 權利又ハ事實ニ關シ争ノ目的ノ同一ナルコト  
 第二 主張ノ原因ノ同一ナルコト  
 第三 原告、被告ノ權利上ノ資格ノ同一ナルコト  
 第八十二條 新請求又ハ新答辯ノ目的カ數量ニ付テノミ舊請求又ハ舊答辯ノ目的ト異ナリタルトキハ新請求又ハ新答辯ノ目的ハ舊請求又ハ舊答辯ニ包含シタルモノト看做ス但舊請求又ハ舊答辯ヲ裁判セシ裁判所カ新請求又ハ新答辯ノ數量ヲ正當トスルニ於テハ之ヲ許與スル權力ヲ有セシトキニ限ル  
 第八十三條 舊争カ合意又ハ遺言ノ銷除、廢罷又ハ解除ヲ目的トシタルトキハ其争ノ際存在シタルモ當事者ノ知リテ申立テサリシ他ノ同性質ノ原因ハ當事者之ヲ拋棄シタリト推定セラレ更ニ之ヲ新争ノ原因トシテ用ユルコトヲ得ス  
 方式ノ瑕疵アル證書ヲ其瑕疵ノ爲メ無効トスル舊争中ニ申立テサリシ他ノ方式ノ瑕疵ニ付テモ亦同シ  
 本條ノ適用ニ於テ銷除ノ訴ノ爲メニハ承諾ノ各種ノ瑕疵及ヒ各種ノ無能力ヲ同性質ノ原因ト看做シ又解除ノ訴ノ爲メニハ合意不履行ノ各種ノ場合ヲ同性質ノ原因ト看做ス  
 第八十四條 當事者カ或ハ自身ニテ同一ノ資格ヲ以テ既ニ舊訴訟ニ出テタルトキ或ハ舊訴訟ニ於テ其前主若クハ代理人ニ因リテ代表セラレタルトキ或ハ利害關係人ノ結合カ暗ニ相互代理タルトキハ當事者ノ權利上ノ資格ハ同一ナリトス  
 第八十五條 刑事裁判所カ犯罪ノ所爲ノ爲メニ要求セシ民事上ノ賠償ニ付キ判決シタル場合ノ外尙ホ重罪、輕罪又ハ違警罪ノ判決ハ犯罪ニ附著スル民事上ノ利益ニ付キ既判力ヲ有ス但犯罪所爲ノ眞實、其犯罪ノ性質及ヒ被告人ノ罪責ニ付テノ裁

判ニ關スルモノニ限ル  
 第二款 私益ニ關スル完全ナル法律上ノ推定  
 第八十六條 法律上ノ推定ハ左ノ場合ニ於テハ私益ニ關スル完全ノモノナリ  
 第一 法律カ人ノ身分ニ關スル或ハ資格ヲ付與シ又ハ拒絕スルトキ  
 第二 法律カ或ル所爲ヲ其規定ニ背キタルモノト推定シテ取消ストキ  
 第三 法律カ制規ノ公示ナキニ因リ第三者ニ知レサルモノト推定シテ或ル權利ノ行使ヲ拒絕スルトキ  
 此法律上ノ推定ハ法律ノ明示シテ定メタル場合及ヒ方法ニ從フニ非サレハ反對ノ證據ヲ許サス  
 然レトモ和解ヲ許ス場合ニ於テハ此推定ハ口頭自白ヲ以テ何時ニテモ之ヲ覆ヘスコトヲ得  
 第三款 輕易ナル法律上ノ推定  
 第八十七條 上ノ法律上ノ推定ニ非サルモノハ輕易ナル法律上ノ推定ナリ此推定ニ付テハ法律カ反對ノ證據ヲ明許セサルトキト雖モ總テ之ヲ許ス  
 右反對ノ證據ハ前二章ニ規定シタル條件ヲ以テスルニ非サレハ之ヲ舉グルコトヲ得ス  
 又輕易ナル法律上ノ推定ハ次條ノ場合ニ於テハ事實ノ推定ヲ以テ之ヲ駁撃スルコトヲ得  
 第二節 事實ノ推定  
 第八十八條 法律カ裁判所ニ其裁判ノ元素ヲ訴訟ノ事情ニ付キ採取スルコトヲ許ス特別ナル場合ノ外尙ホ裁判所ハ人證ヲ許ス可キ場合ニ於テハ何等ノ直接ノ證據ヲ

モ擧ケサルトキト雖モ事情ヨリ生スル心證ニ從ヒテ爭テ決スルコトヲ得  
第二章 時効

第一章 時効ノ性質及ヒ適用

第八十九條 時効ハ時ノ効力ト法律ニ定メタル其他ノ條件トヲ以テスル取得又ハ免責ノ法律上ノ推定ナリ但動産ノ瞬間時効ニ關スル第四百四十四條以下ノ規定ヲ妨ケス

第九十條 正當ナル取得又ハ免責ノ推定ハ完全ニシテ公ノ秩序ニ關スルモノトス此推定ハ第九十六條及ヒ第六十一條ニ規定シタル如ク法律ノ定メタル場合及ヒ方法ニ從フニ非サレハ反對ノ證據ヲ許サス

第九十一條 取得時効ノ効力ハ占有ノ有益ニ始マリタル日ニ遡ル  
免責時効ノ効力ハ債權者カ其權利ヲ第二百五條以下ニ記載シタル區別ニ從ヒテ行フコトヲ得ヘカリシ日ニ遡ル

第九十二條 或ル訴權ノ行使ノ爲メ法律ニ定メタル期間ハ其訴權ノ性質ニ因リテ取得時効又ハ免責時効ノ一般ノ規則ニ從フ但法律カ明示又ハ默示ニテ例外ヲ設ケタル場合ハ此限ニ在ラス

第九十三條 時効ハ總テノ人ヨリ之ヲ援用スルコトヲ得  
又時効ハ總テノ人ニ對シテ進行ス但法律ニ依リ時効停止ノ利益ヲ受クル人ニ對シテハ此限ニ在ラス

第九十四條 總テ融通物ハ時効ニ罹ルコトヲ得但法律上之ニ異ナル規定ヲ設ケタルモノハ此限ニ在ラス  
不融通物及ヒ讓渡スコトヲ得サル物ハ時効ニ罹ルコトヲ得ス

公有ノ財産ハ動産ト雖モ亦同シ

第九十五條 自己ノ財産ニ付キ又ハ他人ニ對シテ行フコトヲ得ル法律上ノ權能ハ幾許ノ時期間之ヲ行ハサルモ爲メニ喪失セス但法律、合意又ハ遺言ニ於テ之ニ異ナル定ヲ設ケタル場合ハ此限ニ在ラス

第九十六條 判事ハ職權ヲ以テ時効ヨリ生スル請求又ハ抗辯ノ方法ヲ補足スルコトヲ得ス時効ハ其條件ノ成就シタルカ爲メ利益ヲ受クル者ヨリ之ヲ援用スルコトヲ要ス

時効ヲ援用スル當時併セテ正當ノ取得又ハ免責ナキコトヲ追認スル者ハ時効ヲ拋棄シタリト看做ス  
第九十七條 時効ヲ援用スルニ利益ヲ有スル當事者ノ總テノ承繼人ハ或ハ原告ト爲リ或ハ被告ト爲リ其當事者ノ權ニ基キテ時効ヲ援用スルコトヲ得

債權者ハ財産編第三百三十九條ニ從ヒテ右ト同一ノ權利ヲ有ス  
第九十八條 時効ハ訴訟中何時ニテモ之ヲ援用スルコトヲ得又控訴ニ於テモ始メテ之ヲ援用スルコトヲ得然レドモ上告ニ於テハ始メテ之ヲ援用スルコトヲ得ス

第九十九條 年又八月ニ依リテ成就ス可キ時効ハ曆ニ從ヒテ之ヲ算ス  
日ニ依リテ成就ス可キ時効ハ午前零時ヨリ午後十二時マテテ一日ト爲シテ之ヲ算ス  
時効ノ進行ノ始マリタル日又ハ其中斷若クハ停止ノ後再ヒ進行ノ始マリタル日ハ之ヲ算セス

最後ノ日ハ全ク經過スルコトヲ要ス  
第二章 時効ノ拋棄

第一百條 時効ハ豫メ之ヲ拋棄スルコトヲ得ス但第二百十條第二項ニ記スル如ク占有者カ將來ニ向ヒテ其占有ノ容假ヲ認ムル權利ニ妨ナシ成就シタル時効ハ之ヲ拋棄スルコトヲ得又其進行中ト雖モ既ニ經過シタル時期ノ利益ハ之ヲ拋棄スルコトヲ得

此場合ニ於テハ第一百十八條以下ニ記載セル相手方ノ權利ヲ追認シタル場合ニ於ケルト同シク時効ハ中斷ス

第一百一條 拋棄ハ默示タルコトヲ得ルト雖モ明カニ事情ヨリ顯ハルルコトヲ要ス

第一百二條 成就シタル時効ヲ有効ニ拋棄スルニハ取得シタリト推定セラルル權利ヲ無償ニテ讓渡シ又ハ消滅シタリト推定セラルル義務ヲ無償ニテ負擔スル能力アルコトヲ要ス

第一百三條 債權者ハ其權利ヲ詐害シテ債務者ノ爲シタル時効ノ拋棄ニ對シテハ財産編第三百四十條以下ニ定メタル條件及ヒ方法ニ從ヒ自己ノ名ヲ以テ之ヲ攻撃スルコトヲ得

第三章 時効ノ中斷

第一百四條 經過シタル時期ノ利益カ下ニ記シタル原因ノ一ニ由リテ消滅スルトキハ時効ハ中斷ス

中斷シタル時効ハ中斷ノ原因ノ止ミシ時ヨリ更ニ進行ス

第一百五條 時効ノ中斷ハ自然ノモノ有リ法定ノモノ有リ

自然ノ中斷ハ取得時効ニ關シテノミ生ス

法定ノ中斷ハ取得及ヒ免責ノ時効ニ共通ナリ

第一百六條 動産不動産又ハ包括動産ノ占有者カ眞ノ所有者又ハ第三者ノ所爲ニ因リ

テ一个年以上其占有ヲ奪ハレタルトキハ自然ノ中斷アリ

占有ヲ取戻シタルトキハ時効ハ更ニ進行ス

若シ不可抗力ニ因リテ占有ヲ奪ハレタルトキハ自然ノ中斷ナシ

第一百七條 自然ノ中斷ハ各利害關係人ノ爲メニ其効ヲ生ス

第一百八條 占有者カ或時間任意ニテ其占有ヲ止メシトキハ其占有不繼續ノ効力ハ第一百二十九條ニ於テ之ヲ規定ス

第一百九條 法定ノ中斷ハ左ノ諸件ヨリ生ス

第一 裁判上ノ請求

第二 勸解上ノ召喚又ハ任意出席

第三 執行文提示又ハ催告

第四 差押

第五 任意ノ追認

右ノ手續又ハ追認ノ行爲カ時効ノ爲メ害ヲ受クル者ノ權利ニ明カニ關係スルコトヲ要ス

第一百十條 法定ノ中斷ハ中斷ノ所爲ヲ行ヒタル者及ヒ其承繼人ノ爲メニ非サレハ其効ヲ生セズ

第一百十一條 本訴ト附帶訴ト反訴トヲ問ハス裁判上ノ請求ハ時効ヲ中斷ス但其請求カ方式ニ於テ無効タルトキ又ハ管轄違ノ裁判所ニ之ヲ爲シタルトキモ亦同シ

然レトモ右但書ノ場合ニ於テ中斷ハ初ノ請求ヲ棄却セシ判決アリタル時ヨリ二个

月内ニ更ニ合式ノ訴ヲ提起セサルニ於テハ之ヲ不成立ト看做ス

第一百十二條 中斷ハ左ノ場合ニ於テモ亦之ヲ不成立ト看做ス

第一 請求カ其基本ニ於テ棄却セラレタルトキ  
 第二 原告カ取下ヲ爲シタルトキ  
 第三 訴訟手續カ民事訴訟法ニ定メタル時間休止シテ無効ト爲リタルトキ  
 第三百十三條 裁判上ノ請求ヨリ生スル中斷ハ訴訟ノ提起ヨリ其判決ノ確定ト爲ルマテ繼續ス  
 第三百十四條 勸解上ノ召喚又ハ任意出席ニ因ル時効ノ中斷ハ主タル請求ハ勿論其反對ノ請求ヨリモ生ス  
 召喚ノ無効ハ方式ノ瑕疵ニ因ルモ管轄違ニ因ルモ中斷ヲ妨ケス但初ノ召喚ノ無効ト爲リタルヨリ一个月内ニ更ニ合式ノ召喚ヲ爲スコトヲ要ス  
 合式ノ召喚ノ上勸解不調ノ場合及ヒ被告ノ缺席ノ場合ニ於テ中斷ハ一个月内ニ裁判所ノ請求ヲ爲ササルトキハ之ヲ不成立ト看做ス  
 第三百十五條 執行文提示ヨリ生スル中斷ハ一个年内ニ差押ヲ爲ササルトキハ之ヲ不成立ト看做ス  
 右ノ中斷ハ方式ノ瑕疵ニ因リテ其提示ノ無効ナルトキト雖モ尙ホ成立ス但催告ヨリ生スル中斷ノ爲メ下ニ定メタル條件ヲ履行スルコトヲ要ス  
 第三百十六條 義務履行ノ催告ハ義務ノ目的、原因及ヒ債務者ヲ明カニ指示シ且六个月内ニ裁判上又ハ勸解上ノ請求ヲ爲シタルトキニ非サレハ時効ヲ中斷セス  
 第三百十七條 差押ヨリ生スル中斷ハ其差押ノ手續合式ニ終結マテ繼續シタルニ非サレハ其効力ヲ存續セス  
 假差押ハ裁判所ノ定メタル期間ニ裁判上ノ請求ヲ爲シタルニ非サレハ時効ヲ中斷セス時効ノ利益ヲ受クル者ニ對シテ差押ヲ爲ササルトキハ其差押ハ此者ニ告知シ

タル後ニ非サレハ之ニ對シテ中斷ノ効力ヲ有セス  
 第三百十八條 任意ノ追認ヨリ生スル時効ノ中斷ハ裁判上ヨリ又ハ口頭タルト書面タルトテ問ハス裁判外ノ行爲ヨリ生スルコトヲ得  
 裁判上ノ追認ハ自發ナルコト有リ又ハ判事ノ訊問ヨリ生スルコト有リ  
 第三百十九條 追認ハ明示又ハ默示ナルコトヲ得  
 占有者カ占有物ニ關スル果實又ハ賠償ノ要求ニ承服スルトキ又ハ之ニ反シテ占有者カ物ニ付キ爲シタル必要若クハ有益ノ費用ノ爲メ賠償ヲ要求スルトキハ殊ニ取得時効ニ對スル默示ノ追認アリトス  
 債務者カ利息又ハ債務ノ辨濟ノ請求ニ承服スルトキ又ハ之ニ反シテ債務者カ提供ヲ爲シ若クハ恩惠期限ノ請求ヲ爲ストキハ殊ニ免責時効ニ對スル默示ノ追認アリトス  
 第三百二十條 眞ノ所有者ノ權利ヲ追認シタル占有者ハ其所有者及ヒ其承繼人ニ對シ新時効ヲ再ヒ始ムル權利ヲ失ハス然レトモ占有者ハ最早其以前ノ善意ノ利益ヲ援用スルコトヲ得ス  
 若シ其占有者カ容假ノ占有者ト爲リタルトキハ將來ニ向ヒ何人ニ對シテモ時効ノ利益ヲ失フ但財産編第八十五條第二項及ヒ第三項ノ場合ノ適用ヲ妨ケス  
 第三百二十一條 追認ニ因リテ中斷シタル免責時効ハ即時更ニ進行ス然レトモ其時効ハ最初短期ノモノタリシトキト雖モ將來ニ向ヒテハ長期時効ノ期間ニ從フ  
 第三百二十二條 時効ヲ中斷スル追認ハ自己ノ財産ヲ管理スル能力又ハ時効ニ罹ルコト有ル可キ財産ヲ他人ノ爲メニ管理スル權力ヲ有スル者ニ於テ之ヲ爲シタルトキハ有効ナリ

然レトモ婦、無能力者又ハ委任者ノ利益ニ於ケル不動産ノ取得時効ヲ中斷スル爲メ夫、後見人又ハ代理人ノ爲シタル追認ハ不動産ノ請求ニ承服スル一般又ハ特別ノ權力アルニ非サレハ有効ナラス

第二百二十三條 時効ヲ中斷スル追認ノ所爲ニ付キ争アルトキハ通常ノ證據方法ヲ以テ之ヲ證スルコトヲ得

第二百二十四條 保證、連帶及ヒ不可分ノ場合ニ於テ各利害關係人ニ對スル追認其他ノ方法ニ因ル時効中斷ノ効力ハ債權擔保編第二十七條、第六十一條、第八十一條及ヒ第八十九條ニ於テ之ヲ規定ス

第四章 時効ノ停止

第二百二十五條 權利ノ行使カ權利上又ハ恩惠上ノ確定若クハ不確定ノ期限ニ服シ又ハ其發生カ停止條件ニ繫ルトキハ其期間ノ滿了又ハ條件ノ成就ノ時ニ非サレハ時効ハ進行ヲ始メス

第二百二十六條 時効ハ物權又ハ人權ニシテ其成立、廣狹又ハ行使カ相續ニ繫ルモノニ對シテハ其相續後ニ非サレハ進行ヲ始メス

第二百二十七條 遺言又ハ前主ノ合意ニ對シ相續人ニ屬スル銷除訴權又ハ抗辯ノ時効ハ其遺言又ハ合意ヲ相續人ニ對シテ援用シ又ハ其相續人ヲ害スル權利行使ノ基礎トシテ用サタル後ニ非サレハ進行ヲ始メス

第二百二十八條 上ノ場合ニ於テ時効ハ第三所持者ニ對シテ停止セス但所有權ノ取得時効又ハ抵當ノ消滅時効ヲ中斷セント欲スル利害關係人ニ於テ自己ノ未定ノ權利ノ追認證書ヲ得ント請求スルコト又ハ裁判上其權利ヲ單ニ追認セシムルコトヲ妨ケス

第二百二十九條 時効カ其進行中ニ停止セララルトキハ既ニ經過シタル時間ハ其時効ノ更ニ進行ヲ始ムル時ニ之ヲ通算ス

第二百三十條 時効ハ法律ニ定メタル人ノ利益ニ於ケルニ非サレハ停止セス

第二百三十一條 期間五個年以下ノ時効ハ成年者ニ對スル如ク未成年者及ヒ禁治產者ニ對シテ進行ス但後見人カ此等ノ者ノ權利ヲ行フコトヲ怠リ又ハ正當ノ原因ナクシテ此權利ヲ覺知セサル場合ニ於テハ此等ノ者ヨリ其後見人ニ對スル求償權ヲ妨ケス

五個年ヲ超ユル時効ニ關シテハ其期間ハ成年ニ達シタル未成年者又ハ精神ノ回復シタル禁治產者ヲシテ常ニ其權利ヲ行フ猶豫ヲ得セシムル爲メ最後ノ一個年停止ス

第二百三十二條 時効ハ婦ニ對シ第三者ノ利益ニ於テ進行ス但夫カ婦ノ爲メニ管理スル財産ニ關シ其夫ノ方ニ懈怠アル場合ニ於テハ婦ヨリ夫ニ對スル求償權ヲ妨ケス然レトモ法律ニ規定シタル場合ニ於テハ時効ハ婦ノ爲メ最後ノ一個年停止ス

第二百三十三條 前二條ノ規定ハ無能力者自身ニテ爲シタル行爲ノ銷除訴權ノ時効停止ニ關シ財産編第五百四十五條及ヒ第五百四十六條ニ定メタルモノヲ妨ケス

第二百三十四條 配偶者ノ一人ヨリ他ノ一人ニ對シテ行フ可キ權利ニ關シテハ婚姻中ト雖モ時効ハ進行ス

然レトモ其時効ハ最後ノ一個年停止ス又一個年以下ノ時効ニ關シテハ其最後ノ半期間停止ス

第二百四十四條ノ場合ニ於テハ動產回復ノ期間ハ三個月トス

第二百三十五條 時効ハ財産ノ管理人ト其管理ヲ受クル者トノ間ニ於テ其保存スルコ

トヲ任セラレタル權利ニ付テハ管理人ノ爲メニ停止ス  
時効ハ管理カ止ミシ以後ニ非サレハ更ニ進行セス又第四百四十四條ノ場合ニ於ケル  
動産ノ時効ニ關シテハ三個月ヲ以テスルニ非サレハ成就セス

第三百三十六條 上ニ定メサル場合ニ於テ時効ノ期間ノ滿了スル時ニ當リ有權者カ交  
通ノ塞カリタルニ因リ又ハ地方ノ裁判事務ノ停止セラレタルニ因リテ其權利ノ効  
用ヲ致サシメ又ハ時効ヲ中斷スル爲メ手續ヲ爲スコト能ハサリシ時ハ有權者其妨  
碍ノ止ム後直チニ請求ヲ爲スニ於テハ其失權ヲ免カルコトヲ得  
右ノ規定ハ陸海軍人カ戰亂ノ時ニ於テ服役ノ爲メ其權利ヲ行フコトヲ妨ケラレタ  
ル場合ニ於テハ其利益ノ爲メ之ヲ適用ス

第三百三十七條 物權又ハ人權ノ不可分ヨリ生スル時効ノ停止ハ財産編第二百九十一  
條、第四百四十六條及ヒ債權擔保編第八十九條第二項ニ於テ之ヲ規定ス

第五章 不動産ノ取得時効

第三百三十八條 不動産ノ取得時効ニ付テハ所有者ノ名義ニテ占有シ其占有ハ繼續シ  
テ中斷ナク且平穩、公然ニシテ下ニ定メタル繼續期間アルコトヲ要ス  
財産編第八十三條及ヒ第八十五條ニ定メタル如キ強暴、隱密又ハ容假ノ占有  
ハ時効ヲ生セス

第三百三十九條 占有者カ時効ニ因リテ取得セントスル物ニ付キ或ル長キ時間所有者  
ノ行爲ヲ爲スコトヲ任意ニテ止メシトキハ其占有ハ不繼續ニシテ時効ヲ生セス  
占有者カ再ヒ所有者ノ行爲ヲ爲スコトキハ其以前ノ占有ノ時間ハ占有者ノ爲メニ之  
ヲ算セス

第四百四十條 占有カ上ニ定メタル條件ノ外財産編第八十一條ニ記載シタル如キ

正權原ニ基因シ且財産編第八十二條ニ從ヒテ善意ナルトキハ占有者ハ不動産ノ  
所在地ト時効ノ爲メ害ヲ受クル者ノ住所又ハ居所トノ間ノ距離ヲ區別セス十五個  
年ヲ以テ時効ヲ取得ス

占有者カ正權原ヲ證スルコトヲ得ス又ハ之ヲ證スルモ財産編第八十七條ニ規定  
シタル如ク其惡意カ證セラレタルトキハ取得時効ノ期間ハ三十年トス

第四百四十一條 性質上登記ヲ爲ス可キ正權原ニ基因シタル時効ハ其證書ニ依リ登記  
ヲ爲シタル後ニ非サレハ之ヲ算セス

第四百四十二條 方式上無効タリ又ハ裁判上取消サレタル權原ハ時効ノ爲メニ有益ナ  
ラス

第四百四十三條 前主ノ占有ヲ其相續人及ヒ包括若クハ特定ノ承繼人ノ占有ニ併合シ  
又ハ繼續スルコトハ財産編第九十二條ニ於テ之ヲ規定ス

第六章 動産ノ取得時効

第四百四十四條 正權原且善意ニテ有體動産物ノ占有ヲ取得スル者ハ即時ニ時効ノ利  
益ヲ得但第三百三十四條及ヒ第三百三十五條ニ記載シタルモノヲ妨ケス

此場合ニ於テ反對カ證セラレサルトキハ占有者ハ正權原且善意ニテ占有スルモノ  
トノ推定ヲ受ク

第四百四十五條 動産物ノ占有者カ正權原ヲ有シ且善意ナル場合ニ於テモ其物カ所有  
者ノ盜取セラレタルモノ又ハ遺失シタルモノナルトキハ其所有者ハ盜難又ハ遺失  
ノ時ヨリ二個年間ハ占有者ニ對シテ其物ノ回復ヲ請求スルコト得但占有者カ其物  
ヲ有價ニテ受ケタルトキハ其讓渡人ニ對スル求償ヲ妨ケス  
皆信ニ因リテ隱匿シ又ハ詐欺ヲ以テ得タル物ニハ本條ヲ適用セスシテ前條ノ規定

ニ從フ

第四百十六條 盜取セラレ又ハ遺失シタル物ヲ競賣又ハ公ノ市場ニ於テ又ハ此類ノ物ノ商人若クハ古物商人ヨリ善意ニテ買受ケタル者アルトキハ所有者ハ其買受代價ヲ辨償スルニ非サレハ回復ヲ爲スコトヲ得ス

此場合ニ於テハ右ノ代價ニ付キ所有者ハ賣主ニ對シ又賣主ハ讓渡人ニ對シテ求償權ヲ有シ終ニ盜取者又ハ拾得者ニ遡ル

第四百十七條 無記名債權證書ヲ盜取セラレ又ハ遺失シタル場合ニ於テ其證書回復ノ期間及ヒ條件ハ特別ノ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第四百十八條 上ノ場合ニ於テ回復者カ占有ノ無權原タリ又ハ惡意タルコトヲ證スルトキハ時効ハ三十年ヲ經過スルニ非サレハ成就セス

第四百十九條 上ノ規定ハ用方ニ因リテ不動産ト爲リタル動産カ其附著シタル不動産ヨリ分離セラレタル場合ニ於テハ其動産ニ之ヲ適用ス

上ノ規定ハ財産編第十二條ニ從ヒ用方ニ因ル動産ニ之ヲ適用セス但其物カ土地ヨリ分離シタルトキハ此限ニ在ラス

又上ノ規定ハ記名債權ニモ包括動産ニモ之ヲ適用セス但此等ノ物ニ關スル時効ノ期間ハ第三百三十八條以下ニ記載シタル區別ニ從ヒ不動産ニ關スルモノト同一ナリ

第七章 免責時効

第五百十條 義務ノ免責時効ハ債權者カ其權利ヲ行フコトヲ得ヘキ時ヨリ三十個年間之ヲ行ハサルニ因リテ成就ス但法律上別段短キ期間ヲ定メ又ハ債權者時効ニ懼ラサルモノト定メタルトキハ此限ニ在ラス

第五百十一條 債務ノ元本カ年賦ニテ辨濟ス可キモノタルトキハ利息ヲ包含スルト

否トテ問ハス時効ハ各年賦ノ要求期ニ達シタル時ヨリ各別ニ之ヲ算ス

第五百十二條 債權カ無期又ハ終身ノ年金權ナルトキト雖モ其時効ハ證書ノ日附ヨリ三十個年ヲ以テ成就ス

然レトモ右ノ日附ヨリ二十八个年ノ後ニ至リ債權者ハ債務者ニ對シ時効ヲ中斷スル爲メ双方ノ費用ヲ以テ其權利ノ追認證書ヲ得ント要求スルコトヲ得

若シ債務者右ノ要求ヲ拒絕シ債權者裁判上自己ノ權利ヲ追認セシムル必要アルトキハ其費用ハ全ク債務者ノ負擔タリ

第五百十三條 動産質又ハ不動産質ノ返還ヲ得ル爲メノ對人訴權ハ適法ナル方法ニ因リテ債務ノ消滅シタル後ニ非サレハ時効ニ罹ラス

第八章 特別ノ時効

第五百十四條 入ノ身分ニ關スル訴權ハ法律カ其行使ヲ特別ノ期間ニ繋ラシムル場合ニ非サレハ時効ニ罹ラス

第五百十五條 相續人又ハ包括權原ノ受遺者若クハ受贈者ノ分限ヲシテ効用ヲ致サシムル爲メノ遺産請求ノ訴權ハ相續人又ハ包括權原ノ受贈者若クハ受遺者ノ權原ニテ占有スル者ニ對シテハ相續ノ時ヨリ三十個年ヲ經過スルニ非サレハ時効ニ罹ラス

第五百十六條 免責時効ハ左ニ掲グル諸件ノ辨濟ノ訴權ニ對シテハ五個年トス

- 第一 明確ナル金額ノ填補又ハ遅延ノ利息
- 第二 無期又ハ終身ノ年金權ノ年金
- 第三 養料又ハ恩給ノ一期ノ支拂金
- 第四 借家賃又ハ借地賃



第五 果實又ハ日用品ノ毎期ノ給與額

第六 教師、番頭、手代、使用人、乳母其他ノ雇人ノ謝金又ハ給料ニシテ一个年毎ニ定メラレタルモノ

此他一般ニ一个年毎ニ又ハ更ニ短キ時期ヲ以テ定メタル金額又ハ有價物ニ係ル債務ニ付テモ亦同シ但其辨濟ノ方法如何ニ拘ハラス且下ニ規定シタル場合ハ此限ニ在ラス

第百五十七條 時効ハ左ノ訴權ニ對シテハ三ヶ年トス

第一 醫師、産婆、藥劑者ノ治術、世話及ヒ調劑ニ關スル其訴權

第二 前條第六號ニ指定シタル教師、使用人其他ノ者ノ謝金又ハ給料カ一个年ヨリ短ク一个月ヨリ長キ時期ヲ以テ定メラレタル場合ニ於テハ其訴權

第三 技師、工匠、測量師、製圖師ノ經畫、意見及ヒ工事ニ關スル訴權

第四 不動産ニ關スル築造、地均其他ノ工作ニ付テノ請負人ノ訴權

第百五十八條 公證人、辯護士、執達吏其他ノ公吏カ職務ニ關シテ受ク可キモノニ付テノ其訴權ニ對スル時効ハ二ヶ年トス

此場合ニ於テ時効ハ右各人ノ債權ヲ生セシメタル行爲又ハ訴訟ノ終了後ニ非サレハ進行ヲ始メス

然レトモ終了セサル事件ニ關シテハ右各人ハ五ヶ年餘ニ遡ル行爲ノ爲メニ謝金ヲ要求スルコトヲ得ス

此規定ハ右各人カ其職務ノ爲メニ爲シタル立替金及ヒ支出金ニ之ヲ適用ス

第百五十九條 時効ハ左ノ訴權ニ對シテハ一个年トス

第一 非商人ニ爲シタル供給ニ關スル日用品、衣服其他動産物ノ卸賣商人又ハ

小賣商人ノ訴權但商人又ハ工業人ニ爲シタル供給ト雖モ其者ノ商業又ハ工業ニ關セサル場合ニ於テハ亦同シ

第二 右ノ區別ヲ以テ注文者ノ材料又ハ動産物ニ付キ仕事ヲ爲ス居職ノ職工又ハ製造人ノ訴權

第三 生徒又ハ習業者ノ教育、衣食及ヒ止宿ノ代料ニ關スル校長、塾主、師匠又ハ親方ノ訴權

第百六十條 時効ハ左ノ訴權ニ對シテハ六ヶ月トス

第一 第百五十六條第六號及ヒ第百五十七條第二號ニ指定シタル教師、使用人其他ノ者ノ謝金又ハ給料カ一个月又ハ更ニ短キ時期ヲ以テ定メラレタル場合ニ於テハ其訴權

第二 旅店又ハ料理店ノ主人ヨリ供給シタル宿泊料、飲食料及ヒ消費物ニ關スル其訴權

第三 日雇、月雇ノ職工又ハ勞力者ノ給料及ヒ其仕事ニ際シ此等ノ者ノ爲シタル些少ノ供給ニ關スル訴權

第百六十一條 前五條ニ規定シタル時効ハ現實ニ辨濟セサリシコトヲ自白シタル債務者之ヲ援用スルコトヲ得ス

第百六十二條 裁判所書記、辯護士ハ裁判ノ時ヨリ公證人ハ證書調製ノ時ヨリ執達吏ハ其職務執行ノ時ヨリ三ヶ年後ハ其職務ノ事件ニ關シテ交付セラレタル書類ニ付キ責任ヲ免カレ其書類返還ノ證ヲ提示スル義務ヲ免除セラル

第百六十三條 本章ニ規定シタル時効ハ當事者ノ間ニ明確ナル計算書、數額ヲ記載シタル債務ノ追認書又ハ債務者ニ對スル判決書アルトキハ之ヲ適用スルコトヲ得

ス此場合ニ於テハ時効ハ三十年トス  
附則

第六十四條 本法實施ノ當時ニ於テ進行中ナル時効ハ上ニ定メタル條件、禁止、中斷及ヒ停止ニ從フ  
其期間ニ關シテハ舊時効カ新時効ヨリ一層長キ期間ヲ要スル場合ニ於テハ占有者又ハ債務者ハ本法實施ノ時ヨリ算シテ舊時効ノ經過ス可キ殘期カ新時効ノ期間ヨリ短キトキハ舊時効ヲ利スルコトヲ得  
新時効ヨリ一層短キ期間ノ舊時効ニ關シテハ其期間ハ本法ニ定メタルモノニ等シキ期間ニ達スル様之ヲ延長ス可シ

民法人事編目錄

- 第一章 私權ノ享有及ヒ行使
- 第二章 國民分限
  - 第一節 國民分限ノ取得
  - 第二節 國民分限ノ喪失及ヒ回復
  - 第三節 國民分限變更ノ方式及ヒ効力
- 第三章 親屬及ヒ姻屬
- 第四章 婚姻
  - 第一節 婚姻ヲ爲スニ必要ナル條件
  - 第二節 婚姻ノ儀式
  - 第三節 日本人外國ニ於テ爲シ及ヒ外國人日本ニ於テ爲ス婚姻

●民法△人事編

- 第四節 婚姻ノ成立ノ證據
- 第五節 婚姻ノ不成立及ヒ無効
- 第六節 婚姻ノ効力
- 第七節 罰則
- 第五章 離婚
  - 第一節 協議ノ離婚
  - 第二節 特定原因ノ離婚
    - 第一款 離婚及ヒ不受理ノ原因
    - 第二款 假處分
    - 第三款 離婚ノ訴
  - 第三節 離婚ノ効力
- 第六章 親子
  - 第一節 親子ノ分限ノ證據
  - 第二節 否認訴權
  - 第三節 庶子及ヒ私生子ノ適出子ト爲ル權
- 第七章 養子縁組
  - 第一節 養子縁組ニ必要ナル條件
  - 第二節 養子縁組ノ儀式
  - 第三節 養子縁組ノ證據
  - 第四節 養子縁組ノ不成立及ヒ無効
  - 第五節 養子縁組ノ効力

- 第六節 罰則
- 第八章 養子ノ離縁
  - 第一節 協議ノ離縁
  - 第二節 特定原因ノ離縁
  - 第三節 離縁ノ効力
- 第九章 親權
  - 第一節 子ノ身上ニ對スル權
  - 第二節 子ノ財産ノ管理
  - 第三節 嫡母、繼父及ヒ繼母ニ特別ナル規則
- 第十章 後見
  - 總則
  - 第一節 後見人
  - 第二節 後見監督人
  - 第三節 親族會
  - 第四節 後見ノ免除
  - 第五節 後見人及ヒ親族會員ノ缺格、除斥及ヒ罷黜
  - 第六節 後見人ノ管理
  - 第七節 後見監督人ノ任務
  - 第八節 後見ノ終了
  - 第九節 後見ノ計算
  - 第十一章 自治産

- 第十二章 禁治産
  - 第一節 民事上禁治産
  - 第二節 准禁治産
  - 第三節 刑事上禁治産
  - 第四節 瘋癲者ノ財産ノ假管理
- 第十三章 戸主及ヒ家族
- 第十四章 住所
- 第十五章 失踪
  - 第一節 失踪ノ推定
  - 第二節 失踪ノ宣言
  - 第三節 失踪宣言ノ効力
  - 第四節 失踪ノ推定及ヒ宣言ニ關スル通則
  - 第五節 不在者ニ關スル規則
- 第十六章 身分ニ關スル證書

民法

人事編

- 第一章 私權ノ享有及ヒ行使
  - 第一條 凡ソ人ハ私權ヲ享有シ法律ニ定メタル無能力者ニ非サル限りハ自ラ其私權ヲ行使スルコトヲ得
  - 第二條 胎内ノ子ト雖モ其利益ヲ保護スルニ付テハ既ニ生マレタル者ト看做ス
  - 第三條 私權ノ行使ニ關スル成年ハ滿二十年トス但法律ニ特別ノ規定アルトキハ此

限ニ在ラス

第四條 外國人ハ法律又ハ條約ニ禁止アルモノヲ除ク外私權ヲ享有ス

第五條 法人ハ公私法問ハス法律ノ認許スルニ非サレハ成立スルコトヲ得ス又法律ノ規定ニ從フニ非サレハ私權ヲ享有スルコトヲ得ス

第六條 法律ハ外國法人ノ成立ヲ認許セス但條約又ハ特許アルトキハ此限ニ在ラス成立ノ認許ヲ得タル外國法人ハ日本ニ成立スル同種ノ者ト同一ノ私權ヲ享有ス但條約中又ハ特許中ニ其權利ヲ制限シタルトキハ此限ニ在ラス

第二章 國民分限

第一節 國民分限ノ取得

第七條 日本人ノ子ハ外國ニ於テ生マレタルトキト雖モ日本人トス

父母分限ヲ異ニスルトキハ父ノ分限ヲ以テ子ノ分限ヲ定ム  
父ノ知レサルトキハ子ハ母ノ分限ニ從フ  
父母共ニ知レサルトキハ日本ニ於テ生マレタル子ハ日本人トス若シ其出生地ノ知レサルトキハ現ニ日本國內ニ在ル者ハ日本人トス

第八條 左ノ場合中ノ一ニ在ル子ハ日本人ノ分限ヲ選擇スルコトヲ得  
第一 父カ外國人タルモ母ノ日本人タルトキ  
第二 外國人ノ子タルモ日本ニ生マレタルトキ  
第三 日本人ノ分限ヲ失ヒタル者ノ子ニシテ其分限喪失ノ後ニ生マレタル者ナルトキ

第四 歸化人ノ子ニシテ成年者ナルトキ

第九條 日本人ノ分限ヲ選擇セント欲スル子ハ本國法律ニ從ヒテ成年ニ至リシ時ヨ

リ一个年内ニ其意思ヲ申述シ且其申述ヨリ一个年内ニ住所ヲ日本ニ定ム可シ  
成年ノ後ニ至リテ外國人ノ認知シタル私出子ハ認知ヨリ又歸化人ノ子ハ歸化ヨリ  
一个年内ニ右ノ申述ヲ爲スコトヲ得

第十條 日本人ト婚姻スル外國ノ女ハ日本人ノ分限ヲ取得シ婚姻解消ノ後ト雖モ其分限ヲ保有ス

第十一條 外國人ハ歸化ニ因リテ日本人ノ分限ヲ取得スルコトヲ得其條件及ヒ方式ハ特別法ヲ以テ之ヲ規定ス

歸化人ノ婦及ヒ未成年ノ子ハ日本ニ住居ヲ定メタルトキハ日本人ノ分限ヲ取得ス

第十二條 國民分限ノ喪失及ヒ回復  
第一 任意ニ外國人ノ分限ヲ取得シタルトキ  
第二 日本政府ノ允許ナクシテ外國政府ノ官職ヲ受ケ又ハ外國ノ軍隊ニ入りタルトキ

第十三條 前條ノ場合ニ於テ日本人ノ分限ヲ失ヒタル者其分限ヲ回復セント欲スルトキハ日本政府ノ允許ヲ得タル上歸國シテ其意思ヲ申述シ且一个年内ニ住所ヲ日本ニ定ムルトキハ其分限ヲ回復ス

第十四條 日本人ノ分限ヲ失ヒタル者ノ婦及ヒ未成年ノ子ハ引續キ日本ニ住居スルニ非サレハ日本人ノ分限ヲ失フ但婦ハ第十五條第二項ノ規定ニ從ヒ又未成年ノ子ハ第九條第一項ノ規定ニ從ヒ其分限ヲ回復スルコトヲ得

第十五條 外國人ト婚姻スル日本ノ女ハ日本人ノ分限ヲ失フ  
然レトモ婚姻解消ノ後日本ニ住居シ又ハ復歸シ且日本ニ住所ヲ定ムルコトヲ申述

スルトキハ其分限ヲ回復ス

第三節 國民分限變更ノ方式及ヒ効力

第十六條 國民分限ノ變更ニ關スル申述ハ日本ニ在リテハ住居地ノ身分取扱吏ニ外國ニ在リテハ日本公使館又ハ日本領事館ニ之ヲ爲ス可シ

此申述ハ部理代理人ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第十七條 國民分限ノ變更ハ將來ニ非サレハ其効力ヲ生セス

第十八條 國民分限ハ出生ノ時ヲ以テ之ヲ定ム然レトモ懷胎ヨリ出生マテノ間父又ハ母ノ分限ニ變更アリタルトキハ子ハ日本ニ住居スル場合ニ限り日本人ノ分限ヲ保有ス

第三章 親屬及ヒ姻屬

第十九條 親屬トハ血統ノ相聯結スル者ノ關係ヲ謂フ

六親等ノ外ハ親屬ノ關係アルモ民法上ノ効力ヲ生セス

第二十條 親屬ノ遠近ハ世數ヲ以テ之ヲ定メ一世ヲ以テ一親等トス

親等ノ連續スルヲ親系ト爲ス彼ヨリ此ニ直下スル者ノ親系ヲ直系ト謂ヒ其直下セ

スシテ同始祖ニ出ツル者ノ親系ヲ傍系ト謂フ

直系ニ於テ自己ノ出ツル所ノ親族ヲ尊屬親ト謂ヒ自己ヨリ出ツル所ノ親屬ヲ卑屬

親ト謂フ

第二十一條 直系ニ於テハ親族ノ世數ヲ算シテ親等ヲ定ム

傍系ニ於テハ親族ノ一人ヨリ同始祖ニ遡リ又其始祖ヨリ他ノ一人ニ下タル其間ノ

世數ヲ算シテ親等ヲ定ム

第二十二條 養子縁組ハ養子ト養父母及ヒ其親族トノ間ニ親屬ニ同シキ關係ヲ生ス

但養子トハ男女ヲ總稱ス

第二十三條 嫡母、繼父又ハ繼母ト其配偶者ノ子トノ關係ハ親子ニ準ス

第二十四條 姻屬トハ婚姻ニ因リテ夫婦ノ一方ト其配偶者ノ親族トノ間ニ生スル關

係ヲ謂フ

然レトモ婦ノ夫家ニ於ケル又夫ノ婦家ニ於ケル尊屬親トノ關係ハ親屬ニ準ス

第二十五條 夫婦ノ一方ノ親族ハ其親系及ヒ親等ニ於テ配偶者ノ姻族トス

姻屬ノ關係ハ婚姻無効ノ判決又ハ離婚ニ因リテ止ム又生存配偶者其家ヲ去ルニ因

リテ止ム

第二十六條 直系ノ親族ハ相互ニ養料ヲ給スル義務ヲ負擔ス

嫡母、繼父又ハ繼母ト其配偶者ノ子トノ間及ヒ婦又ハ夫ト夫家又ハ婦家ノ尊屬

親トノ間モ亦同シ

第二十七條 兄弟姉妹ノ間ニハ疾病其他本人ノ責ニ歸セサル事故ニ因リテ自ラ生活

スル能ハサル場合ニ限り相互ニ養料ヲ給スル義務アリ

第二十八條 養料ノ義務ヲ負擔ス可キ者ノ順位ハ左ノ如シ

第一 第二十六條ニ掲ケタル者

第二 兄弟姉妹

直系ノ親族ノ間ハ其親等ノ最モ近キ者養料ノ義務ヲ負擔ス

第二十九條 養料ハ之ヲ受ク可キ者ノ必需ト之ヲ給ス可キ者ノ資産トニ應シテ其額

ヲ定ム

第四章 婚姻

第一節 婚姻ヲ爲スニ必要ナル條件

第三十條 男ハ滿十七年女ハ滿十五年ニ至ラサレハ婚姻ヲ爲スコトヲ得ス

第三十一條 配偶者アル者ハ重子テ婚姻ヲ爲スコトヲ得ス

第三十二條 夫ノ失踪ニ原因スル離婚ノ場合ヲ除ク外女ハ前婚解消ノ後六個月内ニ再婚ヲ爲スコトヲ得ス

此制禁ハ其分婉シタル日ヨリ止ム

第三十三條 姦通ノ原因ニ由リテ離婚ノ裁判ヲ言渡サレタル曲者ハ相姦者ト婚姻ヲ爲スコトヲ得ス

第三十四條 直系ニ於テハ尊屬親ト卑屬親トノ間婚姻ヲ禁ス

第三十五條 傍系ニ於テハ兄弟姉妹及ヒ伯叔父姑甥姪ノ間婚姻ヲ禁ス

第三十六條 直系ノ姻族ノ間ハ其關係ノ止ミタル後ト雖モ婚姻ヲ禁ス

第三十七條 養子ト養父母又ハ其尊屬親トノ間及ヒ養父母又ハ其尊屬親ト養子ノ配偶者又ハ其卑屬親トノ間ハ離縁ノ後ト雖モ婚姻ヲ禁ス

第三十八條 子ハ父母ノ許諾ヲ受クルニ非サレハ婚姻ヲ爲スコトヲ得ス

父母ノ一方カ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ他ノ一方ノ許諾ヲ以テ足

ル 繼父又ハ繼母アル場合ニ於テ其配偶者タル母又ハ父ノ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ繼父又ハ繼母ノ許諾ヲ受ク可シ其許諾ニ付テハ第九章第三節ノ規定ヲ適用ス

第三十九條 父母共ニ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ其家ノ祖父母ノ許諾ヲ受ク可シ

祖父母ノ一方カ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ他ノ一方ノ許諾ヲ以テ

足ル

第四十條 父母、祖父母悉ク死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ滿二十年ニ至ラサル者ニ限り後見人ノ許諾ヲ受ク可シ

第四十一條 父母ノ知レサル子ハ二十年未滿ニ限り後見人ノ許諾ヲ受ク可シ

第四十二條 育兒院ニ在リテ父母ノ知レサル子ノ婚姻ハ二十年未滿ニ限り院長ノ許諾ヲ受ク可シ

第二節 婚姻ノ儀式

第四十三條 婚姻ノ儀式ハ當事者ノ一方ノ住所又ハ居所ノ地ニ於テ之ヲ行フ可シ

雙方ハ婚姻ノ儀式ヲ行フ前ニ其地ノ身分取扱吏ニ婚姻ヲ爲サントスル申出ヲ爲スコトヲ要ス但此申出ハ代理人ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第四十四條 雙方ハ前條ノ申出ヲ爲ス時ニ於テ左ノ書類ヲ差出タス可シ

第一 出生證書

第二 前婚ノ解消ヲ證スル證書

第三 婚姻ニ必要ナル許諾書又ハ其許諾ヲ得ル能ハサル事由ヲ證スル書類

第四十五條 雙方又ハ一方カ出生證書ヲ呈示スル能ハサルトキハ出生地、住所又ハ居所ノ區裁判所ノ授付シタル保證書ヲ以テ出生證書ニ代用スルコトヲ得

保證書ハ男女ヲ問ハス又親族ト否トヲ問ハス證人二人カ左ノ諸件ニ付キ區裁判所ニ爲シタル申述ヲ記載ス

第一 本人ノ氏名、職業、住所又ヒ居所並ニ其父母分明ナルトキハ其氏名、職業、住所及ヒ居所

第二 本人ノ出生ノ地及ヒ年月日

民法△人事編

三百四十九

第三 本人ノ出生證書ヲ呈示スル能ハサル原因及ヒ證人ノ其事實ヲ聞知シタル  
緣由

第四十六條 身分取扱吏ハ婚姻ノ儀式ヲ行フ障礙ト爲ル可キ法律上ノ原因アルコト  
ヲ知リタルトキハ其儀式ヲ行フコトヲ差止ム可シ

此場合ニ於テハ身分取扱吏ハ理由ヲ記シタル差止書ヲ授付ス可シ  
當事者此差止ヲ不當ナリト思料スルトキハ區裁判所ニ抗告シテ其取消ヲ求ムルコ  
トヲ得

裁判所ハ休暇事件ト同シク之ヲ取扱フ可シ

第四十七條 婚姻ハ證人二人ノ立會ヲ得テ慣習ニ從ヒ其儀式ヲ行フニ因リテ成ル  
當事者ノ承諾ハ此儀式ヲ行フニ因リテ成立ス

第四十八條 婚姻ノ儀式ハ其申出ノ日ヨリ三日後三十日內ニ之ヲ行フコトヲ要ス  
第四十九條 婚姻ノ儀式ヲ行ヒタルトキハ雙方ヨリ十日內ニ身分取扱吏ニ其届出ヲ  
爲ス可シ但此届出ハ代理人ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第三節 日本人外國ニ於テ爲シ及ヒ外國人日本ニ於テ爲ス婚姻

第五十條 外國ニ於テ日本人ノ間又ハ日本人ト外國人トノ間ニ婚姻ヲ爲ストキハ  
其國ノ規則ニ從ヒテ儀式ヲ行フコトヲ得但本章第一節ニ定メタル條件ニ違背セザ  
ルコトヲ要ス

第五十一條 外國ニ於テ日本人ノ間ニ日本ノ規則ニ從ヒテ婚姻ヲ爲ストキハ其國ニ  
在ル日本公使館又ハ日本領事館ニ婚姻ノ申出ヲ爲スコトヲ要ス

婚姻ノ儀式ヲ行ヒタルトキハ第四十九條ノ規定ニ從ヒテ其届出ヲ爲スコトヲ得  
第五十二條 日本ニ於テ外國人カ婚姻ヲ爲サントスルトキハ其能力ハ本國ノ法律ニ

從フ但第三十一條乃至第三十七條ノ條件ニ違背セサルコトヲ要ス

外國人ハ婚姻ノ申出ヲ爲ス時ニ於テ婚姻ヲ爲スニ障礙ナキコトヲ證スル本國相當  
官署ノ認證書ヲ差出タス可シ

第四節 婚姻成立ノ證據

第五十三條 婚姻成立ノ證據ハ婚姻證書ヲ以テ之ヲ舉ク可シ但第二百九十一條ニ規  
定スルモノハ此限ニ在ラス

第五十四條 婚姻證書ヲ増減シ毀棄シ隱匿シ又ハ片紙ニ記載シタル場合ニ於テ刑事  
又ハ民事ノ訴訟ニ因リテ婚姻ノ成立ヲ認メタル判決ハ之ヲ婚姻證書ニ代用スルコ  
トヲ得

第五節 婚姻ノ不成立及ヒ無効

第五十五條 人違、喪心又ハ強暴ニ因リテ雙方又ハ一方ノ承諾ノ全ク欠缺シタル婚  
姻ハ不成立トス

第三十四條乃至第三十七條ノ規定ニ違ヒテ爲シタル婚姻モ亦不成立トス  
婚姻ノ不成立ハ何人ニ限ラス何時ニテモ之ヲ申立ツルコトヲ得

第五十六條 第三十條、第三十一條及ヒ第三十三條ノ規定ニ違ヒテ婚姻ヲ爲シタル  
トキハ雙方、尊屬親又ハ現實ノ利益ヲ有スル者ヨリ何時ニテモ其無効ヲ請求スル  
コトヲ得

右同一ノ場合ニ於テ檢事ハ夫婦ノ生存中ニ限り職權ヲ以テ婚姻ノ無効ヲ請求スル  
コトヲ得

第五十七條 不適齡ニ付キ無効ヲ請求スル權利ハ左ノ場合ニ於テ消滅ス

第一 適齡ナラサリシ者カ適齡ニ至レル後明示ニテ婚姻ヲ認諾シ又ハ三個月ヲ

過キタルトキ

第二 無効ノ請求後ト雖モ婦カ適齡ナラスシテ懐胎シタルトキ

第三 夫カ適齡ナラスシテ婦ノ懐胎シタルトキ但婦ノ姦通ヲ證スルトキハ格別ナリトス

第五十八條 重婚ニ原因スル婚姻無効ノ請求アリタル場合ニ於テ後婚ノ雙方カ前婚ノ不成立、無効又ハ離婚ヲ主張スルトキハ先ツ其裁判ヲ爲ス可シ

前婚ノ配偶者カ失踪シタルトキハ其失踪中ハ重婚ノ無効訴權ヲ行フコトヲ得ス

第五十九條 左ノ場合ニ於テハ婚姻ハ無効トス  
第一 身分取扱吏ニ婚姻ノ申出ヲ爲サス又ハ其差止ヲ受ケタルニ拘ハラズ儀式ヲ行ヒタルトキ

第二 身分取扱吏ノ管轄違ナルトキ

第三 第四十八條ノ規定ニ違ヒテ儀式ヲ行ヒタルトキ

第四 證人二人ノ立會ナクシテ儀式ヲ行ヒタルトキ

此無効ハ第五十六條ニ掲ケタル者ヨリ之ヲ請求スルコトヲ得但婚姻儀式後一箇年ヲ過キタルトキハ無効訴權ヲ行フコトヲ得ス

第六十條 第三十八條乃至第四十二條ニ定メタル許諾ナクシテ婚姻ヲ爲シタルトキハ其許諾ヲ與フ可キ者又ハ之ヲ受ク可キ者ヨリ其無効ヲ請求スルコトヲ得

許諾アリタル場合ト雖モ其許諾カ強暴ニ原因シタルトキモ亦同シ

第六十一條 前條ノ場合ニ於テ婚姻ノ許諾ヲ與フ可キ者カ婚姻ヲ認諾セスシテ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ法律ニ定メタル順位ニ從ヒテ其許諾ヲ與フ可キ者ハ無効訴權ヲ行フコトヲ得

第六十二條 第六十條ニ掲ケタル無効訴權ハ左ノ場合ニ於テ消滅ス

第一 婚姻ノ許諾ヲ與フ可キ者カ認諾ヲ爲シ又ハ婚姻アリタルコトヲ知リシ後三個月ヲ過キタルトキ

第二 三個月内ト雖モ許諾ヲ受ク可キ者カ婚姻上ノ成年ニ至リ又ハ死亡シタルトキ

第六十三條 強暴ニ因リテ承諾ニ瑕疵アル婚姻ノ無効ハ強暴ヲ受ケタル者ニ限り之ヲ請求スルコトヲ得

第六十四條 前條ノ場合ニ於テ配偶者強暴ヲ免カレタル後明示ニテ認諾シ又ハ三個月間引續キ同居シタルトキハ婚姻ノ無効ヲ請求スルコトヲ得ス其同居セサル場合ニ於テモ無効訴權ハ一箇年ヲ以テ消滅ス

第六十五條 裁判所ハ婚姻ノ不成立又ハ無効ノ訴訟中夫婦ノ一方ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ婦又ハ夫ニ住家ヲ去ル可キヲ命スルコトヲ得

第六十六條 無効ノ言渡アリタル婚姻ハ子ニ付テハ其出生ノ婚姻前後ナルヲ問ハズ法律上ノ効力ヲ生ス

第六節 婚姻ノ効力

第六十七條 婚姻ハ其儀式ヲ行ヒタル日ヨリ効力ヲ生ス但夫婦財産契約ニ付テハ婚姻ノ届出後ニ非サレハ第三者ニ對シテ婚姻ノ効力ヲ援用スルコトヲ得ス

第六十八條 婦ハ夫ノ許可ヲ得ルニ非サレハ贈與ヲ爲シ之ヲ受諾シ不動産ヲ讓渡シ之ヲ擔保ニ供シ借財ヲ爲シ債權ヲ讓渡シ之ヲ質入シ元本ヲ領收シ保證ヲ約シ及ヒ身體ニ羈絆ヲ受クル約束ヲ爲スコトヲ得ス又和解ヲ爲シ中裁ヲ受ケ及ヒ訴訟ヲ起スコトヲ得ス



第六十九條 夫ノ許可ハ特定又ハ總括ナルコトヲ得但總括ノ許可ハ證書ヲ以テ之ヲ與フルコトヲ要ス

夫ハ夫婦財產契約ニ依リテ與ヘタル總括ノ許可ト雖モ之ヲ廢罷スルコトヲ得

第七十條 左ノ場合ニ於テハ夫婦ハ夫ノ許可ヲ得ルコトヲ要セス  
第一 夫カ失踪ノ推定ヲ受ケタルトキ  
第二 夫カ禁治産又ハ准禁治産ヲ受ケタルトキ  
第三 夫カ癡癲ノ爲メ病院又ハ監置ニ在ルトキ

第七十一條 夫ハ婦ニ與ヘタル許可ニ因リテ義務ヲ負擔セス  
第七十二條 夫ノ許可ヲ得スシテ婦ノ爲シタル所爲ハ之ヲ銷除スルコトヲ得  
此銷除ハ夫婦ノ各自及ヒ婦ノ承繼人ニ非サレハ之ヲ請求スルコトヲ得ス

第七十三條 夫ニ屬スル銷除訴權ハ其銷除シ得ヘキ行爲ヲ知リタル日ヨリ五ヶ年ノ時効ニ因リ又ハ婚姻ノ解消ニ因リテ消滅ス  
婦及ヒ其承繼人ニ屬スル銷除訴權ハ婚姻解消ノ日ヨリ五ヶ年ノ時効ニ因リテ消滅ス  
財產編第五百四十四條以下ノ規定ハ本條ノ銷除訴權ニ之ヲ適用ス

第七節 罰則

第七十四條 婚姻申出ノ時ニ必要ノ書類ヲ差出タサシメサル身分取扱吏ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ過料ニ處ス

第七十五條 婚姻ノ不成立又ハ無効タル可キ法律上ノ原因アルヲ知リテ其儀式ヲ行フコトヲ差止メサル身分取扱吏ハ三圓以上三拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第七十六條 第三十二條ノ制禁ニ違背シテ再婚ヲ爲シタル婦ハ貳圓以上貳拾圓以下

ノ罰金ニ處ス其情ヲ知リテ婚姻ヲ爲シタル夫及ヒ婚姻ノ儀式ヲ行フコトヲ差止メサル身分取扱吏モ亦同シ

第七十七條 夫婦ノ一方ニシテ婚姻ノ無効ヲ致シタル原因ヲ知リ之ヲ他ノ一方ニ隱秘シタル者ハ三圓以上三拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第五章 離婚

第一節 協議ノ離婚

第七十八條 夫婦ハ下ニ定メタル條件及ヒ方式ニ從ヒ協議ヲ以テ離婚ヲ爲スコトヲ得

第七十九條 離婚セントスル夫婦ハ婚姻許諾ノ爲メ第四章第一節ニ定メタル規則ニ從ヒ各其父母、祖父母又ハ後見人ノ許諾ヲ受ケルコトヲ要ス

第八十條 夫婦ハ離婚協議書ニ左ノ書類ヲ添ヘテ身分取扱吏ニ届出ツ可シ

第一 婚姻證書

第二 離婚ノ許諾ヲ與フ可キ者ノ許諾書若シ其者死亡シ又ハ意思ヲ表スル能ハサルトキハ死亡證書又ハ其事由ヲ證スル書類

第二節 特定原因ノ離婚

第一款 離婚及ヒ不受理ノ原因

第八十一條 離婚ハ左ノ原因アルニ非サレハ之ヲ請求スルコトヲ得ス

第一 姦通但夫ノ姦通ハ刑ニ處セラレタル場合ニ限ル

第二 同居ニ堪ヘサル暴虐脅迫及ヒ重大ノ侮辱

第三 重罪ニ因レル處刑

第四 竊盜、詐欺取財又ハ猥褻ノ罪ニ因レル重禁錮一年以上ノ處刑

第五 惡意ノ遺棄

第六 失踪ノ宣言

第七 婦又ハ入夫ヨリ其家ノ尊屬親ニ對シ又ハ尊屬親ヨリ婦又ハ入夫ニ對スル  
暴虐、脅迫及ヒ重大ノ侮辱

第八十二條 離婚ノ請求ヲ爲ス一方ニ對シテ離婚ノ原因存スルトキハ他ノ一方モ反  
訴ヲ以テ離婚ヲ請求スルコトヲ得

然レトモ前條第三號及ヒ第四號ニ記載スル重罪又ハ輕罪ノ刑ニ處セラレタル一方  
ハ他ノ一方ノ處刑ヲ原因トシテ離婚ヲ請求スルコトヲ得ス

第二款 假處分

第八十三條 離婚ノ訴訟中子ノ監護ハ原告又ハ被告タルヲ問ハス夫ニ屬ス但入夫及  
ヒ婿養子ニ付テハ婦ニ屬ス

然レトモ裁判所ハ夫、婦、親族又ハ檢事ノ請求ニ因リ子ノ利益ヲ慮リテ其監護ヲ他  
ノ一方又ハ第三者ニ命スルコトヲ得

第八十四條 離婚ノ訴訟中婦ハ原告又ハ被告タルヲ問ハス裁判所ノ許可ヲ得テ住家  
ヲ去ルコトヲ得此場合ニ於テハ自己ノ衣服其他ノ日用物品ヲ持去リ且必要アルト  
キハ養料ヲ請求スルコトヲ得

裁判所ハ夫ノ意見ヲ聽キテ婦ノ移居ス可キ家屋ヲ指示スルコトヲ要ス若シ婦カ正  
當ノ理由ナクシテ其家屋ヲ去ルトキハ夫ハ養料ヲ拒ムコトヲ得

第八十五條 入夫及ヒ婿養子ニ付テハ裁判所ハ離婚ノ訴訟中夫ヲシテ住家ヲ去ラシ  
ムルコトヲ得此場合ニ於テハ前條第一項ノ規定ヲ適用ス

第八十六條 裁判所ハ住家ヲ去ル婦又ハ夫ノ請求ニ因リ其財産ヲ保存スル爲メニ必

要ナル處分ヲ命スルコトヲ得

第三款 離婚ノ訴

第八十七條 離婚ヲ請求スル訴權ハ夫婦ノミニ屬ス

第八十八條 離婚ノ原因ハ通常ノ證據方法ヲ以テ之ヲ證ス可シ但シ自白ノミヲ以テ  
之ヲ證スルコトヲ得又卑屬親ヲ除ク外親族姻族又ハ雇人ニ關スル忌避ノ規定ヲ  
適用セス

第三節 離婚ノ効力

第八十九條 離婚ハ其届出又ハ裁判確定ノ後ニ非サレハ効力ヲ生セス

第九十條 離婚ノ後子ノ監護ハ夫ニ屬ス但入夫及ヒ婿養子ニ付テハ婦ニ屬ス

然レトモ裁判所ハ夫、婦、親族又ハ檢事ノ請求ニ因リ子ノ利益ヲ慮リテ之ヲ他ノ一  
方又ハ第三者ノ監護ニ付スルコトヲ得

第六章 親子

第一節 親子ノ分限ノ證據

第九十一條 婚姻中ニ懐胎シタル子ハ夫ノ子トス

婚姻ノ儀式ヨリ百八十日後又ハ夫ノ死亡若クハ離婚ヨリ三百日內ニ生マレタル子  
ハ婚姻中ニ懐胎シタルモノト推定ス

第九十二條 嫡出子ハ出生證書ヲ以テ之ヲ證ス

第九十三條 出生證書ヲ呈示スル能ハサルトキハ親子ノ分限ハ嫡出子タル身分ノ占  
有ヲ以テ之ヲ證スルコトヲ得但第二百九十一條ノ規定ノ適用ヲ妨ケス

第九十四條 身分ノ占有トハ夫婦ト其婚姻ニ因リテ生マレタリト主張スル者トノ間  
其者ノ出生ノ時ヨリ親子ノ分限ヲ證スルニ足ル可キ事實ノ適合スルヲ謂フ其實

ノ著明ナルモノ左ノ如シ

- 第一 子ナリト主張スル者カ常ニ其父ナリトスル者ノ氏ヲ稱シタルコト
- 第二 子ナリト主張スル者カ常ニ其父母ナリトスル者ヨリ嫡出子ノ如ク取扱ハレ其養育、教育ヲ受ケタルコト
- 第三 子ナリト主張スル者カ常ニ親族及ヒ世上ニ於テ嫡出子ト認メラレタルコト

第九十五條 庶子ハ父ノ届出ニ基ク出生證書ヲ以テ之ヲ證ス但身分ノ占有ニ關スル規定ヲ適用ス

第九十六條 父ノ知レサル子ハ私生子トス

第九十七條 私生子ハ出生證書ヲ以テ之ヲ證ス但身分ノ占有ニ關スル規定ヲ適用ス

第九十八條 私生子ハ父之ヲ認知スルニ因リテ庶子ト爲ル

第九十九條 庶子ノ出生届及ヒ認知ハ父自ラ身分取扱吏ニ之ヲ爲スコトヲ要ス未成年者ト雖モ自ラ之ヲ爲スコトヲ得

第二節 否認訴權

第一百條 否認訴權ハ夫ノミニ屬ス但子ノ出生後ニ非サレハ之ヲ行フコトヲ得ス

第一百一條 夫カ民事上ノ禁治産ヲ受ケタルトキハ後見人又ハ後見監督人ハ親族會ノ許可ヲ得テ否認訴權ヲ行フコトヲ得

第一百二條 夫カ子ノ出生ノ場所ニ在ルトキハ出生ヨリ三個月ノ期間内ニ限り否認訴權ヲ行フコトヲ得但夫カ婦ト住家ヲ異ニシ又ハ婦カ子ノ出生ヲ夫ニ隠秘シタルトキハ此期間ハ子ノ出生ヲ知リタル日ヨリ起算ス

若シ夫カ遠隔ノ地ニ在ルトキハ訴權ノ期間ヲ四個月トシ子ノ出生ヲ知リタル日ヨ

リ起算ス

第三節 庶子及ヒ私生子ノ嫡出子ト爲ル權

第一百三條 庶子ハ父母ノ婚姻ニ因リテ嫡出子ト爲ル

私生子ハ父母ノ婚姻ノ後父ノ認知シタルニ因リテ嫡出子ト爲ル

第一百四條 死亡シタル子ト雖モ前條ノ規定ニ依リ嫡出子ト爲ル此場合ニ於テハ其効カハ子ノ生ミタル子ヲ利ス

第一百五條 父母ノ婚姻ノ時マテニ父子ノ分限確定シタル者ハ婚姻ノ日ヨリ又婚姻ノ後ニ確定シタル者ハ確定ノ日ヨリ嫡出子ノ權利ヲ有ス

第七章 養子縁組

第一節 養子縁組ニ必要ナル條件

第一百六條 何人ト雖モ養子ト爲ル可キ者ヨリ年長ニシテ成年ナルニ非サレハ養子ト爲スコトヲ得ス

遺言ヲ爲ス能力アル者ハ遺言養子ヲ爲スコトヲ得

第一百七條 家督相續ヲ爲スコキ男子アル者ハ養子ヲ爲スコトヲ得ス

第一百八條 後見人ハ管理ノ計算ヲ爲ササル前ニ被後見人ヲ養子ト爲スコトヲ得ス但遺言養子ト爲スハ此限ニ在ラス

第一百九條 戸主ニ非サル者ハ養子ヲ爲スコトヲ得ス但推定家督相續人ニシテ戸主ノ許諾ヲ得タル者ハ此限ニ在ラス

第一百十條 配偶者アル者ハ其配偶者ノ承諾ヲ得ルニ非サレハ養子ヲ爲スコトヲ得ス但配偶者カ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ此限ニ在ラス

配偶者アル者ハ其配偶者ト一致スルニ非サレハ養子ト爲ルコトヲ得ス

第一百一十條 家督相續ニ因リテ戸主ト爲リタル者ハ他人ノ養子ト爲ルコトヲ得ス  
又推定家督相續人ハ他人ノ養子ト爲ルコトヲ得ス  
然レトモ分家ヨリ本家ヲ承繼スル必要アルトキハ本條ノ規定ヲ適用セス  
第一百十二條 外國人ハ日本人ノ養子ト爲ルコトヲ得ス

第二節 養子縁組ノ儀式

第一百三條 養子縁組ハ當事者ノ承諾ニ因リテ成ル

此承諾ハ證人二人ノ立會ヲ得テ慣習ニ從ヒ縁組ノ儀式ヲ行フニ因リテ成立ス

縁組ノ儀式ヲ行フニ付テハ第四十三條第四十六條及ヒ第四十八條ノ規定ヲ適用ス  
第一百四條 當事者ハ身分取扱吏ニ縁組ノ申出ヲ爲ス時ニ於テ左ノ書類ヲ差出タス  
可シ

第一 養子ヲ爲ス者及ヒ養子ト爲ル者ノ出生證書又ハ之ニ代用スル保證書

第二 家督相續ヲ爲ス可キ男子ナキコトヲ證スル身分取扱吏ノ認證書又ハ推定家督相續人廢除ノ證書

第三 配偶者ノ承諾書又ハ承諾ヲ得ル能ハサル事由ヲ證スル書類

第四 後見管理ノ計算ヲ爲シタル證明書

第五 縁組ニ必要ナル許諾書又ハ許諾ヲ得ル能ハサル事由ヲ證スル書類

第一百五條 滿十五年ニ至ラサル子ノ縁組ハ父母之ヲ承諾スルコトヲ得

父母ノ一方カ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ他ノ一方ニ於テ縁組ヲ承諾スルコトヲ得

父母共ニ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ其家ノ祖父母若シ其一方カ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ他ノ一方ニ於テ縁組ヲ承諾スルコトヲ得

第十六條 滿十五年ニ至リタル者ハ父母ノ許諾ヲ受ケテ承諾ヲ縁組スルコトヲ得  
父母ノ一方カ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ他ノ一方ノ許諾ヲ以テ足ル

父母共ニ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ其家ノ祖父母ノ許諾ヲ受ク可シ若シ祖父母ノ一方カ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ他ノ一方ノ許諾ヲ以テ足ル

第十七條 父母、祖父母悉ク死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ二十年未滿ノ者ニ限リ前二條ニ定メタル年齢ノ區別ニ從ヒテ後見人之ヲ承諾シ又ハ其許諾ヲ與フ

第十八條 私生子ノ養子縁組ニ付テハ母之ヲ承諾シ又ハ其許諾ヲ與フ  
父母ノ知レサル子ニ付テハ前條ノ規定ヲ適用ス

第十九條 前數條ノ場合ニ於テ繼父又ハ繼母アルトキハ第三十八條第三項ノ規定ヲ適用ス

第二十條 育兒院ニ在リテ父母ノ知レサル子ノ縁組ハ二十年未滿ニ限リ第一百五條及ヒ第十六條ニ定メタル年齢ノ區別ニ從ヒテ院長之ヲ承諾シ又ハ其許諾ヲ與フルコトヲ得

第二十一條 婿養子縁組ニ付テハ婚姻ノ申出ヲ爲ス時ニ於テ當事者ハ婿養子縁組ヲ爲スノ意思ヲ身分取扱吏ニ申出ツ可シ

此縁組ニ必要ナル條件ノ欠缺スルトキハ身分取扱吏ハ婚姻ノ儀式ヲ差止ムルコトヲ得

此縁組ハ婚姻ノ儀式ヲ行フニ因リテ成ル

第二百二十二條 遺言養子縁組ハ遺言書ヲ以テ之ヲ爲ス

此遺言ハ養子ヲ爲ス者ノ死亡ノ日ニ家督相續ヲ爲ス可キ與屬親アルトキハ其効ヲ失フ

第二百二十三條 遺言養子ヲ爲ス者ノ死亡シタルトキハ第百十五條以下ノ規定ニ從ヒテ縁組ノ受諾ヲ爲ス可シ

第二百二十四條 縁組ノ儀式ヲ行ヒ又ハ縁組ノ受諾ヲ爲シタルトキハ當事者ヨリ十日内ニ身分取扱吏ニ届出ツ可シ但此届出ハ代理人ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第二百二十五條 第五十條乃至第五十二條ノ規定ハ之ヲ縁組ニ適用ス但本章第一節ニ定メタル條件ニ違背セサルコトヲ要ス

第三節 養子縁組ノ證據

第二百二十六條 縁組ハ縁組證書ヲ以テ之ヲ證ス但第二百九十一條ノ規定ノ適用ヲ妨ケス

第五十四條ノ規定ハ縁組ニ之ヲ適用ス

第四節 養子縁組ノ不成立及ヒ無効

第二百二十七條 縁組ハ人違、喪心又ハ強暴ニ因リテ承諾ノ全ク欠缺シタルトキハ不成立トス

第二百二十八條 縁組ハ本章第一節ニ定メタル條件ノ一ニ違背シタルトキハ無効トス此無効ハ第百三十條ノ場合ヲ除ク外當事者其他現實ノ利益ヲ有スル者及ヒ檢事ヨリ何時ニテモ之ヲ請求スルコトヲ得

第二百二十九條 縁組ハ左ノ場合ニ於テ無効トス  
第一 縁組ノ申出ヲ爲サス又ハ身分取扱吏ノ差止ヲ受ケタルニ拘ハラズ儀式ヲ

行ヒタルトキ

第二 證人二人ノ立會ナクシテ儀式ヲ行ヒタルトキ

第三 第四十八條ノ規定ニ違ヒテ儀式ヲ行ヒタルトキ

第四 縁組ノ申出ヲ受ケタル身分取扱吏ノ管轄違ナルトキ

此無効ハ儀式後一个年内ニ限り前條ニ掲ケタル者ヨリ之ヲ請求スルコトヲ得  
第二百三十條 第百八條又ハ第百九條但書ノ規定ニ違ヒタル縁組ノ無効ハ被後見人又ハ養家ノ戸主ニ非サレハ之ヲ請求スルコトヲ得ス

被後見人カ成年ニ至リ又ハ戸主カ縁組ヲ知リタル後縁組ヲ認諾シ又ハ三ヶ月ヲ過キタルトキハ其訴權ヲ失フ

第二百三十一條 強暴ノ爲メ承諾ニ瑕疵アル縁組ノ無効ハ強暴ヲ受ケタル者ニ限り之ヲ請求スルコトヲ得但強暴ヲ免カレタル後縁組ヲ認諾シ又ハ三ヶ月ヲ過キタルトキハ其訴權ヲ失フ

第二百三十二條 第百十六條乃至第百二十條ニ定メタル許諾ナクシテ爲シタル縁組ノ無効ハ許諾ヲ與フ可キ者又ハ許諾ヲ受ク可キ者ニ非サレハ之ヲ請求スルコトヲ得ス

第六十條第二項、第六十一條及ヒ第六十二條ノ規定ハ此無効訴權ニ之ヲ適用ス  
第二百三十三條 婿養子縁組ニ付テハ當事者ハ縁組又ハ婚姻ノ無効言渡ヲ原因トシテ婚姻又ハ縁組ノ無効ヲ請求スルコトヲ得但無効言渡ノ後三ヶ月ヲ過キタルトキハ其訴權ヲ失フ

第五節 養子縁組ノ効力

第二百三十四條 養子ハ縁組ノ日ヨリ養家ニ於テ嫡出子ノ權利及ヒ義務ヲ有ス

第三百三十五條 養子ハ特別ニ職業ヲ營ムニ因リテ取得シタル利益及ヒ其齎帶シ又ハ相續、贈與若クハ遺贈ニ因リテ取得シタル財産ノ所有權ヲ有ス但未成年中ノ財産管理ハ第九章ノ規定ニ從ヒテ養父母ニ屬ス

第六節 罰則

第三百三十六條 縁組申出ノ時ニ必要ノ書類ヲ差出タサシメサル身分取扱吏ハ二圓以上二十圓以下ノ過料ニ處ス

縁組ノ不成立又ハ無効タル可キ法律上ノ原因アルコトヲ知リテ其儀式ヲ行フヲ差止メサル身分取扱吏ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第八章 養子ノ離縁

第一節 協議ノ離縁

第三百三十七條 養子ヲ爲シタル者及ヒ養子ト爲リタル者ハ協議ヲ以テ離縁ヲ爲スコトヲ得

然レトモ十五年未滿ニテ養子ト爲リタル者ノ離縁ハ滿十五年ニ至ラサル間ニ限り養子ヲ爲シタル者ト縁組承諾ノ權ヲ有スル者トノ協議ヲ以テ之ヲ爲ス

第三百三十八條 離縁ヲ爲サントスル養子ハ縁組承諾ノ爲メ定メタル規則ニ從ヒ其父母、祖父母又ハ後見人ノ承諾ヲ受クルコトヲ要ス

第三百三十九條 當事者ハ離縁協議書ニ左ノ書類ヲ添ヘテ身分取扱吏ニ届出ツ可シ

第一 縁組證書

第二 離縁ノ爲メニ必要ナル承諾書又ハ承諾ヲ得ル能ハサル事由ヲ證スル書類

第二節 特定原因ノ離縁

第四百十條 離縁ハ左ノ原因アルニ非サレハ之ヲ請求スルコトヲ得ス

第一 養子ヨリ養家ノ尊屬親ニ對シ又ハ養家ノ尊屬親ヨリ養子ニ對スル暴虐、脅迫、遺棄又ハ重大ノ侮辱

第二 重罪ニ因レル處刑

第三 竊盜又ハ詐欺取財ノ罪ニ因レル重禁錮一年以上ノ處刑

第四 浪費

第八十二條及ヒ第八十八條ノ規定ハ離縁ニ之テ適用ス

第四百十一條 離縁ヲ請求スル訴權ハ養子ヲ爲シタル者及ヒ養子ト爲リタル者ノミニ屬ス

養子ヲ爲シタル者又ハ養子ト爲リタル者カ死亡シタルトキハ離縁ノ訴權ハ消滅ス但訴訟中ニ死亡シタル場合ニ於テハ現實ノ利益ヲ有スル者其訴訟ヲ續行スルコトヲ得

第四百十二條 養子ヲ爲シタル者カ禁治産中ニ在ルトキハ後見人又ハ後見監督人ハ親族會ノ許可ヲ得テ離縁ヲ請求スルコトヲ得

養子ト爲リタル者カ禁治産中ニ在ルトキハ實家ノ父母、祖父母又ハ戸主ヨリ離縁ヲ請求スルコトヲ得

第四百十三條 養子ノ滿十五年ニ至ラサル間ハ縁組承諾ノ權ヲ有スル者ヨリ離縁ヲ請求スルコトヲ得

第四百十四條 養子カ養父母ト同居スルトキハ裁判所ハ離縁ノ訴訟中養子ヲシテ住家ヲ去ラシムルコトヲ得

此場合ニ於テハ養子ハ衣服其他ノ日用物品ヲ持去リ且必要アルトキハ養料ヲ請求スルコトヲ得

裁判所ハ養子ノ請求ニ因リテ其財産ヲ保存スル爲メニ必要ナル處分ヲ命スルコトヲ得

第四百十五條 離縁ハ養子ノ家督相續後之ヲ爲スコトヲ得ス

第三節 離縁ノ効力

第四百十六條 離縁ハ其届出又ハ裁判確定ノ後ニ非サレハ効力ヲ生セス

第四百十七條 離縁ト爲リタル養子ハ自己ノ過失ノ有無ニ拘ハラズ其所有財産ニ限

リ之ヲ請求スルコトヲ得但養家ノ爲メニ消費シタルモノハ此限ニ在ラス

第四百十八條 婿養子縁組ニ付テハ當事者ハ離縁ヲ原因トシテ離婚ヲ請求シ又離婚

ヲ原因トシテ離縁ヲ請求スルコトヲ得但離婚又ハ離縁ヨリ三ヶ月ヲ過キタルトキハ其訴權ヲ失フ

第九章 親 權

第一節 子ノ身上ニ對スル權

第四百十九條 親權ハ父之ヲ行フ

父死亡シ又ハ親權ヲ行フ能ハサルトキハ母之ヲ行フ

父又ハ母其家ヲ去リタルトキハ親權ヲ行フコトヲ得ス

第四百五十條 未成年ノ子ハ親權ヲ行フ父又ハ母ノ許可ヲ受クルニ非サレハ父母ノ

住家又ハ其指定シタル住家ヲ去ルコトヲ得ス

子カ許可ヲ受ケスシテ其住家ヲ去リタルトキハ父又ハ母ハ區裁判所ニ申請シテ歸

家セシムルコトヲ得

第四百五十一條 父又ハ母ハ子ヲ懲戒スル權ヲ有ス但過度ノ懲戒ヲ加フルコトヲ得ス

第四百五十二條 子ノ行狀ニ付キ重大ナル不滿意ノ事由アルトキハ父又ハ母ハ區裁判

所ニ申請シテ其子ヲ感化場又ハ懲戒場ニ入ルルコトヲ得

入場ノ日數ハ六ヶ月ヲ超過セサル期間内ニ於テ之ヲ定ム可シ但父又ハ母ハ裁判所

ニ申請シテ更ニ其日數ヲ増減スルコトヲ得

右申請ニ付テハ總テ裁判上ノ書面及ヒ手續ヲ用ユルコトヲ得ス

裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キテ決定ヲ爲スコシ父、母及ヒ子ハ其決定ニ對シテ抗告

ヲ爲スコトヲ得

第二節 子ノ財産ノ管理

第四百五十三條 父ハ未成年ナル子ノ總テノ行爲ニ付テ之ヲ代表シ自己ノ財産ニ於ケ

ル如ク其財産ヲ管理ス

第四百五十四條 父ノ管理ニ於テハ第九十四條ニ記載シタル行爲ハ尙ホ之ヲ管理行

爲ト看做ス

第四百五十五條 子ハ特別ニ職業ヲ營ムニ因リテ取得シタル利益及ヒ相續、贈與又ハ

遺贈ニ因リテ取得シタル財産ノ所有權ヲ有ス

第四百五十六條 父ハ管理ノ止ミタルトキハ子ニ其財産ヲ引渡ス可シ但收益ハ子ノ養

育教育ノ費用及ヒ管理ノ費用ニ供シタルモノト看做ス

第四百五十七條 本節ノ規定ハ母カ子ノ財産ヲ管理スル場合ニ之ヲ適用ス

然レトモ母ハ管理ヲ辭スルコトヲ得

第三節 嫡母、繼父及ヒ繼母ニ特別ナル規則

第四百五十八條 嫡母、繼父又ハ繼母ノ親權ヲ行フ場合ニ於テハ相談人ヲ付スルコト

ヲ得

此相談人ハ配偶者證書若クハ遺言書ヲ以テ之ヲ定メ又ハ親族會其議決ヲ以テ之ヲ

定ム

第一百五十九條

相談人ハ後見監督人ト同一ノ權限及ヒ義務ヲ有ス

第一百六十條

配偶者カ相談人ヲ定メサル場合ニ於テ親族會ヲ召集セサルトキ又ハ

配偶者若クハ親族會ノ定メタル相談人ニ相談セサルトキハ區裁判所ハ檢事ノ請求

ニ因リ嫡母、繼父又ハ繼母ニ對シテ親權行使ノ禁止ヲ宣告スルコトヲ得

第十章 後見

總則

第六十一條

後見ハ未成年者ノ父又ハ母ニシテ生存スル者ノ死亡ニ因リテ開始ス

父母共ニ生存シ又ハ其一方ノ生存スルモ親權ヲ行フ能ハサルトキ又ハ母カ子ノ財

産ノ管理ヲ辭スルトキモ亦同シ

第六十二條

一家ニ未成年者數人アルモ後見人ハ一人タル可シ

第六十三條

後見人ハ親族會ノ免除ヲ得サル限リハ後見ヲ承諾ス可シ若シ後見人

之ヲ承諾セス又ハ其任務ヲ怠ルトキハ利害關係人又ハ檢事ノ請求ニ因リテ區裁判

所代務者ヲ命スルコトヲ得

後見人ハ代務者ノ管理ノ費用ヲ負擔シ且其管理ニ付キ責ニ任ス

第一節 後見人

第六十四條

親權ヲ行フ父又ハ母ハ其生前ニ於テ親族、姻族又ハ他人ノ中ヨリ後

見人タル可キ者ヲ指定スル權ヲ有ス

第六十五條

後見人ノ指定ハ遺言書若クハ證書ヲ以テ之ヲ爲シ又ハ區裁判所ニ口

述シテ之ヲ爲ス可シ此口述ニ付テハ調書ヲ作ルコトヲ要ス

第六十六條

父又ハ母カ後見人ヲ指定セサリシトキハ其家ノ祖父後見人ト爲ル但

未成年ノ家族ニ付テハ成年ノ戶主後見人ト爲ル

第六十七條

遺言後見人モ祖父若クハ戶主タル後見人モ有ラサルトキ又ハ此等ノ

後見人カ免除セラレ除斥セラレ罷黜セラレ若クハ死亡シタルトキハ親族會ニ於テ

後見人ヲ選定ス

第六十八條

未成年者ヲ有スル人ノ死亡シタルトキ又ハ未成年者ヲ有スル父若ク

ハ母ノ婚姻其他ノ事故ニ因リテ他家ニ入りタルトキハ區裁判所ハ未成年者ノ親族

若クハ利害關係人ノ請求ニ因リ後見人ヲ設定スル爲メ親族會ヲ召集ス可シ

第二節 後見監督人

第六十九條

後見ニハ一人ノ後見監督人ヲ付スルコトヲ得

後見監督人ハ後見人ヲ定ムルト同一ノ手續ニ從ヒテ之ヲ指定シ又ハ親族會ニ於テ

之ヲ選定ス

本章第四節及ヒ第五節ノ規定ハ後見監督人之ヲ適用ス

第七十條

後見監督人ヲ置カサル場合ニ於テ監督ヲ要スルコト有ルトキハ親族

會ニ於テ會員一人ヲ選定シ臨時ニ後見監督人ノ任務ヲ行ハシム

第三節 親族會

第七十一條

親族會ハ未成年者ノ最近親族三人以上ヲ以テ之ヲ設ク但親族三人ニ

滿タサルトキハ未成年者ニ縁故アル者ヲ以テ之ヲ補足ス

本家及ヒ分家ノ戶主ハ親族會ニ列スルコトヲ得

第七十二條

親族會ハ親族後見人、後見監督人、保佐人又ハ利害關係人ノ求メニ因

リテ集會ス

第七十三條

戶主成年ナルトキハ家族ノ爲メ親族會ヲ設グルコトヲ要セス

民法△人事編



第七十四條 養子ノ親族會ニハ實家ノ親族モ其會員タルコトヲ得  
 第七十五條 會員ハ自己ノ利害ニ關係アル會議ニ列スルコトヲ得ス  
 第七十六條 親族會ヲ設クル能ハサルトキハ區裁判所其事ヲ行フ  
 第七十七條 未成年者ノ親族會ノ外親族會ヲ組成スル必要アルトキモ亦本節ノ規定ヲ適用ス

第四節 後見ノ免除

第七十八條 左ニ掲グル者ハ當然後見人タルコトヲ免除セラル

第一 現役ニ服スル軍人、軍屬

第二 被後見人住居ノ市又ハ郡ノ外ニ於テ公務ニ從事スル人

第七十九條 後見免除ノ求メハ親族會之ヲ決ス後見人解任ヲ求メタルトキモ亦同シ

第五節 後見人及ヒ親族會員ノ缺格、除斥及ヒ罷黜

第八十條 左ニ掲グル者ハ後見人タルコトヲ得ス又親族會員タルコトヲ得ス

第一 未成年者

第二 民事上禁治産者及ヒ准禁治産者

第三 未成年者ノ身分又ハ財産ニ對シテ訴訟ヲ爲ス人及ヒ其人ノ尊屬親、卑屬親、配偶者

第八十一條 左ニ掲グル者ハ後見及ヒ親族會ヨリ除斥セラル可シ現ニ任務ニ從事スル者ハ之ヲ罷黜ス

第一 甚シキ不行跡ナル人

第二 後見管理ニ不能又ハ不正實ヲ顯ハセル後見人

第三 任務ヲ怠黜セラレタル裁判上ノ保佐人

第四 公權剝奪、公權停止及ヒ刑事上禁治産ヲ受ケタル人

第五 復權ヲ得サル破産者及ヒ家資分散者

第八十二條 後見人及ヒ親族會員ノ除斥又ハ罷黜ハ親族會ニ於テ之ヲ爲ス

第六節 後見人ノ管理

第八十三條 後見人後見ノ開始ヲ知ルトキハ直チニ任務ニ就クコトヲ要ス

親族會ニ於テ後見人ヲ選定シ其後見人在席スルトキハ直チニ任務ニ就キ若シ在席セサルトキハ通知ヲ得タル日ヨリ任務ニ就クコトヲ要ス

第八十四條 後見人ハ未成年者ヲ監護シ其教育ヲ擔任ス

尊屬後見人及ヒ戶主後見人ヲ除ク外後見人若シ未成年者ノ在來ノ住居又ハ教育方法ヲ變更セントスルトキハ親族會ニ協議ス可シ

第八十五條 後見人ハ父母ノ如ク未成年者ヲ懲戒スルコトヲ得

未成年者ノ行狀ニ付キ重大ナル不滿意ノ事由アルトキハ後見人ハ親族會ノ許可ヲ得タル上第八十二條ノ規定ニ從ヒテ未成年者ニ對スル處分ヲ爲スコトヲ得

後見人ハ其權ヲ濫用シ又ハ其義務ヲ怠ルトキハ未成年者及ヒ其親族ハ親族會ニ之ヲ申告スルコトヲ得

第八十六條 後見人ハ未成年者ノ總テノ行爲ニ付テ之ヲ代表シ善良ナル管理者ノ

如ク其財産ヲ管理シ管理ノ失當又ハ過失ヨリ生スル損害賠償ノ責ニ任ス

第八十七條 後見人ハ當然其任務ニ就ク可キ日ヨリ十日内ニ後見監督人ノ立會ヲ得テ未成年者ノ財産ヲ調査ス可シ

財産目録ノ調製ハ二个月内ニ之ヲ終了スルコトヲ要ス但親族會ハ狀況ニ從ヒテ延

期ヲ許スコトヲ得

第百八十八條 後見人カ未成年者ノ債務者又ハ債權者ナルトキハ目錄ノ調製前其旨ヲ公證人又ハ親族會ニ明言スルコトヲ要ス

後見人カ債權ノ存立ヲ知りテ之ヲ明言セザリシトキハ其債權ヲ喪失ス又債務ノ存立ヲ知りテ之ヲ明言セザリシトキハ區裁判所其後見人ヲ罷黜スルコトヲ得但罷黜ノ場合ニ於テハ三十圓以下ノ過料ニ處スルコトヲ得

第百八十九條 目錄調製ヲ終了セサル間ハ後見人ハ要急關ク可カラサル管理行為ノミヲ爲スコトヲ得

第百九十條 後見人ハ任務執行ノ初ニ於テ親族會ニ協議シ未成年者ノ養育ノ需用教育ノ程度ト其資産トニ從ヒ毎年費ス可キ金額及ヒ財産管理ニ係ル費用ヲ定ム親族會ハ相當ノ給料ヲ與フル一人又ハ數人ノ管理者ヲ後見人ノ自己ノ責任ヲ以テ使用スルヲ許スコトヲ得

第百九十一條 後見人ハ未成年者ノ元本及ヒ收益ノ剩額ヲ毎次ニ官ノ貯金預所又ハ確實ナル銀行ニ預ク可シ其預ケザリシ金額ニ付テハ法律上ノ利息ヲ辨濟ス可シ後見人カ未成年者ノ財産ノ利用方法ヲ變更セントスルトキハ親族會ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス

第百九十二條 尊屬後見人及ヒ戸主後見人ヲ除ク外後見人ハ一个年内ノ管理ノ狀況ヲ親族會ニ報告ス可シ

第百九十三條 後見人ハ未成年者ノ財産ニ付テハ管理ノ權ヲ有スルニ止マリ此權外ノ行為ハ法律ニ定メタル條件ニ依ルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス  
第百九十四條 左ニ掲グル行為ニ關シテハ後見人ハ親族會ノ許可ヲ得ルコトヲ要ス

第一 元本ヲ利用シ又ハ借財ヲ爲スコト

第二 不動産及ヒ重要ナル動産ヲ讓渡シ之ニ物權ヲ設定シ又ハ之ヲ取得スルコト

第三 動産不動産ニ係ル訴訟又ハ和解仲裁ニ關スルコト

第四 相續遺贈若クハ贈與ヲ受諾シ又ハ拋棄スルコト

第五 新築、改築、増築又ハ大修繕ヲ爲スコト

第六 財産編第百十九條ニ定メタル期間ヲ超ユル賃貸ヲ爲スコト

第百九十五條 後見人ハ未成年者ノ財産ヲ讓受クルコトヲ得ス又未成年者ニ對スル權利ヲ讓受クルコトヲ得ス

第百九十六條 後見人ハ親族會ノ許可ヲ得ルニ非サレハ未成年者ノ不動産ヲ賃借スルコトヲ得ス

第百九十七條 後見人ノ其權内ニ於テ爲シタル行為ハ未成年者ヲ羈束ス

第七節 後見監督人ノ任務

第百九十八條 後見監督人ハ後見人ノ管理ヲ監視スルコトニ任ス

後見監督人ハ後見人ヲ缺クトキト雖モ後見ノ任務ヲ行フコトヲ得ス此場合ニ於テハ直チニ後任ノ後見人ヲ定ムル手續ヲ爲スコトヲ要ス

第百九十九條 未成年者ト後見人トノ間ニ利益相反スルトキハ後見監督人ハ未成年者ヲ代表ス

第二百條 必要ナル場合ニ於テハ後見監督人ハ保存行為ヲ爲スコトヲ得

第二百一條 法律上後見監督人ノ立會フ可キ行為ニシテ其立會ナクシテ爲シタルモノハ無効トス

第八節 後見ノ終了

第二百二條 後見ノ任務ハ後見人ノ一身ニ止マリ其相續人ニ移轉セス然レトモ相續人カ成年者ナルトキハ後任ノ後見人ノ任務ニ就クマテ管理ヲ繼續ス可シ  
第二百三條 未成年者カ成年ニ達シ又ハ自治産ニ至ルニ因リテ後見ノ止ムトキハ後見人ハ其計算ヲ完了スルマテ管理ヲ繼續ス

第二百四條 假ニ管理ヲ爲ス者ハ必要ナル行爲ノミヲ爲スコトヲ得

第九節 後見ノ計算

第二百五條 後見人ハ管理ノ終了スルトキハ其計算ヲ爲スコシ

第二百六條 後見ノ決算ハ後見監督人ノ立會ニテ未成年者ノ成年ニ達シタル者又ハ其自治産ニ至リタル者ニ對シテ之ヲ爲ス

後見カ後見人ノ身上ニ係リテ終了スルトキハ決算ハ後任ノ後見人ニ對シテ之ヲ爲シ親族會ノ許可ニ付ス但第百八條ノ場合ニ於テハ決算ハ後見監督人ニ對シテ之ヲ爲ス

後見カ未成年者ノ死亡ニ因リテ終了スルトキハ決算ハ其相續人ニ對シテ之ヲ爲ス後見ノ決算ニ係ル費用ハ未成年者ノ負擔ニ屬ス

第二百七條 後見ノ決算ハ管理終了ノ日ヨリ三個月内ニ之ヲナス可シ但親族會ハ當事者ノ求めニ因リテ延期ヲ許スコトヲ得

第二百八條 後見人ト未成年者ノ成年ニ達シタル者トノ合意ニシテ後見ノ決算前ニ爲シタルモノハ總テ無効トス

第二百九條 後見ノ費用ハ豫算ノ定額ヲ超ユルト雖モ後見人其有益タルコトヲ證スルトキハ未成年者ノ負擔ニ屬ス

第二百十條 後見人ヨリ未成年者ニ返濟ス可キ金額ハ決算完結ノ日ヨリ當然利息ヲ生ス

未成年者ヨリ後見人ニ返濟ス可キ金額ハ決算完結ノ後後見人ノ催告ニ因リテ利息ヲ生ス

第二百十一條 後見ノ計算ニ係ル未成年者ノ訴權ハ五個年ノ時効ニ因リテ消滅ス後見人其他假ニ後見管理ヲ爲シタル人ノ未成年者ニ對スル訴權モ亦同シ

未成年者ト後見監督人又ハ親族會員トノ間ノ後見ニ係ル訴權ニ付テモ亦前項ノ規定ヲ適用ス

此期間ハ未成年者ノ成年ニ達シ又ハ死亡シタル日ヨリ起算シ第二百八條ノ場合ニ於テ後見ノ計算ニ係ル訴權ニ付テハ合意無効ノ裁判言渡ノ日ヨリ起算ス

第二百十二條 後見監督人及ヒ假ニ後見管理ヲ爲シタル人ハ代理契約ノ原則ニ從ヒテ過失ノ責ニ任ス

第十一章 自治産

第二百十三條 未成年者ハ婚姻ヲ爲スニ因リテ當然自治産ノ權ヲ得

第二百十四條 親權ヲ行フ父又ハ母ハ滿十五年ニ達シタル未成年ノ子ニ自治産ヲ許スコトヲ得

此自治産ハ身分取扱吏ニ届出ツ可シ

第二百十五條 後見ニ服スル未成年者ノ滿十七年ニ達シタルトキハ親族會ハ其未成年者ニ自治産ヲ許スコトヲ得

此自治産ハ後見人ヨリ身分取扱吏ニ届出ツ可シ

第二百十六條 自治産ノ未成年者ハ之ヲ保佐ニ付ス親權ヲ行ヒタル父又ハ母ハ當然保佐人ト爲ル

親權ヲ行フ父又ハ母ハ其生前ニ第六十五條ノ規定ニ從ヒテ保佐人ヲ指定スルコトヲ得若シ之ヲ指定セザリシトキハ其家ノ祖父保佐人ト爲リ家族ニ付テハ成年ノ戸主保佐人ト爲ル

夫ハ當然未成年者ノ婦ノ保佐人ト爲ル

此他ノ場合ニ於テハ親族會ニ於テ保佐人ヲ選定ス

第二百十七條 後見人ニ關シテ定メタル免除、缺格、除斥及ヒ罷黜ノ規則ハ之ヲ保佐人ニ適用ス

第二百十八條 自治産ノ未成年者ハ保佐人ノ立會アルニ非サレハ元本ヲ領收スルコトヲ得ス

第二百十九條 第九十四條ニ掲ケタル行爲ニ付テハ自治産ノ未成年者ハ保佐人ノ立會アルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第二百二十條 父母ヲ除ク外保佐人ハ後見人ト同シク過失ノ責ニ任ス

第二百二十一條 自治産ヲ許サレタル未成年者カ不行跡又ハ財産管理ノ失當ニ因リテ自治産者タルニ適セサルトキハ親族會ハ其自治産ヲ廢止スルコトヲ得

親權ヲ行ヒタル父又ハ母ハ自治産ヲ廢止スルコトヲ得若シ此等ノ者アラサルトキハ親族會員又ハ保佐人ハ此廢止ヲ親族會ニ求ムルコトヲ得

未成年者ハ自治産廢止ノ日ヨリ親權又ハ後見ニ服シ成年ニ達スルマテ復タ自治産者ト爲ルコトヲ得ス

第十二章 禁治産

第一節 民事上禁治産

第二百二十二條 心神喪失ノ常況ニ在ル者ハ時時本心ニ復スルコト有ルモ其治産ヲ

禁スルコトヲ得

第二百二十三條 禁治産ハ配偶者、四親等内ノ親族戸主及ヒ檢事ヨリ之ヲ區裁判所

ニ請求スルコトヲ得

禁治産ヲ請求スル權利ヲ有スル一人ノ申立ニ因リテ言渡シタル裁判ハ總テノ人ニ對シテ既判力ヲ有ス

第二百二十四條 禁治産者ハ之ヲ後見ニ付ス

配偶者ハ當然相互ニ後見人ト爲ル若シ配偶者アラサルトキハ其家ノ父後見人ト爲リ父アラサルトキハ親權ヲ行フコトヲ得ヘキ母後見人ト爲ル

父又ハ母ハ第六十五條ニ定メタル方式ニ從ヒテ後見人ヲ指定スルコトヲ得若シ指定セサルトキハ第六十六條ノ規定ヲ適用ス

法律上ノ後見人モ遺言後見人モ有ラス又ハ此等ノ後見人カ免除セラレ除斥セラレ若クハ罷黜セラレタルトキハ第十章ニ定メタル方式ニ從ヒ親族會ニ於テ後見人ヲ選定ス

第二百二十五條 配偶者、尊屬親、卑屬親及ヒ戸主ヲ除ク外何人タリトモ十年以上禁治産者ノ後見ヲ擔任スルコトヲ要セス

第二百二十六條 未成年者ノ後見ニ係ル規定ハ禁治産者ノ後見ニ之ヲ適用ス

第二百二十七條 疾病ノ性質ト資産ノ狀況トニ從ヒテ禁治産者ヲ自宅ニ療養セシメ又ハ之ヲ病院ニ入ラシムルハ親族會ノ決議ニ依ル但瘋癲病院ニ入ラシメ又ハ自宅ニ監置スル手續ハ特別法ヲ以テ之ヲ定ム

第二百二十八條 法律上ノ後見人ハ第九十二條ニ定メタル管理狀況ノ報告ヲ爲スコトヲ要セス

第二百二十九條 禁治産者ノ財産ヲ以テ其子孫ノ教育、婚姻又ハ營業ノ資ニ供セン

トスルトキハ親族會ノ許可ヲ得ルコトヲ要ス

第二百三十條 禁治産者ハ禁治産ノ裁判言渡ノ日ヨリ無能力者トス

裁判言渡後ニ爲シタル禁治産者ノ行爲ハ之ヲ銷除スルコトヲ得

禁治産ノ裁判言渡前ニ爲シタル禁治産者ノ行爲ニ對シテモ其行爲ノ當時ニ於テ喪

心ノ明確ナルトキハ銷除訴權ヲ行フコトヲ得

第二百三十一條 禁治産ノ原因止ミタルトキハ本人配偶者、親族、姻族、戸主、後見人

又ハ檢事ノ請求ニ因リテ其禁ヲ解ク可シ

禁治産者ハ解禁ノ裁判言渡後ニ非サレハ其權利ヲ回復スルコトヲ得ス

第二節 准禁治産

第二百三十二條 心神耗弱者、聾啞者、盲者及ヒ浪費者ハ准禁治産者ト爲シテ之ヲ保

佐ニ付スルコトヲ得

准禁治産ノ言渡ハ配偶者、三親等内ノ親族及ヒ戸主ノ請求ニ因リ區裁判所之ヲ爲

ス

保佐人ニ付テハ第二百二十四條及ヒ第二百五條ノ規定ヲ適用ス

第二百三十三條 第二百二十七條乃至第二百三十條ノ規定ハ之ヲ准禁治産ニ適用ス

裁判所ハ狀況ニ從ヒ保佐人ノ立會アルニ非サレハ管理行爲ヲ爲スコトヲ得サル旨

ヲ言渡スコトヲ得

第二百三十四條 准禁治産者カ保佐人ノ立會ナクシテ爲シタル行爲ニ付テハ第二百

三十條ノ規定ヲ適用ス

第二百三十五條 准禁治産ノ原因止ミタルトキハ本人配偶者、親族、姻族、戸主、保佐

人又ハ檢事ノ請求ニ因リテ其禁ヲ解ク可シ

第三節 刑事上禁治産

第二百三十六條 刑事上禁治産ヲ受ケタル者ハ其財産ヲ管理スルコトヲ得ス又遺言

ヲ以テスル外ハ其治産ヲ處分スルコトヲ得ス

第二百三十七條 刑事上禁治産者ニハ後見人ヲ付シテ其財産ヲ管理セシム此後見人

ノ指定及ヒ管理ノ方法ニ付テハ民事上禁治産者ノ後見ニ係ル規定ヲ適用ス

第二百二十九條ノ場合ニ於テハ禁治産者ノ同意ヲ得ルヲ以テ足ル

第四節 瘋癲者ノ財産ノ假管理

第二百三十八條 禁治産ヲ受ケサル瘋癲者アルトキハ配偶者、親族、戸主及ヒ檢事

ハ區裁判所ノ許可ヲ得テ特別法ニ定ムル手續ニ從ヒ之ヲ瘋癲病院ニ入レ又ハ自宅

ニ監置スルコトヲ得

此場合ニ於テハ裁判所ハ直チニ假管理人ヲ指定ス

第二百三十九條 瘋癲病院ニ入り又ハ自宅ニ監置セラレタル者ハ入院中又ハ監置中

其財産ヲ管理シ及ヒ處分スルコトヲ得ス

第二百四十條 假管理人ハ瘋癲者ノ總テノ行爲ニ付テ之ヲ代表シ禁治産者ノ後見

人ト同視セラル但必要ナル行爲ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第二百四十一條 瘋癲者ノ入院中又ハ監置中ニ行爲ヲ爲シタル證據アルトキハ其行

爲ヲ銷除スルコトヲ得但相手方カ瘋癲者ノ本心ニテ行爲ヲ爲シタルコトヲ證スル

トキハ此限ニ在ラス

第二百四十二條 瘋癲者ノ無能力ハ區裁判所カ假管理ヲ解クニ因リテ止ム

第十三章 戸主及ヒ家族

第二百四十三條 戶主トハ一家ノ長ヲ謂ヒ家族トハ戶主ノ配偶者及ヒ其家ニ在ル親族姻族ヲ謂フ

戶主及ヒ家族ハ其家ノ氏ヲ稱ス

第二百四十四條 戶主ハ家族ニ對シテ養育及ヒ普通教育ノ費用ヲ負擔ス但家族カ自ラ其費用ヲ辨スルコトヲ得ルトキ又ハ戶主ノ許諾ヲ受ケスシテ他所ニ在ルトキハ此限ニ在ラス

第二百四十五條 家族ハ特別ニ職業ヲ營ムニ因リテ取得シタル利益及ヒ其齎帶シ又ハ遺産相續贈與若クハ遺贈ニ因リテ取得シタル財産ノ所有權ヲ有ス

然レトモ家族カ其家ノ爲メ消費シタル財産ニ付テハ戶主ニ對シテ償還ヲ求ムルコトヲ得ス

第二百四十六條 家族ハ婚姻又ハ養子縁組ヲ爲サントスルトキハ年齢ニ拘ハテス戶主ノ許諾ヲ受ケ可シ

第二百四十七條 他家ニ入りテ夫、婦又ハ養子ト爲リタル者ハ婚姻ノ無効、養子縁組ノ無効、離婚又ハ離縁ノ場合ニ於テハ實家ニ復歸ス

然レトモ此者カ婚姻又ハ養子縁組ニ付キ實家戶主ノ許諾ヲ受ケサリシトキハ戶主ハ復歸ノ事由ヲ知リタル日ヨリ一个月内身分取扱吏ニ申立テ復歸ヲ拒ムコトヲ得

第二百四十八條 他家ニ入りテ夫又ハ婦ト爲リタル者ハ其配偶者ノ死亡シタルトキト雖モ婚家ヨリ更ニ他ノ家ニ入ルコトヲ得ス

然レトモ婚家及ヒ實家ノ戶主ノ許諾ヲ受ケテ實家ニ復歸スルコトヲ得

第二百四十九條 實家ニ復歸ス可キ者又ハ復歸セントスル者カ復歸スル能ハサルトキハ一家ヲ新立ス

第二百五十條 推定家督相續人ニ非サル家族タル男子カ戶主ノ許諾ヲ受ケスシテ婚姻ヲ爲シタルトキハ一新ヲ新立ス

第二百五十一條 家督相續ニ因リテ戶主ト爲リタル者ハ其家ヲ廢スルコトヲ得ス但分家ヨリ本家ヲ承繼シ其他正當ノ事由アルトキハ區裁判所ノ許可ヲ得テ廢家スルコトヲ得

第二百五十二條 戶主カ國民分限ヲ喪失シタルトキハ廢家シタルモノトシ推定家督相續人ハ一家ヲ新立シ前戶主ノ家族ハ新戶主ノ家ニ入ル

第二百五十三條 戶主カ婚姻其他ノ原因ニ由リテ適法ニ廢家シ他家ニ入りタルトキハ其家族モ亦從テ其家ニ入ル

第二百五十四條 卑屬親ヲ有スル者カ婚姻若クハ養子縁組ノ無効又ハ離婚若クハ離縁ニ因リテ婚家又ハ縁家ヲ去ルトキハ卑屬親ハ仍ホ其家ニ屬ス

第二百五十五條 父母ノ知レサル子ハ一家ヲ新立ス

第二百五十六條 他家ニ入りテ夫、婦又ハ養子ト爲リタル者ハ配偶者又ハ養子ヲ爲シタル者ト協議ノ上兩家ノ戶主ノ許諾ヲ受ケテ實家ニ在ル卑屬親ヲ自家ニ引取ルコトヲ得

婚姻若クハ養子縁組ノ無効又ハ離婚若クハ離縁ニ因リテ婚家又ハ縁家ヲ去リタル者ハ配偶者又ハ養子ヲ爲セシ者ト協議ノ上兩家ノ戶主ノ許諾ヲ受ケテ其家ニ在ル卑屬親ヲ自家ニ引取ルコトヲ得

第二百五十七條 戶主カ家族ニ對シテ婚姻其他ノ事件ニ付許諾ヲ與フ可キ場合ニ於テ未成年ナルトキ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ戶主ニ對シテ親權ヲ行フ者又ハ後見人之ヲ代表ス

第二百五十八條 入夫婚姻ノ場合ニ於テハ婚姻中入夫ハ戸主ヲ代表シテ其權ヲ行フ  
第二百五十九條 戸主失踪ノ宣言アリタル後其家督相續ノ占有ヲ得タル者ハ其占有  
中戸主ノ權ヲ行フ

第二百六十條 單身戸主失踪ノ宣言アリテ其亡失若クハ最後音信ノ日ヨリ三十个  
年ニ至ルモ家督相續ノ占有者ナキトキハ絶家ス

第二百六十一條 戸主死亡シテ家督相續人ナキトキハ絶家シ其家族ハ一家ヲ新立ス  
第十四章 住所

第二百六十二條 民法上ノ住所ハ本籍地ニ在ルモノトス  
第二百六十三條 戸主ハ本籍ヲ移ス地ノ身分取扱吏ニ申述シテ住所ヲ變更スルコト  
ヲ得

未成年者又ハ民事上禁治産者タル戸主ノ住所ハ親族會ノ許可ヲ得テ後見人之ヲ變  
更スルコトヲ得

第二百六十四條 家族カ獨立シテ一家ヲ成ストキハ本籍ヲ定ムル地ノ身分取扱吏ニ  
其意思ヲ申述シテ住所ヲ設定スルコトヲ得

一家新立ノ未成年者ニ付テハ後見人住所ヲ設定ス可シ  
第二百六十五條 外國人始メテ日本ニ住所ヲ定ムルトキハ其意思並ニ本國、氏名及  
ヒ出生年月日ヲ其地ノ身分取扱吏ニ申述シ家族アルトキハ其氏名及ヒ出生年月日  
ヲモ申述ス可シ

第二百六十六條 本籍地カ生計ノ主要タル地ト異ナルトキハ主要地ヲ以テ住所ト爲  
ス

第二百六十七條 左ノ場合ニ於テハ居所ヲ以テ住所ニ代用ス

第一 住所ノ知レサルトキ

第二 日本ニ住所ヲ定メサル外國人ニ關スルトキ

第二百六十八條 何人ト雖モ或ル行爲又ハ事務ノ爲メニ假住所ヲ選定スルコトヲ得  
但此選定ハ書面ヲ以テスルコトヲ要ス

第十五章 失踪

第一節 失踪ノ推定

第二百六十九條 住所及ヒ居所ヨリ亡失シ又ハ音信絶エテ生死分明ナラサル人ハ之  
ヲ失踪者ト推定ス

此推定ノ裁判ハ本人ノ住所ノ區裁判所之ヲ爲ス  
第二百七十條 失踪ノ推定ヲ受ケタル者カ總理代理人ヲ定置キタルトキハ其代理  
人ハ失踪ノ推定中本人ノ財産ヲ管理ス但必要アルトキハ裁判所ハ現實ノ利益ヲ有  
スル關係人、推定相續人又ハ檢事ノ請求ニ因リテ代理人ノ解任ヲ言渡シ又ハ其後  
任ヲ指定スルコトヲ得

第二百七十一條 失踪ノ推定ヲ受ケタル者カ總理代理人ヲ定置カサリシトキハ裁判  
所ハ前條ニ掲ケタル者ノ請求ニ因リテ代理人ヲ指定ス

此代理人ニハ成ル可ク推定相續人ヲ指定スルコトヲ要ス  
第二百七十二條 代理人又ハ管理人ハ管理行爲ヲ爲ス權限ノミヲ有ス他ノ行爲ニ付  
テハ必要ノ場合ニ限り裁判所ノ許可ヲ得テ之ヲ爲スコトヲ得

代理人又ハ管理人ハ本人ノ利益ニ關係アル目錄調製、計算及ヒ清算ニ付テ本人ヲ  
代表ス

第二百七十三條 管理人ハ失踪者ノ動産及ヒ證書ノ目錄ヲ調製ス可シ又不動産ノ形

狀ヲ確定セシムル爲メ鑑定人ノ選定ヲ裁判所ニ請求スルコトヲ得鑑定人ノ報告書ハ裁判所ノ認可ニ付スルコトヲ要ス此等ノ手續ノ費用ハ本人ノ財産ヲ以テ之ヲ支辨ス

關係人、推定相續人又ハ檢事ノ請求アルトキハ本條ノ規定ヲ代理人ニ適用スルコトヲ得

第二百七十四條 代理人又ハ管理人ハ推定相續人ヲ除ク外其請求ニ因リテ裁判所ノ定メタル給料ヲ受ク裁判所ハ管理及ヒ財産返還ノ擔保トシテ保證人其他相當ノ擔保ヲ立テシムルコトヲ得

第二百七十五條 代理人又ハ管理人ハ失踪者ノ子孫ノ教育婚姻又ハ營業ノ爲メ資財ヲ與フルニ付テハ區裁判所ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス

第二節 失踪ノ宣告

第二百七十六條 失踪者カ代理人ヲ定置カサリシトキハ五個年又代理人ヲ定置キタルトキハ任期ノ長短ヲ問ハス七個年ニ至ルモ其生死ノ音信ヲ得サルニ於テハ失踪者ノ死亡ニ因リテ發生スル權利ヲ其財産上ニ有スル者ハ失踪者ノ住所ノ區裁判所ニ失踪ノ宣言ヲ請求スルコトヲ得

第二百七十七條 右請求ノ許ス可キモノナルトキハ裁判所ハ失踪者ノ住所及ヒ其最後ノ居所ノ地ニ於テ證人訊問ヲ爲ス可キコトヲ命ス可シ此證人訊問ニ付テハ民事訴訟法ニ定メタル忌避ノ規則ヲ適用セス

第二百七十八條 證人訊問ヲ命スル決定ハ裁判所ノ掲示板ニ揭示シ且官報又ハ公報ニ掲載シテ之ヲ公示ス可シ

第二百七十九條 失踪宣言ノ裁判ハ證人訊問ヲ命シタル決定ヨリ一個年ノ後ニ非サ

レハ之ヲ宣告スルコトヲ得ス

此裁判ハ前條ノ手續ニ從ヒテ之ヲ公示ス可シ

第三節 失踪宣言ノ効力

第二百八十條 失踪宣言ノ裁判アリタルトキハ失踪者ノ遺言書ハ關係人、推定相續人又ハ檢事ノ請求ニ因リテ之ヲ開封ス可シ

失踪者ノ死亡又ハ最後音信ノ日ニ於ケル推定相續人其他失踪者ノ死亡ニ因リテ發生スル權利ヲ其財産上ニ有スル者ハ直チニ其財産ヲ占有スルコトヲ得

第二百八十一條 失踪者ニ屬スル財産ノ占有ニ付テハ總テ相續ニ關スル規定ヲ適用ス

此占有ヲ得タル者ハ第三者ニ對シテハ財産ノ所有者トス

然レトモ占有者ハ推定相續人ヲ除ク外財産返還ノ擔保トシテ裁判所カ相當ト認ムル保證人其他ノ擔保ヲ立ツ可シ其保證人ノ義務又ハ擔保ハ十五個年ノ後止ム

第二百八十二條 失踪者ノ現出シ又ハ音信アリタルトキハ失踪宣言ノ効力ハ即時ニ止ム

失踪者ハ其財産ヲ現狀ノ儘ニテ取回シ又占有者ノ處分ニ因リテ不當ニ利得シタルモノヲ取戻スコトヲ得

第二百八十三條 果實ニ付テハ失踪者カ其死亡又ハ最後音信ノ日ヨリ十個年内ニ現出スルトキハ其五分ノ一ヲ取戻スコトヲ得十個年後ハ其全部ヲ失フ

第二百八十四條 失踪者ノ相續順位ニ在ル者ハ他ノ者カ財産占有ヲ得タル日ヨリ三十個年間其財産ノ返還ヲ請求スルコトヲ得

此場合ニ於テモ果實ハ前條ノ規定ニ從ヒテ之ヲ取戻スコトヲ得



第四節 失踪ノ推定及ヒ宣言ニ關スル通則

第二百八十五條 失踪シテ生存ノ確實ナラサル人ニ歸ス可キ權利ヲ請求スル者ハ其人カ權利ノ發生セシ日ニ生存シタルヲ證スルコトヲ要ス此舉證ヲ爲ササル間ハ其請求ヲ受理セス

第二百八十六條 失踪シテ生存ノ確實ナラサル人ニ歸ス可キ相續ハ次順位ノ者ニ屬ス

失踪者ニ歸ス可キ財産ヲ相續スル者ハ財産目錄ヲ調製ス可シ

第二百八十七條 前二條ノ規定ハ失踪者又ハ其相續人及ヒ承繼人ニ屬スル相續ノ請求其他ノ權利ヲ行フヲ妨グルコト無シ此等ノ權利ハ普通ノ時効ニ因ルニ非サレハ消滅セス

第五節 不在者ニ關スル規則

第二百八十八條 生存ノ確實ナル人カ住所若クハ居所ヲ去リテ其財産ヲ管理スル者アラサルトキ又ハ裁判所カ未タ失踪ヲ推定セサルモ本人ノ不在ノ爲メ其財産ノ放置セラルトキ又ハ失踪ノ推定中若クハ宣言後ニ失踪者ノ生存ノ確實ト爲リタルトキハ區裁判所ハ利害關係人又ハ檢事ノ請求ニ因リテ必要ノ保存處分ヲ命スルコトヲ得

第十六章 身分ニ關スル證書

第二百八十九條 出生、婚姻、養子縁組死亡其他各人ノ身分ニ關スル事件ハ身分取扱吏ノ主管スル帳簿ニ之ヲ記載ス可シ

第二百九十條 帳簿ニ記載シタル證書ハ公正證書ノ證據力ヲ有ス但違法ノ記載ハ効力ナシ合式ノ謄本ハ證書ト同一ノ効力ヲ有ス

第二百九十一條 帳簿ノ設備ナク若クハ中絶シタルトキ又ハ其全部若クハ一分ノ毀損シ亡滅シタルトキ又ハ其記載上甚シキ違式、錯誤若クハ脱漏アリテ信用ヲ置ク可カラサルトキ又ハ身分取扱吏ノ詐欺若クハ過失ニ因リテ證書ヲ作ラサリントキハ證人又ハ私ノ書類ヲ以テ先ツ其事實ヲ證シ且身分上ノ事件ヲ證スルコトヲ得

第二百九十二條 證書ノ訂正ハ裁判ヲ以テスルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第二百九十三條 帳簿ノ調製、證書ノ記載、届出ノ手續其他ノ事項ハ特別法ヲ以テ之ヲ規定ス

◎參照法令

朕増價競賣法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スルコトヲ命ス

御名 御璽

法律第九十二號

明治二十三年十月三日

増價競賣法

第一條 民法債權擔保編第二百六十五條ニ從ヒ抵當財産ノ増價競賣ヲ要スル債權者ハ第三所有者及ヒ前所有者ニ競賣ノ要求書ヲ送達シタルヨリ三日内ニ抵當財産所有地ノ區裁判所ニ競賣ノ申立ヲ爲シ且保證人又ハ擔保ノ認許ヲ求ム可シ

前項ノ手續ヲ爲ササルトキハ競賣ノ要求ハ當然無効ナリトス

第二條 競賣ノ申立ニハ民事訴訟法第六百四十二條第一號及ヒ第二號ニ掲クル諸件ノ外第三所持者及ヒ前所有者ノ表示擔保ノ表示第三所持者ノ提供シタル金額及ヒ

◎民法△參照法令

要求者ノ定メタル増額ヲ具備シ且民事訴訟法第六百四十三條第三號乃至第五號ノ證書ヲ添付スルコトヲ要ス

第三條 裁判所ハ期日ヲ定メテ要求者、第三所持者及ヒ前所有者ヲ呼出シ擔保ノ許否ニ付テノ決定ヲ爲ス可シ

否認ノ決定アリタルトキハ競賣ノ要求ハ當然無効ナリトス但競賣ノ要求ヲ爲ス權利アル他ノ債權者カ要求ニ參加スルノ申立ヲ爲シ又ハ期間ニ自ラ要求ヲ爲シタルトキハ右決定ヲ知りタルヨリ三日内ニ更ニ第一條ノ手續ヲ爲スコトヲ妨ケス

第四條 左ニ掲クル者ヲ增價競賣手續ニ於テノ利害關係人トス

第一 競賣要求者

第二 債務者

第三 第三所持者

第四 抵當債權者

第五 抵當財産ノ前所有者カ債務者ニ非サルトキハ其前所有者

第五條 裁判所ハ要求者ノ供シタル擔保ヲ十分ナリトスルトキハ競賣手續ノ開始決定ヲ爲シ同時ニ競賣期日及ヒ競落期日ヲ定メテ公告ス可シ

第六條 競賣期日ノ公告ニハ民事訴訟法第六百五十八條第一號乃至第三號、第五號、第七號乃至第十號ニ掲クル諸件ノ外增價競賣ノ要求ニ因リ競賣ヲ爲ス旨及ヒ最低競賣價額トシテ提供價額ニ附シタル増額ヲ具備スルコトヲ要ス

此他競賣及ヒ競落ノ手續ニ付テハ民事訴訟法第六百五十九條乃至第六百六十一條第六百六十三條乃至第六百六十九條第六百七十一條、第六百七十二條、第二號及ヒ第四號乃至第八號、第六百七十三號、第六百七十四條、第六百七十六條乃至第六百八十七條ノ規定ヲ準用ス

商法第二編  
第八章第三節  
參看

第七條 競賣期日ニ於テ許ス可キ競買價額ノ申出ナキトキハ裁判所ハ要求者ヲ競落人ナリト言渡ス可シ

第八條 競落人ナリト言渡サレタル者カ要求者ナルト否トヲ問ハス競落代價ノ全額支拂ニ至ルマテハ要求者ノ供シタル擔保ハ負擔ヲ免カルコト無シ

第九條 裁判所ハ要求者ノ申立アルトキハ競賣ニ換ヘテ入札拂ヲ命ス可シ  
前項ノ場合ニ於テハ民事訴訟法第七百二條但書及ヒ第七百三條乃至第七百五條ノ規定ヲ適用ス

第十條 增價競賣ニ依ル競落ニ對シテハ更ニ增價競賣ノ要求ヲ爲スコトヲ許サス

朕財産委棄法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

御名 御璽

法律第九十四號 明治二十三年十月三日

財産委棄法

第一條 無資力ナル債務者ニシテ惡意ノ證ナキ者ハ動産又ハ不動産ノ差押ヲ受ケタルモ競賣ニ至ルマテハ無資力ノ原因タル不幸ノ事情又ハ管理ノ過失ヲ陳述シテ債權者ニ對シ自己ノ財産ノ委棄ヲ其住所在地ノ裁判所ニ請求スルコトヲ得

債權者ハ總債權者ノ氏名及ヒ分限ト各債權者ノ債權ノ元本及ヒ利息トヲ右請求ニ附記スルコトヲ要ス

第二條 財産ノ委棄ハ協諧契約ニ關シ商法ニ規定シタル方式及ヒ條件ニ從ヒテ債權者ノ承諾ヲ受クルコトヲ要ス

●民法△參照法令

第三條 債權者ノ承諾シタル財産ノ委棄ハ裁判所ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス  
此他財産ノ委棄ニ付テハ家資分散ニ關スル法律ノ適用ヲ妨ケス

朕非訟事件手續法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ  
施行スヘキコトヲ命ス

御名 御璽

法律第九十五號

明治二十三年  
十月三日

非訟事件手續法

第一章 認可及ヒ許可ノ申請手續

第一條 民法ノ規定ニ從ヒ區裁判所ノ認可又ハ許可ヲ求ムル申請ハ書面又ハ口頭ヲ  
以テ之ヲ爲スコトヲ得

第二條 前條ノ申請ニ付テハ裁判所ハ事情ニ從ヒ利害關係人ノ出頭又ハ當事者ノ自  
身出頭ヲ命シ公開セサル法廷ニ於テ審訊スルコトヲ得

第三條 申請ニ付テノ決定ニ對シテハ民事訴訟法ノ規定ニ從ヒ即時抗告ヲ爲スコト  
ヲ得

第二章 失踪事件ニ關スル請求手續

第四條 失踪ノ推定、宣言又ハ財産占有有其他ノ請求ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲ス  
コトヲ得

請求ニハ其理由トスル事實ヲ表示シ且證據書類アルトキハ之ヲ添付ス可シ

第五條 前條各種ノ請求ハ之ヲ併合スルコトヲ得

第六條 失踪ノ推定又ハ宣言ノ請求ニ付テハ前二條ノ外尙ホ左ノ手續ニ從フ

裁判所ハ請求ニ表示シタル事實ヲ調査シ職權ヲ以テ失踪ノ推定又ハ宣言ヲ爲スヘ  
キヤ否ヤヲ定ムル爲メ證人訊問ヲ命ス可シ

證人ノ訊問及ヒ宣誓ニ付テハ忌避ノ規則ヲ除ク外民事訴訟法第二編第一章第六節  
ノ規定ヲ適用ス

第七條 檢事ハ證人訊問ニ立會ヒ決定前ニ其意見ヲ陳述ス可シ

第八條 失踪ノ推定又ハ宣言ヲ言渡ス決定ハ裁判所ノ掲示板ニ揭示シ且官報又ハ公  
報ニ掲載シテ之ヲ公示ス可シ

此決定ニ對シテハ請求者又ハ檢事ヨリ民事訴訟法ノ規定ニ從ヒ即時抗告ヲ爲スコ  
トヲ得失踪者ノ定置キタル總理代理人モ亦同シ

第九條 失踪事件ノ請求ニ關スル費用ハ其推定又ハ宣言ヲ言渡シタルトキハ本人ノ  
財産ヲ以テ之ヲ支辨シ若シ之ヲ言渡ササルトキハ請求者之ヲ負擔ス但檢事請求ヲ  
爲シタルトキハ本人ノ負擔トス

第三章 相續ノ限定受諾ニ關スル手續

第十條 限定受諾者ハ適法ノ期間内ニ相續財産拂盡ノ計算ヲ完了シ其計算書ヲ相續  
地ノ區裁判所ニ差出ス可シ

第十一條 利害關係人ハ自己ノ費用ヲ以テ區裁判所ニ計算書ノ閱覽及ヒ其謄本ノ下  
付ヲ求ムルコトヲ得

第十二條 法律上又ハ裁判上相續財産ヲ管理スル者ハ限定受諾者ト同シク計算完了  
ノ責ニ任ス

第四章 國ニ屬スル相續財産領收ノ手續

第十三條 相續人アラサル財産アルトキハ相續地ノ地方行政官廳ハ財産所在地ノ區  
裁判所ニ其引渡ヲ請求ス可シ

●民法△參照法令

第十四條 財産引渡ノ請求ヲ受ケタル裁判所ハ事實ヲ調査シ其請求ヲ公示ス可シ  
第十五條 公示ハ左ノ條件ヲ具備シ請求ヲ受ケタル區裁判所ノ掲示板ニ掲示シ且官報又ハ公報ニ掲載シテ之ヲ爲ス可シ

第一 被相続人ノ氏名、職業、住所、居所及ヒ死亡ノ年月日

第二 財産引渡ノ請求ノ要領

第十六條 民法ノ規定ニ從ヒ相續權ヲ有スル者ハ公示ノ日ヨリ六个月内ニ行政官廳ノ請求ニ對シ其請求ヲ受ケタル裁判所ニ異議ヲ申立ツルコトヲ得

第十七條 前條ノ期間内異議ノ申立アラス又ハ其申立チ不當ト爲ス裁判確定シタルトキハ裁判所ハ民法財産取得編第三百四十六條ノ規定ニ從ヒテ保存スル供託所ノ金額領收證ヲ請求者タル行政官廳ニ交付ス可シ

第五章 財産ノ封印及ヒ目錄調製ノ手續

第十八條 財産ノ封印ハ利害關係人又ハ檢事ノ請求ニ因リ其財産所在地ノ區裁判所判事之ヲ爲ス

封印ニハ官印ヲ用ユ可シ

第十九條 封印ヲ爲ス可キ財産方遠隔ノ地ニ在ルトキハ區裁判所判事ハ市町村長ニ囑託シテ封印ヲ爲サシムルヲ得封印ノ除去及ヒ財産目錄ノ調製ニ付テモ亦同シ囑託ヲ受ケタル市町村長ニ付テモ下數條ノ規定ヲ準用ス

第二十條 封印ハ證人二人立會ノ上之ヲ爲ス可シ  
封印ヲ請求シタル者ハ其封印ニ立會フコトヲ得

第二十一條 封印ヲ爲シタルトキハ直チニ調書ヲ作り立會人之ニ署名捺印ス可シ若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ區裁判所判事其事由ヲ附記ス可シ

第二十二條 調書ニハ左ノ諸件ヲ具備ス可シ

第一 封印ヲ請求シタル者ノ氏名、職業及住所

第二 封印ノ理由

第三 封印ヲ爲シタル場所及ヒ物

第二十三條 日用品其他封印ヲ附セサル物アルトキハ之ヲ調書ニ畧記ス可シ

第二十四條 封印ヲ附シタル物ニ鎖鑰アルトキハ之ヲ閉鎖シテ封印除去ニ至ルマテ區裁判所書記課其鑰ヲ預ル可シ

第二十五條 封印ヲ終リタルトキハ其財産ノ保管人ヲ命ス可シ但保管人ハ成年者タルコトヲ要ス

第二十六條 區裁判所判事封印ノ請求ヲ受ケタルトキハ速ニ之ヲ爲ス可シ若シ後レタルトキハ其理由ヲ調書ニ記載スルコトヲ要ス

第二十七條 封印ノ調書ハ判事ト同伴シタル書記之ヲ二通ニ作り其一通ハ區裁判所ノ書記課ニ保存シテ他ノ一通ハ封印請求者又ハ保管人ニ交付シ受領證ヲ取置ク可シ

第二十八條 何人ニ限ラス區裁判所判事ヨリ封印ノ立會ヲ求メラレタル者正當ノ理由ナクシテ之ヲ拒ムトキハ刑法第七十九條ニ掲ケタル刑ニ處ス

第二十九條 封印ノ除去ヲ請求スル權利ヲ有スル者左ノ如シ  
第一 封印ヲ請求スル權利ヲ有スル者

第二 財産ノ管理人

第三十條 封印ノ除去ハ豫メ其日時ヲ定メ既ニ知レタル利害關係人及ヒ財産ノ管理人ニ之ヲ通知スヘシ

通知ヲ受ケテ封印除去ノ異議ヲ申立テス且除去ニ立會ハサル者ハ其除去ヲ承諾シタルモノト看做ス

（刑法第百七十九條）  
醫師、化學家、  
其他職業ニ  
因リ官署ヨ  
リ解任分析  
又ハ鑑定ヲ  
命セラレタ  
ル者故ナク  
シテ之ヲ肯  
セサル時ハ  
四回以上四  
十回以下ノ  
罰金ニ處ス